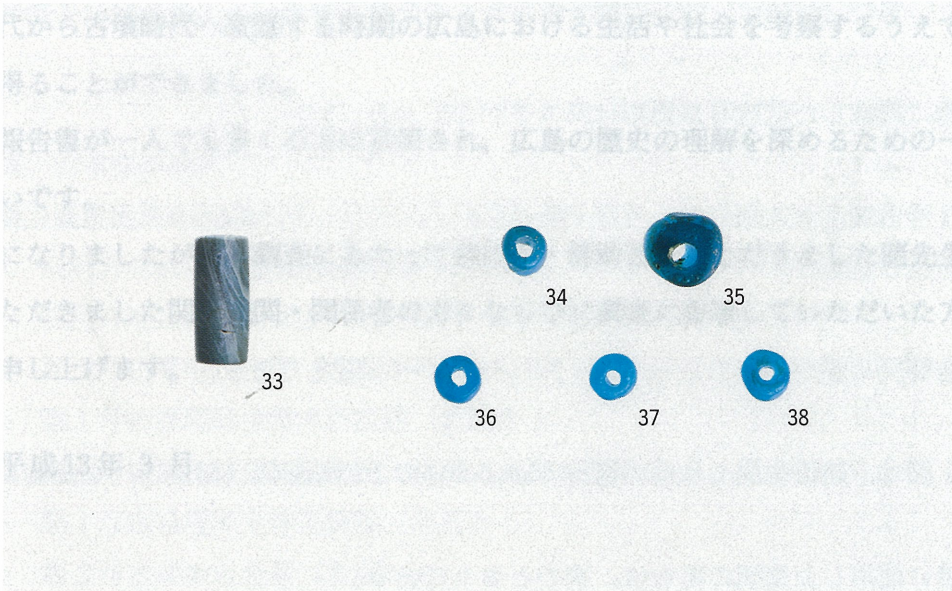
(財) 広島市文化財団発掘調査報告書　第6集

成岡A地点遺跡

―広島市安芸区中野東二丁目所在―

2001

財団法人広島市文化財団



古墳出土遺物

はしがき

広島市安芸区の瀬野川流域は，両岸に山々がそびえる，豊富な自然に恵まれた町です。

また，現在の広島市域と東広島市域を結ぶ交通の要衝として，古代の山陽道から現代のＪＲ山陽本線・国道２号に至るまで幹線が通り，深い歴史を刻んできました。そのことを示すように，丘陵上には貝塚や古墳，中世の山城など，数多くの遺跡が確認されていますが，現在まで，そのほとんどは調査されず保存されてきました。

ところで，瀬野川地域の国道２号は，以前から渋滞が慢性化しており，また交通事故が多発していました。これらの問題を解決するために，現在，東広島バイパスの建設が進められています。このバイパスに接続する市道の建設区域内から発見されたのが，成岡Ａ地点遺跡です。

調査の結果，弥生時代終末期から古墳時代に造られた古墳３基と集落跡を確認しました。

特に古墳は，市域全体でも数少ない古墳時代初頭に築造されたもので，瀬野川流域では初めての調査例となりました。また，土器・鉄器‘石器・玉類などの遺物も出土しており，弥生時代から古墳時代へ変遷する時期の広島における生活や社会を考察するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され，広島の歴史の理解を深めるための一助になれば幸いです。

最後になりましたが，本調査にあたって御指導・御助言をいただきました諸先生方，御協力いただきました関係機関・関係者の方々ならびに調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成１３年３月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例　　言

1．本書は広島市安芸区中野東二丁目における市道安芸１区押手線建設工事に伴い，平成11年度に実施した成岡Ａ地点遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，広島市安芸区役所農林建設部土木課から委託を受け，財団法人広島市文化財団が実施した。

3．本書の執筆・編集は，Ⅰ・Ⅲ－２・Ⅳ－３は田村規充が，Ⅱ・Ⅲ－１・Ⅳ－１，２，４は荒川正己が，Ⅲ－２－（３)－①は若島一則がそれぞれ分担して実施した。

4．遺構の実測及び写真撮影は，荒川・田村が実施した。遺物の実測及び図面の製図は，荒川・田村・福原茂樹・岡野孝子が，写真撮影は荒川が実施した。

5．人骨の取り上げ及び分析は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に依頼した。また，付編は，同じく松下孝幸氏に委託したもので，一部改変して掲載した。

6．本書に掲載した航空写真撮影は，スタジオ・ユニに委託した。

7．第３号古墳出土の剣の布と木質・鑑の矢柄・ガラス小玉，またＳＨ１出土炭化材に関する分析及び調査は，パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

8．本書挿図に使用した方位は，第１図以外はすべて磁北である。

9．第１図は，建設省国土地理院発行の50,000分の１の地形図（海田市）を複製した。

10．本書に使用した遺構の略号は，次のとおりである。
ＳＨ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＸ：テラス状遺構　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット

11．本遺跡発掘調査で得られた資料は，広島市教育委員会から委託を受けて・財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　位置と環境…… 2
Ⅲ　遺構と遺物
　1　古墳…… 6
　2　その他の遺構…… 37
Ⅳ　ま　と　め…… 66
付編
　広島市成岡第２号古墳出土の人骨…… 71
　成岡Ａ地点遺跡出土遺物の自然科学分析…… 84

付 表　目　次

第１表　古墳出土土器観察表…… 18
第２表　骨鎌形鉄鎌観察表…… 36
第３表　その他の遺構出土土器観察表…… 62

図　版　目　次

巻頭図版　古墳出土遺物
図版表紙　成岡Ａ地点遺跡遠景（航空写真・北東から）
図版１ａ　成岡Ａ地点遺跡調査前（航空写真・東から）
　　ｂ　成岡Ａ地点遺跡調査後（航空写真・東から）
図版２ａ　第１号古墳墳丘全景（北東から）
　　ｂ　第１号古墳埋葬主体木棺痕跡（北西から）
図版３ａ　第１号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）
　　ｂ　第１号古墳埋葬主体完掘後（北西から）
図版４ａ　第２号古墳墳丘全景（北東から）
　　ｂ　第２号古墳墳丘全景（西から）
図版５ａ　第２号古墳埋葬主体石棺開棺前（北西から）
　　ｂ　第２号古墳埋葬主体石棺開棺後（北西から）
図版６ａ　第２号古墳埋葬主体人骨出土状況（北西から）
　　ｂ　第２号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）
図版７ａ　第３号古墳墳丘全景（東から）
　　ｂ　第３号古墳墳丘全景（南から）
図版８ａ　第３号古墳第１主体木棺痕跡検出状況（北東から）
　　ｂ　第３号古墳第１主体棺台土及び遺物出土状況（北東から）

図版 9　a　第３号古墳第１主体棺台土及び遺物出土状況（北西から）
　　b　第３号古墳第１主体鉄剣等出土状況（南東から）
図版 10 a　第３号古墳第１主体完掘後（北東から）
　　b　第３号古墳第２主体（南から）
図版 11 a　第３号古墳第３主体（南東から）
　　b　第３号古墳第４主体（南東から）
　　c　第３号古墳第５主体（東から）
図版 12 a　第３号古墳第６主体（南東から）
　　b　第３号古墳第７主体（東から）
　　c　第３号古墳第８主体（北東から）
図版 13 a　第３号古墳第９主体（東から）
　　b　第３号古墳第 10 主体木棺痕跡（北西から）
図版 14 a　第３号古墳第 10 主体完掘後（北西から）
　　b　古墳遺構出土遺物（１）
図版 15　古墳遺構出土遺物（２）
図版 16　鉄剣付着布片顕微鏡写真
図版 17　鉄剣付着木材顕微鏡写真
図版 18 a　ＳＨ１炭化材出土状況（北から）
　　b　ＳＨ１（北から）
図版 19 a　ＳＢ１（南から）
　　b　ＳＸ１（北東から）
図版 20 a　ＳＸ１土器出土状況（南東から）
　　b　ＳＨ２（南東から）
図版 21 a　ＳＫ１（北東から）
　　b　ＳＫ２（東から）
　　c　ＳＫ３（東から）
図版 22 a　ＳＨ３（北から）
　　b　ＳＸ２（東から）
図版 23 a　ＳＸ２土器だまり（東から）
　　b　ＳＸ３（北から）
図版 24 a　ＳＫ４（北東から）
　　b　ＳＫ４　貝層出土状況（東から）
　　c　ＳＫ５（北東から）
図版 25　その他の遺構出土遺物(1)
図版 26　その他の遺構出土遺物(2)
図版 27　その他の遺構出土遺物(3)

図版 28　その他の遺構出土遺物(4)
図版 29　その他の遺構出土遺物(5)
図版 30　その他の遺構出土遺物(6)
図版 31　成岡第２号古墳出土人骨（男性・老年）
図版 32　成岡第２号古墳出土人骨（男性・老年）

挿　図　目　次

第１図　成岡Ａ地点遺跡の位置と周辺遺跡分布図…… 3
第２図　成岡Ａ地点遺跡遺構配置図…… 7
第３図　第１号古墳実測図…… 9
第４図　第１号古墳埋葬主体実測図…… 9
第５図　第１号古墳埋葬主体遺物出土状況実測図…… 11
第６図　第１号古墳出土遺物実測図…… 11
第７図　第２号古墳実測図・土層断面図…… 13
第８図　第２号古墳埋葬主体実測図…… 15
第９図　第２号古墳埋葬主体人骨・遺物出土状況実測図…… 17
第 10 図　第２号古墳出土遺物実測図…… 17
第 11 図　第３号古墳実測図…… 19
第 12 図　第３号古墳第１主体実測図…… 21
第 13 図　第３号古墳第１主体遺物出土状況実測図…… 26
第 14 図　第３号古墳第２主体実測図…… 28
第 15 図　第３号古墳第３主体実測図…… 28
第 16 図　第３号古墳第４主体実測図…… 28
第 17 図　第３号古墳第５主体実測図…… 29
第 18 図　第３号古墳第６主体実測図…… 29
第 19 図　第３号古墳第７主体実測図…… 29
第 20 図　第３号古墳第８主体実測図…… 31
第 21 図　第３号古墳第９主体実測図…… 31
第 22 図　第３号古墳第 10 主体実測図…… 33
第 23 図　第３号古墳出土遺物実測図［１］…… 33
第 24 図　第３号古墳出土遺物実測図［２］…… 34
第 25 図　ＳＨ１実測図…… 38
第 26 図　ＳＨ１炭化材出土状況実測図…… 38
第 27 図　ＳＢ１実測図…… 40
第 28 図　ＳＫ１実測図…… 40
第 29 図　ＳＸ１・ＳＨ２実測図…… 41

第31図　ＳＨ３実測図…… 45
第32図　ＳＫ２実測図…… 45
第32図　ＳＫ３実測図…… 45
第33図　ＳＸ２実測図…… 47
第34図　ＳＫ４実測図…… 50
第35図　ＳＫ５実測図…… 50
第36図　ＳＸ３実測図…… 51
第37図　その他の遺構出土遺物実測図［１］…… 55
第38図　その他の遺構出土遺物実測図［２］…… 56
第39図　その他の遺構出土遺物実測図［３］…… 57
第40図　その他の遺構出土遺物実測図［４］…… 58
第41図　その他の遺構出土遺物実測図［５］…… 59
第42図　その他の遺構出土遺物実測図［６］…… 60
第43図　その他の遺構出土遺物実測図［７］…… 61

Ⅰ　は　じ　め　に

広島市教育委員会（以下市教委とする）は，平成10年1月26日に，広島市安芸区役所農林建設部土木課（以下安芸区役所とする）から「市道安芸1区押手線」工事区域内における文化財等の有無及び取り扱いについて照会を受けた。市教委は，当該区域内に周知遺跡として成岡遺跡が存在し，計画範囲には少なくとも2基の古墳がかかることを確認し，同年9月21日に，安芸区役所に対して，この旨を回答した。遺跡の取り扱いについて，市教委と安芸区役所は協議をしたが，計画の変更は困難との結論に達し，記録保存の措置を講ずることとなった。安芸区役所は，平成10年10月30日付で，財団法人広島市文化財団（以下文化財団とする）に発掘調査及び報告書作成の実施を依頼した。これを受けて，文化財団文化科学部文化財課では現地調査を平成11年7月から平成12年2月にかけて実施した。報告書作成は，平成12年3月から平成13年3月にかけて実施した。

調査委託者　広島市安芸区役所　農林建設部土木課
調査主体　　財団法人広島市文化財団
調査担当課　財団法人広島市文化財団　文化科学部　文化財課
調査関係者　竹本　輝男　常務理事
　　堂官　正昭　文化科学部長
　　佐川　　清　文化財課長（平成11年度）
　　石田　彰紀　文化財課長（平成12年度）
　　若島　一則　文化財課主任指導主事（平成12年度）
　　今田日出登　文化財課主任
　　福原　茂樹　文化財課指導主事
調　査　者　荒川　正己　文化財課学芸員
　　田村　規充　文化財課学芸員
調査補助員（50音順）
乾操子　今田章範　岩村京子　大塚勝宏　梶谷ミエ子　加藤恒子　酒本由理郁　佐藤信子
柴田昌記　菅原彰子　住川香代子　住川義治　住本亥司雄　高木素子　中野信義　西村清志
野田希和子　橋本礼子　秦次雄　浜田由倭子　濱本文夫　藤岡真弓　藤本信之　古本弘
森田美恵子　森田美智子　矢島とみえ　横光美里　和田実千代

また，広島市安芸区役所農林建設部土木課，広島市教育委員会，中野公民館の職員の方々，成岡自治会及び中野地区の住民の方々には，調査を円滑に進めるにあたり多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに，調査期間中及び報告書作成にあたり，埋蔵文化財発掘調査指導委員会の広島大学名誉教授潮見浩氏，同文学部教授川越哲志氏，同教授河瀬正利氏，同助教授古瀬清秀氏から貴重な御指導，御助言をいただいた。また土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏・島根県埋蔵文化財調査センター大庭俊次氏，同原田敏照氏，同松山智弘氏，京都府埋蔵文化財調査センター黒坪一樹氏，同福島孝行氏から広範な御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

Ⅱ　位置と歴史的環境

成岡Ａ地点遺跡は広島市安芸区中野東二丁目19番地に所在する。

安芸区は，広島県南西部を占める広島市の南東部に位置し，北東で東広島市，南西で安芸郡海田町と接している。その北半を構成するのが中野東二丁目を含む旧瀬野川町域である。

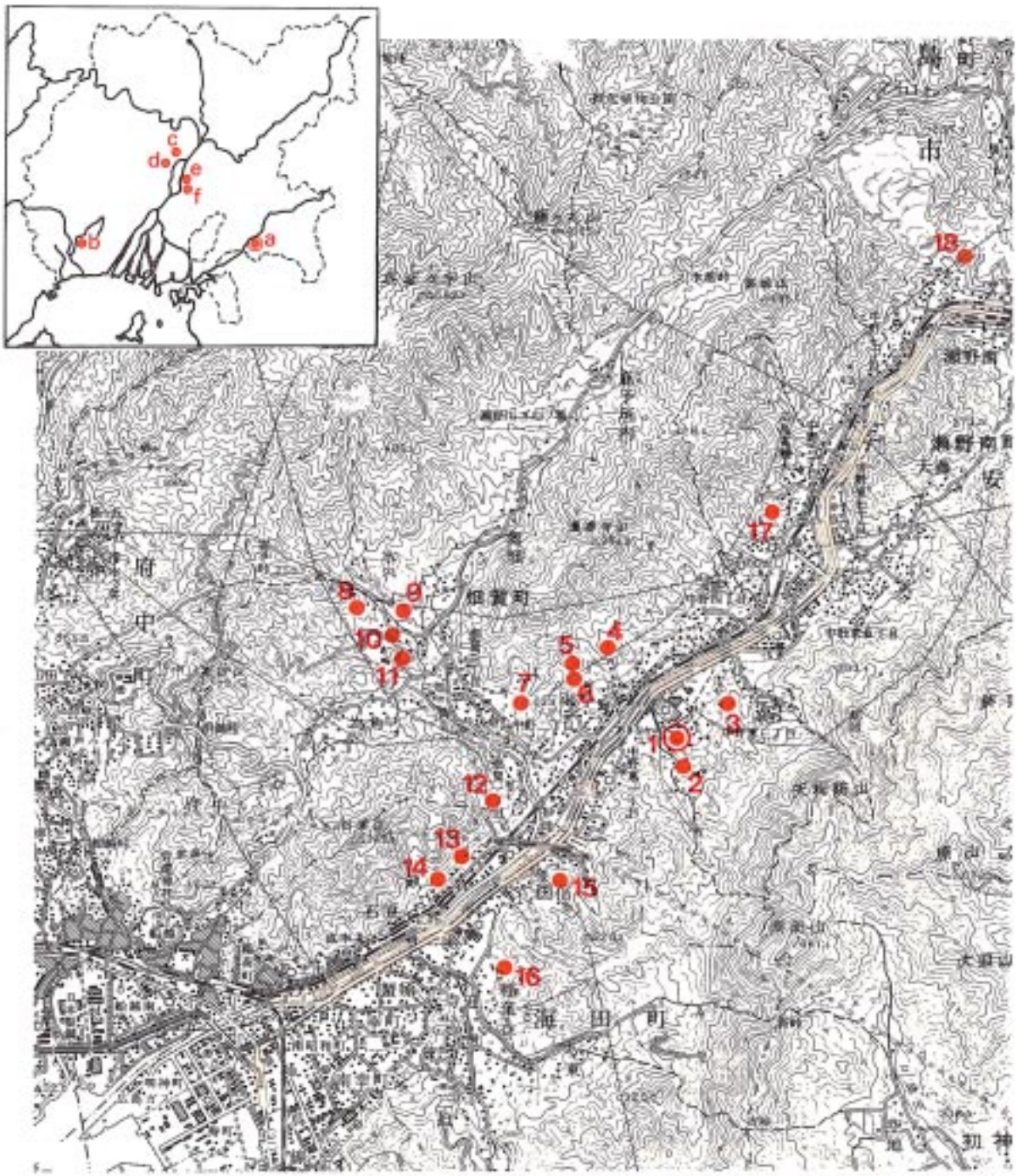
旧瀬野川町域は，賀茂台地の南西部から北東－南西方向に延びる３つの山列が存在する。町域の北側の呉娑々宇山（標高682.2ｍ）に代表される山列，町域の南側の鉾取山（標高711.5ｍ）に代表される山列，その２つの山列に挟まれた形の蓮華寺山（標高374ｍ）に代表される山列である。この中央の山列と南側の山列の間を流れるのが，東広島市八本松町および志和町に源を発する瀬野川である。瀬野川は，熊野川，榎ノ山川，畑賀川など，大小の支流と合流しつつ，安芸郡海田町を経て，広島湾東部に位置する海田湾に至る。支流が合流する地点を中心に平地が分布するが，両岸とも山塊が迫っているため，一般にその面積は狭い。その中で最大の平地が広がっているのが中野地区と畑賀地区である。中野地区の平地は瀬野川中流域の両岸に広がり，畑賀地区はその北岸域南端に接し，畑賀川沿いに広がる1)。

本遺跡は，この中野地区の瀬野川南岸域南端，天狗防山（標高591ｍ）から瀬野川東岸に向かって延びる丘陵の標高50～60ｍに位置し，中野地区の平地が一望できる。この尾根は天狗防山から一旦北西に派生し，本遺跡のある先端部分で北東に向きを変えている。尾根の東西には，やや傾斜が急であるものの，平地が広がる谷が位置し，それぞれ成岡川・押手川が瀬野川に向かって北に流れており，近年まで棚田が営まれていた。

さて，瀬野川本流が流れる谷筋は，現在国道２号やJR山陽本線が通り，西条盆地と広島湾岸を結ぶ交通の要衝であるが，その歴史は古く古代の山陽道までさかのぼる。古代山陽道の経路は，西条盆地の八本松から中野地区までは瀬野川本流の谷筋を通り，畑賀地区で進路を北に変え，畑賀川の谷筋を経由して安芸府中に至ったと考えられている。安芸国に設置された13か所の駅家のうち，荒山駅が比定されているのも中野地区である2)。また，畑賀方面に曲がらず，瀬野川を下れば広島湾東岸域へいたる。加えて，瀬野川源流域の一つ，志和町からは，広島市域北部の白木町を経由し，三次盆地へと抜けることができる。いうなれば中野・畑賀地区は，広島市域東部における交差点とも言うべき位置をしめているのである。

以上のような地理的条件のためか，中野・畑賀周辺は，開発の歴史も古く，古代には既に世能荒山荘として荘園も設置されていたと記録されている3)。さらに時間を遡れば，畑賀地区周辺の丘陵上で古墳時代中期以降の古墳が複数確認されている。箱式石棺ないし竪穴式石室を主体とする大師堂裏山古墳群4)･中須賀古墳群5)や，横穴式石室を主体とする大師堂裏古墳6)･こもり塚古墳群7)･畝観音免古墳群巳8)などである。中でも，中須賀古墳群中からは銅鏡なども出土しており，周辺を治める豪族の墓であったものと考えられている。

しかしながら，瀬野川流域では本格的な発掘調査がほとんど行われていないため，古墳時代前期以前に遡る遺跡はほとんど確認されていない。わずかに井原遺跡・山王貝塚・中須賀神社境内遺跡など数か所で，弥生時代後期の遺物が確認されており9)，少なくとも弥生時代後期以降何らかの定住



第１図　成岡Ａ地点遺跡の位置と周辺遺跡分布図（Ｓ＝1:50,000）

生活は存在していたとは考えられるが，古墳時代前期までの状況は推定することさえ困難な状況である。そこで，広島市の他地域における弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡について概観しておきたい。

現在，広島市域において確認されている弥生時代の集落遺跡は，後期のものが大半で，市域中心部の太田川下流域や市域西部の八幡川・石内川流域に多数分布している。いずれも丘陵上に立地することを特徴としており，これは市域の主な河川沿いの平地の大半は氾濫原で農業用地に適さないため，その支流などが形成する小扇状地や谷間の狭い平地を農業用地とし，集落は低丘陵上に営まれたためと考えられている10)。さらに，これらの集落は，規模と存続時期から，住居跡約70軒等が確認された毘沙門台遺跡11)をはじめ，10軒以上の住居跡から成り，弥生時代後期前葉から終末・古墳時代初頭まで存続する大規模なものと，数軒程度の住居跡からなる比較的小規模なものに大別できる。この2種類の集落跡は，主要な河川の支流ごとに，拠点となる大規模集落と，そこから派生・分村した小規模集落という関係にあると捉える考え方もある12)。

このような弥生集落の発展を基礎に，太田川下流域では東岸域の弘住第3号古墳13)，史跡中小田第1号古墳14)が，また同西岸域では宇那木山第2号古墳15)･神宮山第1号古墳16)などが，古墳時代前期に築造されたと考えられている。このうち中小田第1号古墳は全長約30mの前方後円墳と考えられており，竪穴式石室から三角縁神獣鏡や車輪石が出土している。また，宇那木山第2号古墳は全長40mの前方後円墳で，竪穴式石室から画文帯神獣鏡が出土している。そのやや南に位置する神宮山第1号古墳も全長約30mの前方後円墳で，後円部の箱式石棺の1基から内行花文鏡片が出土している。これらの古墳は，規模・墳形・埋葬主体・副葬品など，畿内政権との強い結びつきをうかがわせる定型的な前期古墳であり，その被葬者は，太田川下流域のというよりは，安芸西部に影響力を持った人物が想定される。一方，弘住第3号古墳は，墳丘は直径25mの円墳に3m以上の突出部を持つ双方中円形で，埋葬主体は太田川下流域の弥生墳丘墓に祖形を持つ，主に河原石を用いた竪穴式石室である。この石室内からは古式土師器の他，副葬品と考えられる大型の鉄鏃形鉄製品や定角式鉄鏃1点を含む31点の鉄鏃，さらに槍先や鉈など，多数の鉄製品などが出土している。墳形や埋葬主体は弥生時代の系譜を引くもので，非常に強い在地性を示すものの，鉄器，特に鏃は，畿内との関係の強さをうかがわせるに十分である。前述の3基の前方後円墳に対し，弥生時代から続いて太田川下流域を根拠とする集団の首長墓と見ることが出来る。

また，近年の調査によって，八幡川流域の城ノ下第6号古墳17)も古墳時代初頭に遡る古式古墳であることが判明した。この古墳は一辺10mの方墳で，埋葬主体は木槨木棺墓の可能性が高いなど，弘住第3号古墳同様，弥生墳丘墓の伝統を残す在地性の強い古墳と考えられている。なお副葬品は確認されていないが，広島市域では類例の無い発生期の古墳に見られる土師器の複合口縁壷形土器が出土しており，その入手経路が注目される。ところで，城ノ下古墳群には第6号古墳に先行する古墳＝プレ3号古墳も存在していたことが推定されている18)。プレ3号古墳は後世の削平が著しく，概要さえ明らかではない。しかし，その位置から，プレ3号古墳を中心に第6号古墳をはじめ4基の古墳が，古墳時代前期に築造されたと推定されている。城ノ下古墳群は，当該期に古墳を築造できる勢力が，太田川下流域に限られた存在ではなかったことを示すだけでなく，在地性の強い古墳群

の構成と，その母集団の社会的構造を考える上でも，貴重な調査例となっている。

以上のように，広島市域，特に広島湾沿岸地域における古墳時代初頭から前期前半の状況は，太田川下流域を中心に徐々に明らかになりはじめている。しかしながら，その東部域を形成する瀬野川流域の状況は，前述のとおり，古墳時代中期以降の繁栄の様子に比べ，それ以前の弥生時代後期から古墳時代前期の様子はほとんど明らかではない。瀬野川流域における前期古墳の有無は，この地域の歴史的推移を考えるだけでなく，弥生時代後期から古墳出現期における広島市域全体の社会的状況の復元を行うに当たって非常に重要な要素であり，その確認と調査が長く待たれていたのである。

注

１．広島市役所編『瀬野川町史』1980 年
２．財団法人広島市歴史科学教育事業団編『古路・古道調査報告』広島市教育委員会　1992 年
３．１に同じ。
４．１に同じ。
５．１に同じ。
６．１に同じ。
７．１に同じ。
８．河瀬正利『畝観音免古墳群』畝観音免古墳群調査団　1979 年
９．１に同じ。
10．財団法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』1991 年
11．未報告のため，詳細は不明である。
12．10 に同じ。
13．広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983 年
14．広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室『中小田古墳群』1980 年
15．河瀬正利「広島のあゆみ　原始・古代３古墳時代」『図説広島市史』1989 年
16．15 に同じ。
17．財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』1991 年
18．17 に同じ。

Ⅲ　遺　構　と　遺　物

調査の概要（第２図）

本遺跡は，天狗防山の山頂部から北西の瀬野川に向かって派生する尾根筋の一つに位置する。この尾根は天狗防山の山裾の緩傾斜部に属するが，周囲が住宅地や水田によって囲まれているため一見独立丘陵状で，最高所を中心に南側と北東側に尾根筋が延びている。南側尾根筋は標高約 74 ｍの最高所から緩やかに約 10 ｍ下りながら標高約 64 ｍで天狗防山の山裾に連なる。一方，北東側は標高 50 ｍまで約 24 ｍ緩やかに下った後，急激に周辺の水田面へと下がる。調査範囲は，北東側尾根筋に位置し，最高所から約 10 ～ 24 ｍ，標高約 64 ｍ～ 50 ｍの間である。

調査範囲を含む北東側緩斜面は，調査前の地形観察によって，最高所から約 10 ～ 12 ｍの間は標高約 64 ｍ～ 62 ｍのほぼ平坦な面（以下 64 ｍ平坦面）がひろがり，その北東側に続く緩斜面（以下緩斜面）中には標高約 57 ｍと標高約 53 ｍの２か所で小規模な平坦面が観察できた。広島市教育委員会の試掘調査では，トレンチを平坦面上に１本，また緩斜面上の標高 57 ｍ地点の小平坦面上とその東に隣接して合計２本設定し，この内小平担面上のトレンチで古墳の主体部を確認した。また調査範囲外ではあるものの，尾根筋最高所でも小規模な円墳と思われる高まりを確認した。以上から，本遺跡は古墳群として調査を開始することになった。

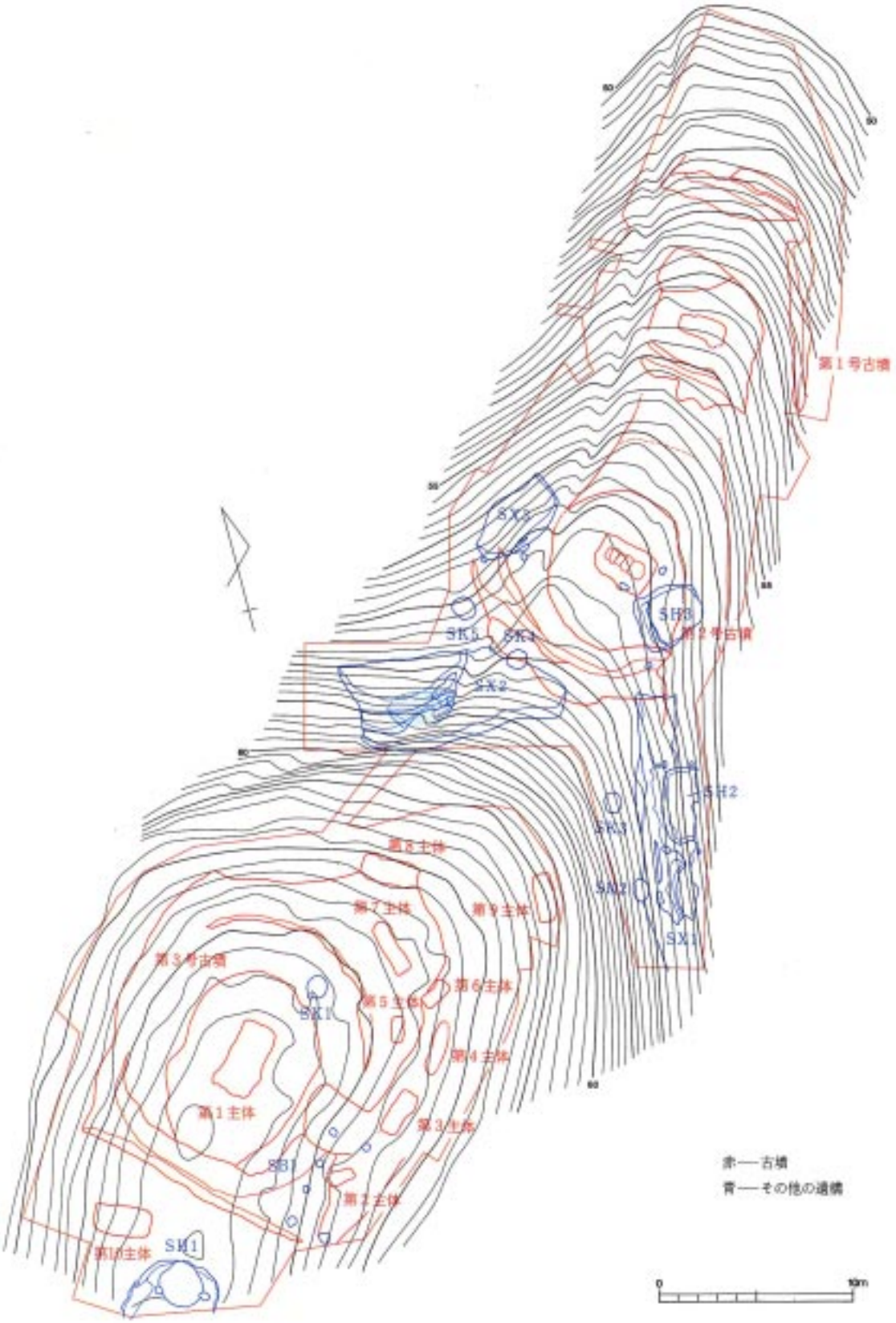
調査の結果，古墳時代の遺構として古墳３基，弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構として竪穴住居跡３軒・掘立柱建物跡１棟・テラス状遺構３か所・土坑５基を確認した。また遺物は，古墳から土師器・鉄器（剣・刀子・鈍・鏃）・ガラス製品（小玉）・石製品（管玉）・金属製品などを，その他の遺構から，弥生土器・土師器・石器（砥石・磨石・石錘）・貝殻が出土した。

１．古墳

(1) 概要

前述のように本遺跡では３基の古墳を確認した。古墳はいずれも尾根筋の中央に築かれており，尾根筋の先端側から第１号古墳・第２号古墳・第３号古墳と呼ぶ。調査前の地形観察で確認していた緩斜面上の標高 53 ｍ地点と 57 ｍ地点の２か所の小平坦面は，それぞれ第１号古墳・第２号古墳の墳頂部平坦面に対応し，緩斜面の上に広がる 64 ｍ平坦面は第３号古墳によってほぼ全域を占められていた。なお，調査範囲外であるものの尾根筋最高所で確認した円墳も，その位置から本古墳群を構成する古墳のひとつととらえ，第４号古墳と呼称することとした。

第１号古墳は，尾根筋の前後を溝状遺構で区画した方墳で，埋葬主体は箱形木棺である。第２号古墳は西側を溝状遺構で区画した円墳で，埋葬主体は箱形石棺である。第３号古墳は西側を溝状遺構で，その他は平坦面で区画した円墳で，中心的な埋葬主体は木槨を持つ可能性がある木棺である。また墳丘周囲の平坦面上に合計９基の埋葬主体が確認された。この副次的な埋葬主体は，１基のみが箱形石棺で，それ以外は木棺と考えられる。おそらく第３号古墳は周囲を巡る平坦面と副次的な埋葬主体までが墓域を形成していたものと考えられる。



第２図　成岡Ａ地点遺跡遺構配置図（Ｓ＝1:300）

(2) 第１号古墳

①　概要

第１号古墳は，本遺跡の調査範囲のもっとも東，尾根筋の先端部に位置する。調査前の地表観察では，墳頂部平坦面にあたる場所が53ｍ地点の小平坦面としてやや平らになっている程度で，古墳の存在は不明確であった。

調査の結果，東西は尾根筋に直交する直線状の２本の溝によって，また南側は幅の狭い平坦面によって区画されている方墳であることが明らかになった。ただし，北側の墳丘端部若しくは墳丘を区画する施設は確認することはできなかった。

埋葬主体は１基で，墳頂部平坦面の中央西寄りに位置していた。

②　墳丘（第3図・図版2a）

墳丘は明確な盛土は認められず，基本的に地山を整形し造られたものと考えられる。墳丘の平面形状は西側（山頂側）にやや幅広になる方形で，規模は墳裾部で東西９ｍ，南北は東辺7.5ｍ西辺推定約11ｍ，墳頂部平坦面は現状で東西５ｍ南北5.5ｍで，墳頂部平坦面の最高所は標高54.7ｍである。

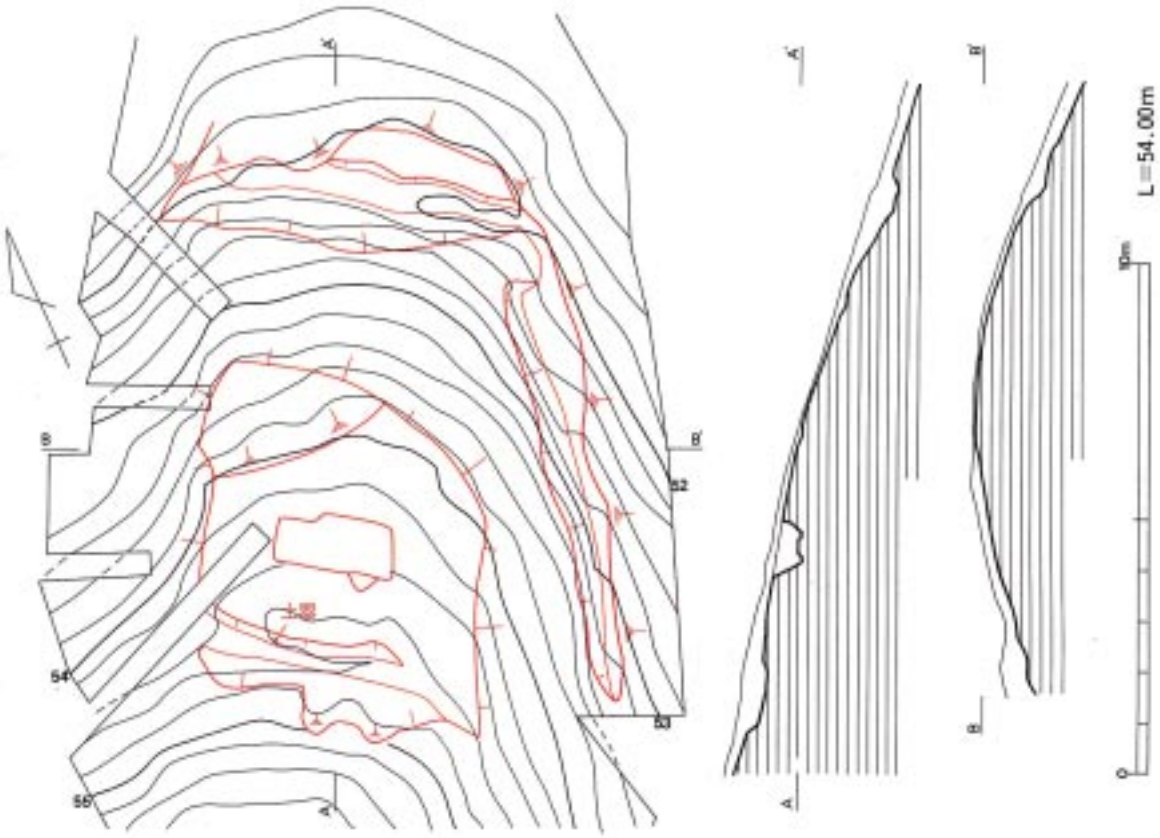
区画用の２本の溝はいずれも断面形状は逆台形で，東側は長さ750㎝，最大幅は上端で175㎝底面で60㎝，深さは西側（墳丘側）上端まで70㎝東側（墳丘外側）上端まで10㎝で，底面の最高所の標高は52.0ｍである。一方西側は，長さ500㎝，最大幅は上端で100㎝底面で50㎝，深さは底面から西側（墳丘外側）上端まで40㎝東側上端（墳丘側）まで10㎝で，底面の最高所の標高は54.6ｍである。墳頂部平坦面最高所とそれぞれの溝の底面との比高は，東側で270㎝西側で10㎝である。また，墳丘の南側を区画する細長い平坦面は，東端は東側溝の南端とほぼ接し，西端は西側溝の南端の延長線上まで達している。規模は長さ850㎝最大幅80㎝，標高は52.2ｍ～53.3ｍで墳頂部平坦面最高所との比高は270㎝～140㎝である。なお，墳丘北側を区画する施設は確認することができなかった。

遺物は，西側溝の東側（墳丘側）斜面中央やや北寄りから土師器の小型丸底壷形土器(1)が出土した。その位置から供献土器と考えられる。

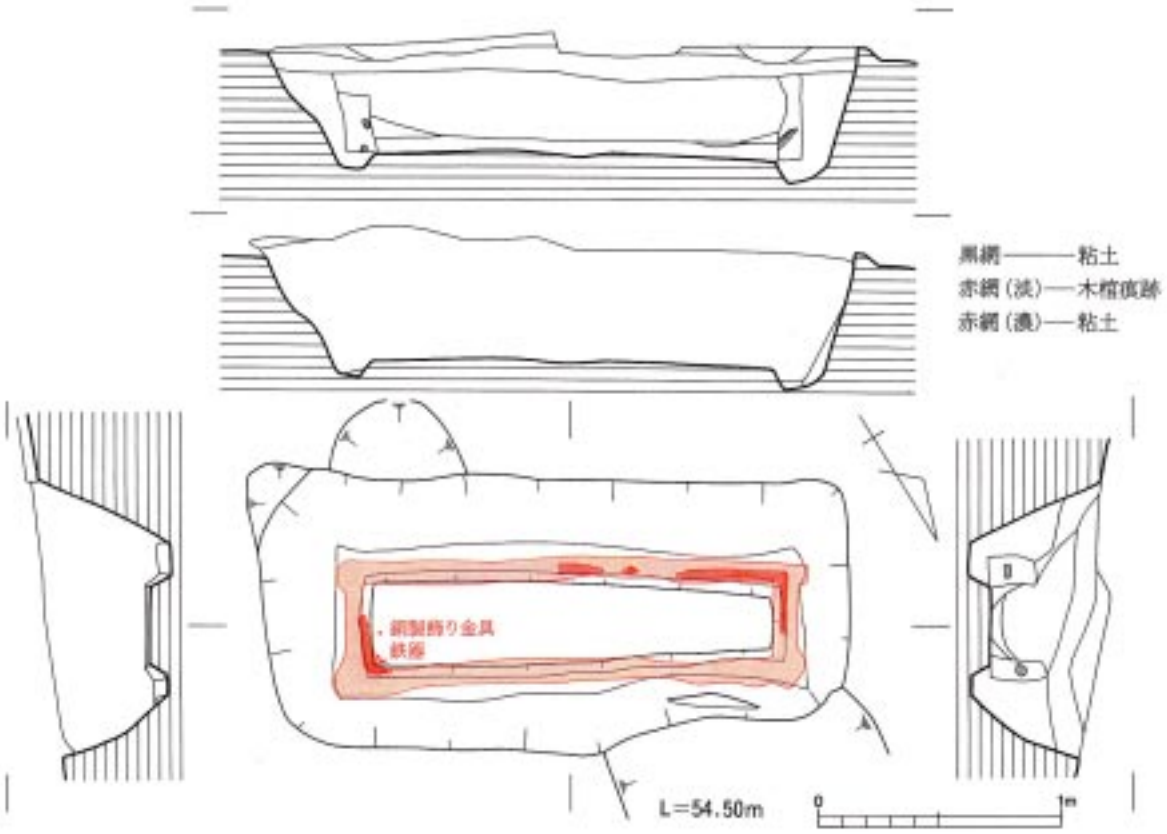
③　埋葬主体（第4，5図・図版2b，3）

埋葬主体は，墳頂部平坦面の中央西寄りに位置する。主軸方位はN57°Ｗで，尾根筋方向とほぼ直交する。墓墳掘方の平面形状は長方形で，規模は検出面で長さ240㎝幅109㎝である。墓塘底面は，四周に溝が掘り込まれ中央部が台状（以下底面台状部）に削りだされている。底面台状部の規模は長さ165㎝，幅は南辺で32㎝北辺で20㎝，最高所の標高は53.93ｍである。また，溝の断面形状は逆台形で，幅は上端で約20㎝底面で約10㎝で，深さが約10㎝である。

この墓壙埋土を観察したところ，明黄褐色～鈍い黄橙色の砂質土を基調とするなか，墓墳底面台状部から約20～30㎝上方までの範囲の中に，褐色の堅緻な層が偏在することを確認した。この層は平面形状が形で，その形状から，小口板を側板で挟み込む構造の組み合わせ式木棺の材が置き変わった木棺痕跡であると考えられる。規模は，外側で長さ195㎝幅は南小口53㎝北小口48㎝，内側で長さ170㎝幅は南小□33㎝北小口30㎝で，各辺の厚みは，小口辺・側辺共に7～10㎝とほぼ一定であった。また，この木棺痕跡に囲まれた範囲の墓壙底面上には，木棺痕跡とほぼ同質の土が厚さ６～７



第 3 図　第 1 号古墳実測図（S ＝ 1:50）



第 4 図　第 1 号古墳埋葬主体実測図（S ＝ 1:30）

㎝堆積しており，その状況から木棺の床板の痕跡と考えられる。

ところで，木棺痕跡の全ての小口板・側板痕跡は，墓壙底面の四周を巡る溝部の直上に位置している。しかし，土層断面の観察から，その下端はいずれも底面台状部の上面と同じ高さで終わり，溝部にまでは下りないことを確認した。また，溝部の平面形状も　形ではなく□形であり，木棺の形状と整合しない。以上から，この木棺は小口板及び側板を墓壙底面に設けられた溝に差し込む構造では無く，底面がほぼ平滑な構造であったと考えられる。このため，墓壙底面の溝も木棺の設置に伴うものではなく，むしろ墓壙中央を棺台状に成形するために掘り込まれたものと考えられる。

また，小口板・側板痕跡の範囲内で暗褐色の粘土層の分布を確認した。この粘土層は，平面的には小口板・側板痕跡とほぼ一致するため，木棺のめどめに用いられたものと考えられる。垂直分布を見ると部分的にばらつきがあるため，蓋を棺身に据える際，両者の隙間を埋め，棺を密封するために用いられていたものが不等沈下した可能性が高い。

遺物は，木棺痕跡の内側南西隅から銅製飾り金具(2)と刀子状鉄器(3)が出土している。

なお頭位の方向は，墓壙及び木棺痕跡の構造・規模，遺物の出土位置から南側を向いていたものと考えられる。

④　遺物（第 6 図・巻頭図版，図版 14b）

・土師器(1)

小型丸底壷形土器である。破片であるため，各部の寸法は明らかではないが，口縁部は「く」の字に屈曲し，内湾気味に外反し，端部は尖って納められている。胴部は最大径を中央よりやや上半に持つ偏平な球状である。

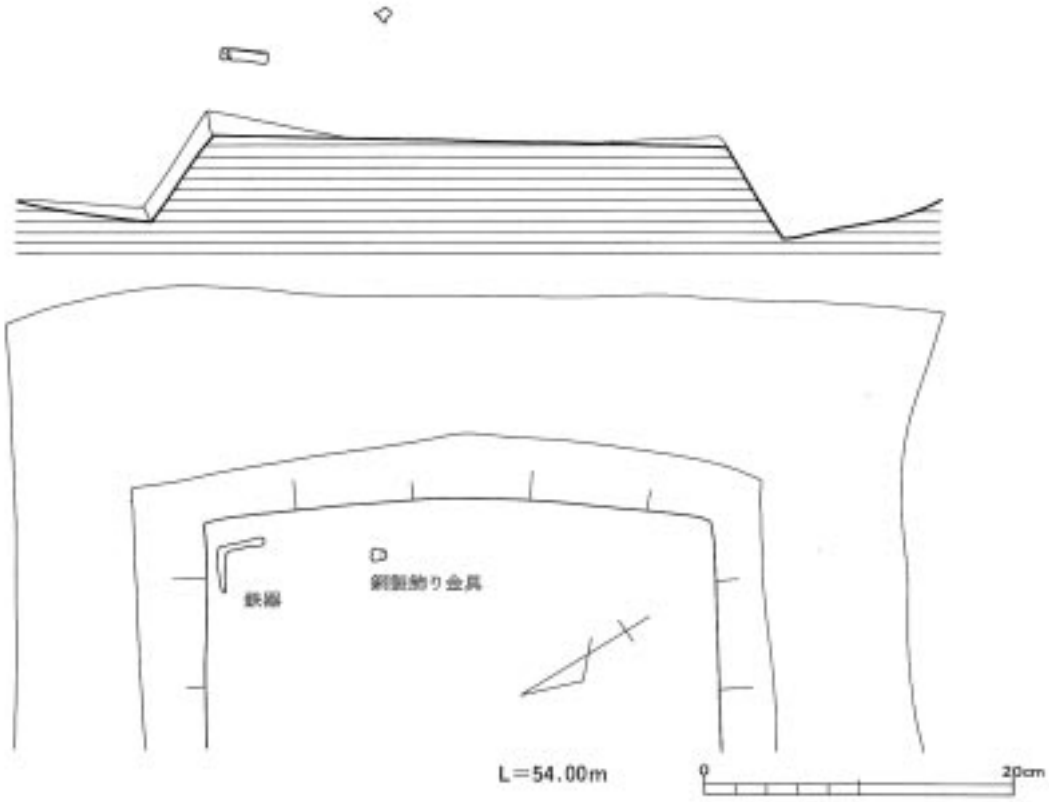
・金属器

銅製飾り金具(2)は口縁部が 4 葉に分かれたビーカー状で，高さ 7 ㎜胴部径 7 ㎜口縁部径 11 ㎜，厚さはほぼ一様で約 0.5 ㎜，重量 0.6 ｇである。肉眼観察では接合部は観察できず，一枚の金属板から打ち出したものと考えられる。口縁部は円周の 1/4 ごとに約 5 ㎜の切れ目を入れ，花びら状に外湾させている。その形状から，断面円形の棒の先端部に装着されていたものと思われるが，どのような性格のものの部品であったのかは明らかにできなかった。

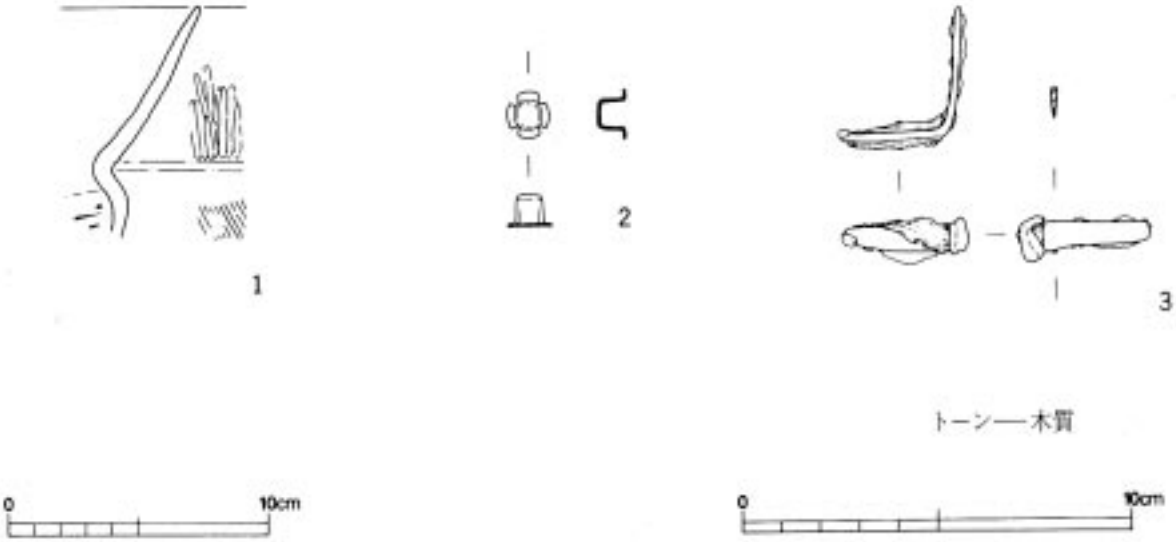
刀子状鉄器(3)は復元全長 55 ㎜最大幅 6 ㎜厚さ 1.5 ㎜茎部端幅 3.5 ㎜重量 2.8 ｇで，その大きさからミニチュア品と思われる。明確な関はなく，刃部と茎部の境界は不明確である。刃部の表面に一部木質が遺存しているが，鞘のものであるか木棺のものであるかは明らかにできなかった。ほぼ中央で「く」の字に折れ曲がっているが，至近から出土した銅製飾り金具(2)は完全な形状を保っており，本品だけが土圧等の自然現象で折れ曲がった可能性は低い。おそらく葬送儀礼に伴い人為的に折り曲げられたものと考えられる。

⑤　時期

本古墳の時期は，西側溝から出土した土師器丸底壷形土器の形状から，古墳時代前期前半期と考えられる。



第５図　第１号古墳埋葬主体遺物出土状況実測図（Ｓ＝1:5）



第６図　第１号古墳出土遺物実測図（Ｓ＝1:2，1はＳ＝1:3）

(3) 第２号古墳

①　概要

第２号古墳は，東側緩斜面の西端に位置し，第１号古墳の西に隣接する。調査前の地表観察では墳頂部平坦面にあたる場所が57ｍ地点小平坦面としてやや平らになっている程度で，古墳の存在は不明確であった。しかし，広島市教育委員会による試掘調査によって埋葬主体が確認され，本古墳群の発掘調査の契機となった古墳である。

調査の結果，墳丘は，西側が尾根筋を円弧状に断ち切る溝によって区画されていることが明らかになった。ただし，東側の墳丘端部若しくは墳丘を区画する施設は確認することはできなかった。

埋葬主体は１基で，墳頂部平坦面の中央に位置していた。

なお本古墳は，墳丘がＳＨ３・４を，また西側溝がＳＸ２・ＳＫ５を一部切って築造されていた。

②　墳丘（第７図・図版４）

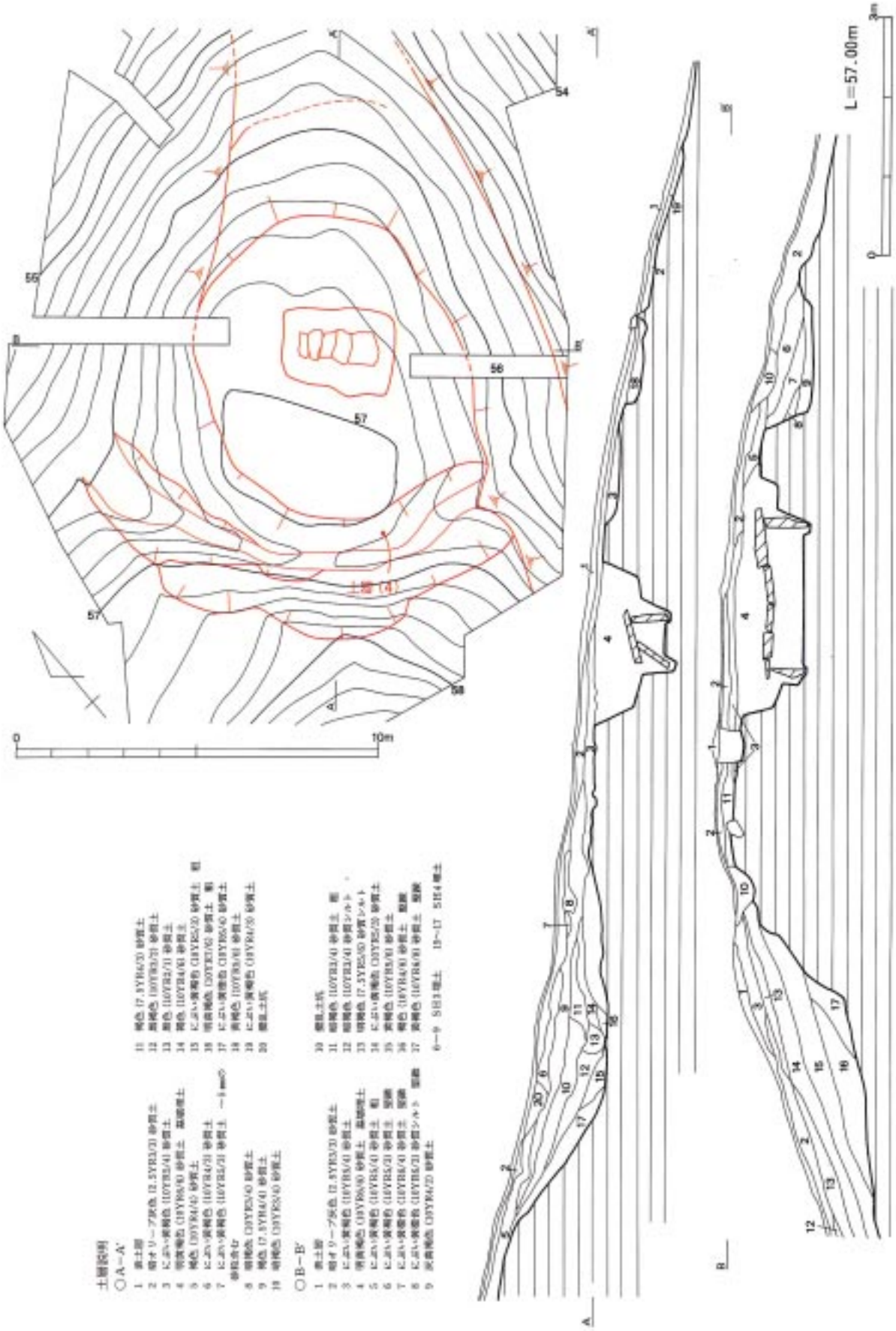
墳丘は明確な盛土は認められず，基本的に地山を整形し造られたものと考えられる。墳丘の平面形状はほぼ円形で，規模は墳裾部で推定約11ｍ，墳頂部平坦面は現状で直径約7.5ｍで，墳頂部平坦面の最高所は標高57.1ｍである。墳丘西側を区画する周溝は長さ約11ｍの円弧状で，墳丘のほぼ半分をとりかこんでいる。幅は中央部で最も狭く約20㎝で，両端に向かうにしたがって広がり，北端で105㎝南端で57㎝である。また，断面形状は中央部ではＶ字形であるが，両端に向かうにしたがい逆台形に変じる。なお，深さは中央部で東側（墳丘側）上端まで53㎝西側（墳丘外側）上端まで261㎝で，底面の最高所は中央部で標高56.7ｍで，両端に行くにしたがい標高を下げ，北端で56ｍ，南端で56.4ｍである。周溝底面と墳頂部平坦面最高所との比高は，中央で40㎝北端110㎝南端70㎝である。

遺物は，周溝の北側（墳丘側）斜面中央やや東寄りから鼓形器台(4)の破片が出土した。その位置から供献土器と考えられる。また，墳丘上や周溝内の埋土中からではあるが，二重口縁壷形土器(5・6)の破片が出土している。

③　埋葬主体（第８，９図・図版５，６）

埋葬主体は，墳頂部平坦面の中央に構築された箱形石棺である。石棺内には，良好な状態で頭を南側に向けた人骨が遺存していた。墓壙は平面形状が南に向けて幅広になる長方形の二重土壙である。主軸方位はN46°Ｗで，尾根筋方向とほぼ直交する。一次壙の規模は，検出面で長さ310㎝，幅は，南小口210㎝北小口170㎝，底面で長さ288㎝幅は南小口186㎝北小口158㎝である。一次壙底面は壁面際から二次壙掘方に向けて低くなっており，壁際での標高は56.52～56.36ｍ，二次壙上端で56.4～56.3ｍで，一次壙検出面からの深さは最大で60㎝である。二次壙は一次壙のほぼ中央に掘り込まれており，上端で220㎝幅南小口90㎝北小口74㎝である。二次壙底面は，四周に石棺材を据えるため幅約20㎝，深さ20㎝までの溝が掘り込まれており，この溝にかこまれた底面の規模は長さ166㎝幅は南小口で46㎝北小口で38㎝で，最高所の標高は56.05ｍである。墓壙底面に盛られた棺床土は明確にできなかったが，人骨の出土状況からおおむね10㎝程度と考えられる。

この墓壙に築かれた石棺は小口壁を側壁で挟む　形の構造で，内側の規模は長さ180㎝幅は南小口で59㎝北小口で43㎝，深さは最大で50㎝である。小口壁に用いられた石材は，南側が高さ63㎝幅



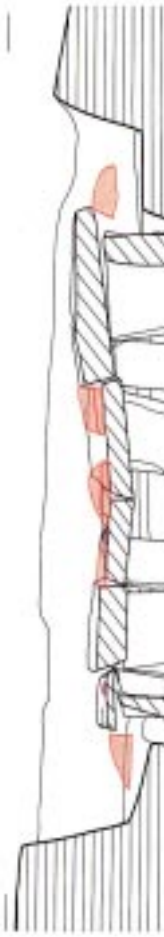
第７図　第２号古墳実測図（Ｓ＝1:150）・土層断面図（Ｓ＝1:75）

45㎝厚さ13㎝，北側が高さ50㎝幅36㎝厚さ9㎝で，南側に大型の石材が用いられている。側壁は西側が５石，東側が７石によって構成されている。用いられている石材は，概ね高さ50～60㎝厚さ10㎝前後で，幅は東西両壁とも最も南側の１石が45～50㎝と大きく，他は20～30㎝のものを用いている。石材の裏には基本的に土を充填し，石材を固定している。部分的に小石が認められるところもあるが，全面的に行われているわけではないので，強度を増すための機能はあまり期待されてはいなかったものと思われる。ただし，西側壁北端の１石は，幅こそ約60㎝とひろいが，厚さが約5㎝と他の半分程度しかないため，その裏側に幅約25㎝厚さ5㎝ほどの板石２枚と小石を入れて補強を行っている。なお，前述のように，石材の下に溝が掘り込まれており，その深さを石ごとに変えることによって石材上端の高さをそろえている。石棺構築の順序は，①底面に掘られた溝のうち，南小口石と西側壁南端石の溝がＬ字形に一体に掘られていること②側壁に用いられた石材が，南端が最も大きく北に行くにしたがい小型になること③両側壁を比較すると，西側に比べ東側の方が小型の石材を用いていること，などから，まず南小口石と西側壁南端石を据えてから西側壁を築き，北小口石を設置し，最後に東側壁を築いたものと考えられる。

この石棺を覆う蓋石は５枚で，石材は南端のものが最も大きく長さ80㎝幅90㎝厚さ16㎝で，その他の石は長さ30～50㎝幅70～90㎝厚さ4～13㎝と小型で薄い。蓋石間，及び蓋石と墓壙一次堀底面間の隙間は褐色粘土で丁寧に目張りがされていた。ただし，壁石上端と蓋石の間には粘土がほとんど見られなかったことから，目張りは蓋石構架後に行われたと考えられる。

出土した人骨は，頭を南に向け，足が北小口にほぼ接するように安置されており，肋骨や下腕の一部を欠くものの，概ね良好な遺存状態であった。石棺に施された粘土の目張りが・棺を密閉し土砂や水の流入を防ぐという，期待された機能を十分に果たした結果であろう。人骨は老年（60歳以上）男性のもので，身長は161.5㎝と推定されている。骨は生前の位置関係を保っており・軟骨や腱が腐りきらず，四肢がばらばらにならない段階で埋葬されたものと考えられる。また，頭蓋骨の前頭部には赤色顔料が認められた。赤色顔料の分布は眉間の濃度が最も高く，周辺に行くにしたがって減少してゆく。遺骸の頭部のある範囲に塗布されたのではなく，眉間の一点に顔料の粉末を盛るなどの行為が行われたと考えられる。

遺物は，石棺内南西隅，頭骨の南側から鉄製刀子(8)が，切っ先を南に向けた状態で出土した。



④　遺物（第10図・図版14b）

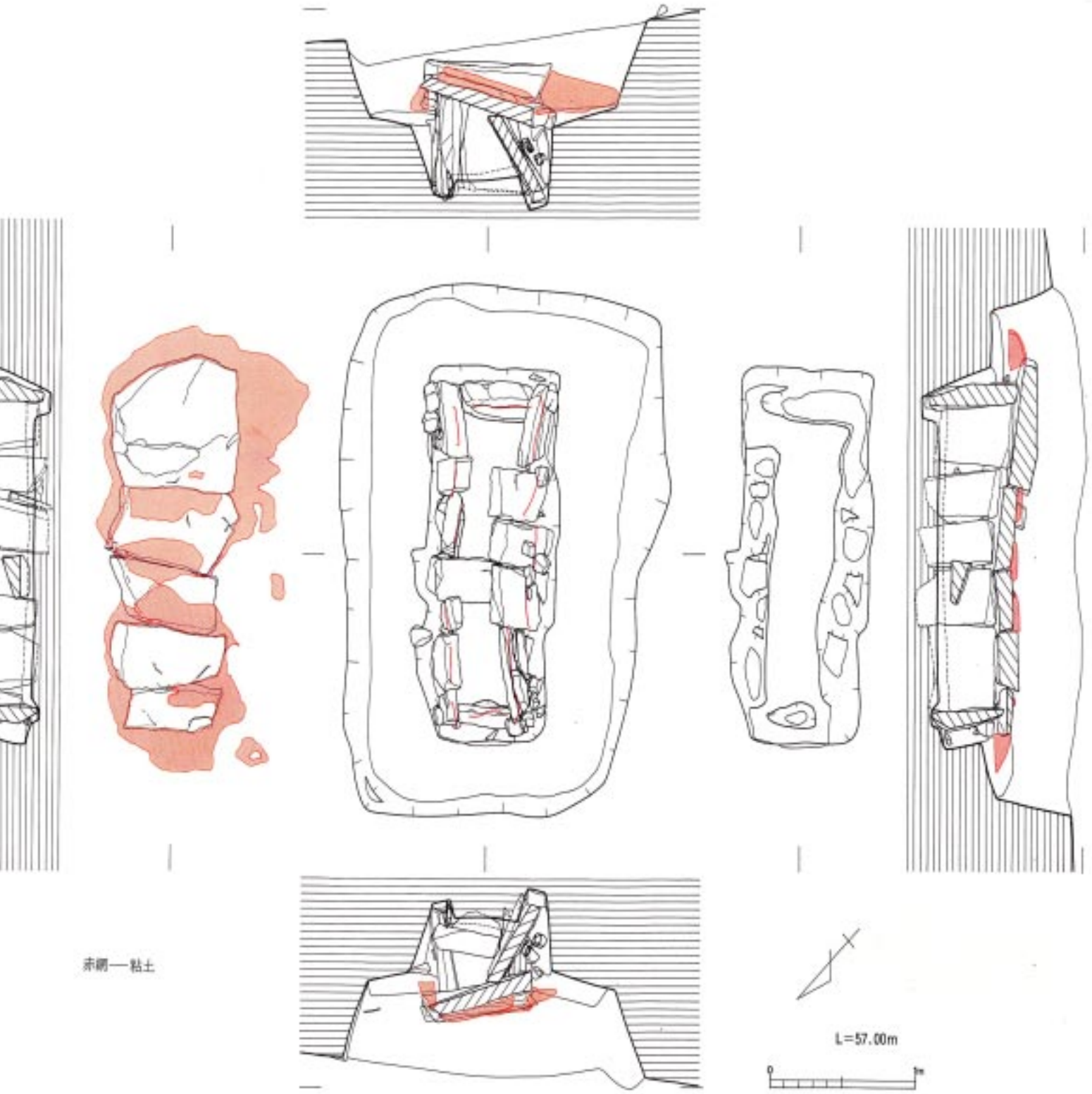
・土師器

(4)は鼓形器台である。器受部径14.4㎝筒部径5.4㎝で，表面は内外面とも精微に磨かれ，さらに外面には赤色顔料の塗布が認められる。胎土・焼成ともに非常に良好である。

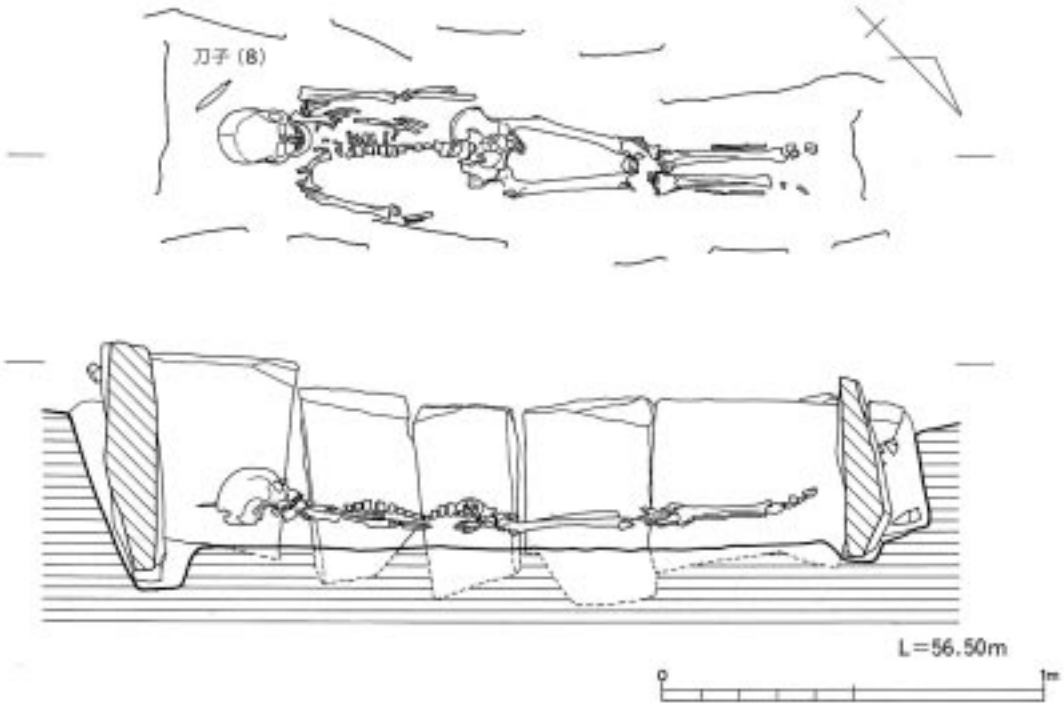
(5・6)は，二重口縁の壷形土器である。いずれも，２次口縁部は外面下半に粘土帯を張りつけ下垂させ，くし歯状工具による波状文と円形浮紋が認められる。ただし,(5)が１次口縁に比べ２次口縁が立ち上がり気味に外反するのに比べ,(6)は１次口縁・２次口縁ともにほぼ直線状に外反する。

・金属器

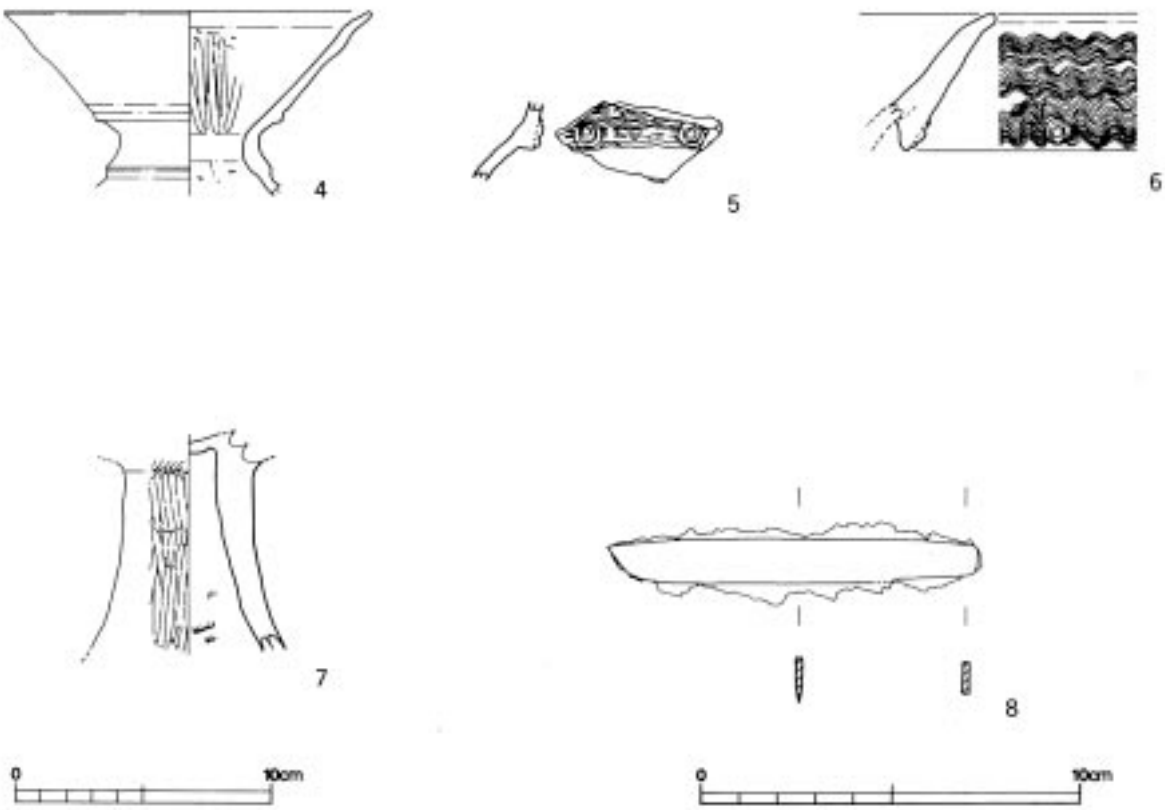
鉄製刀子(8)は全長98㎜幅11㎜厚さ2㎜茎部端幅7㎜重量16.8ｇである。明確な関はなく，刃部と茎部の境界は不明確である。刃部の表面は薄い樹脂状皮膜で覆われていた。



第 8 図　第 2 号古墳埋葬主体実測図（S ＝ 1:30）



第９図　第２号古墳埋葬主体人骨・遺物出土状況実測図（Ｓ＝1:20）



第10図　第２号古墳出土遺物実測図（Ｓ＝1:3，8はＳ＝1:2）

⑤　時期

本古墳の築造時期は，墳丘西側溝から出土した鼓形器台や，墳丘埋土中から出土した壷形土器から古墳時代前期前半と考えられる。

第１表　古墳出土土器観察表

（[　]は復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器　　形	調整・成形	備　　考
1	丸底壷形土器	第１号古墳		口縁部は「く」の字状に外反し，やや内湾気味に端部に至る。端部は尖り気味におさめる。頚部以下は，内湾する。	外面：　口縁端部から上部ヨコナデ。口縁下部ヘラ磨きのち，赤色顔料部分的に塗布。頚部ヨコナデ。体部ハケ目のちヨコナデ。 内面：　口縁端部ヨコナデ。頚部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　黄褐色 胎土：　1mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
4	鼓形器台	第２号古墳	口径　[14.4]	口縁部は外方に開き，端部は尖り気味におさめる。上下に稜を形成している頚部は外湾する。	外面：　ヨコナデ。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ヘラ削りのちヘラ磨き。頚部ヨコナデ。以下ヘラ削り。 内面口縁部から外面にかけて赤色顔料塗布。	色調：　橙色 胎土：　密 焼成：　良好
5	壷形土器	第２号古墳埋土		外反する口縁に，やや外傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。	外面：　口縁部波状紋をめぐらせ，円形浮紋を貼り付ける。 内面：　ヨコナデ。	色調：　橙色 胎土：　密 焼成：　良好
6	壷形土器	第２号古墳埋土		外反する口縁に，外傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部はやや平らにおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部波状紋をめぐらせ，円形浮紋を貼り付ける。 内面：　口縁端部ヨコナデ。	色調：　淡黄褐色 胎土：　密 焼成：　良好
7	高杯	第２号古墳埋土		脚部下方に開く。	外面：　ヘラ磨き。 内面：　杯部底面ナデ。脚部上部ナデ。下部ヘラ状工具による強いナデツケのちナデ。	色調：　外面　黄褐色 内面　灰褐色 胎土：　1mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好

(4) 第３号古墳

①　概要

第３号古墳は，本遺跡の調査範囲の西端に位置し，64 m平坦面のほぼ全域を占める。64 m平坦面は長さ約15 m幅約5 mと本遺跡の位置する尾根筋の中で最も広い平坦面で，調査区の西半を占める。64 m平坦面は，中央がごくわずかに高まるが，周辺に向かう傾斜は非常に緩やかで，調査前の地表観察では古墳の存在は不明確であった。

調査の結果，西側は尾根筋に直交する溝によって，東南北側は平坦面（以下墳裾部平坦面）によって区画された東西に長い円墳であることが明らかになった。埋葬主体は10基で，中心となる主体が墳頂部平坦面の中央に，またその他の主体は周囲の平坦面上など，墳丘の周囲に位置していた。

②　墳丘（第11図・図版7）

墳丘及び墳裾部平坦面には明確な盛土は認められず，基本的に地山を掘削・整形することで造られたものと考えられる。墳丘の平面形状は尾根筋に沿って南北に長い長円形で，規模は墳裾部で南北13.5 m東西11.5 m，墳頂部平坦面は現状で南北9.3 m東西6.8 mで，墳頂部平坦面の最高所は標高63.7 mである。

墳丘西側を区画する溝は，東側（墳丘側）は南北両端が東に回り込む円弧状であるが，西側（墳丘

第11図　第3号古墳実測図（S＝1:150）

外側）は尾根筋に直交しこれを直線状に断ち切る特異な形状である。長さは西側で 12.5 m，幅は中央部で最も狭く上端 165 ㎝深さ 80 ㎝で，断面形状は西側斜面の傾斜が垂直に近い片薬研堀状である。両端に向かうにしたがって断面形状を逆台形に変じつつ幅を広げながら深さを減らし，最終的には底面が墳裾部平坦面へと接続する。底面の最高所は中央部の標高 62.7 mであるが，両端までほぼ水平で，溝底面と墳頂部平坦面最高所との比高は 100 ㎝である。

一方墳裾部平坦面は，現状で幅は南側 1 ～ 3 m東側 2 ～ 5 m北側 1 ～ 2 mで，高さは墳裾際が全周ほぼ水平で標高 62.6 m，周縁部は 62.2 ～ 62.4 mである。この平坦面の築造時の規模は，周辺地形の観察から，東～北側は現状と大差の無い規模であったと考えられる。ただし南側は，西側溝との接続部の様子や副次的な埋葬主体群の位置から考えれば，3 ～ 4 m程度の幅があった可能性が高い。

墳丘及びその周囲から遺物は出土しなかった。

③　埋葬主体

本古墳の墳丘上及びその周辺から 10 基の埋葬主体を確認した。このうち墳丘中央に位置するものが第 1 主体，墳裾部平坦面南側から北側にかけてとその周囲に位置するものが第 2 主体～第 9 主体，墳丘の南側を区画する溝の南に隣接するものが第 10 主体である。第 2 主体～第 10 主体は墳丘上には位置しないものの，主軸が直近の墳丘縁辺と並行し，あたかも墳丘を取り囲むように位置する。さらに第 2 主体～第 8 主体は，いずれも墓壙底面の標高がほぼ等しいことから，同一水平面から掘り込まれたと考えられ，その水平面とは各墓壙の深さから考えれば墳裾部平坦面であった可能性が極めて高い。以上から，第 2 主体～第 10 主体も本古墳に付随する副次的な埋葬主体であると判断した。

〇第 1 主体（第 12・13 図・図版 8・9・10a）

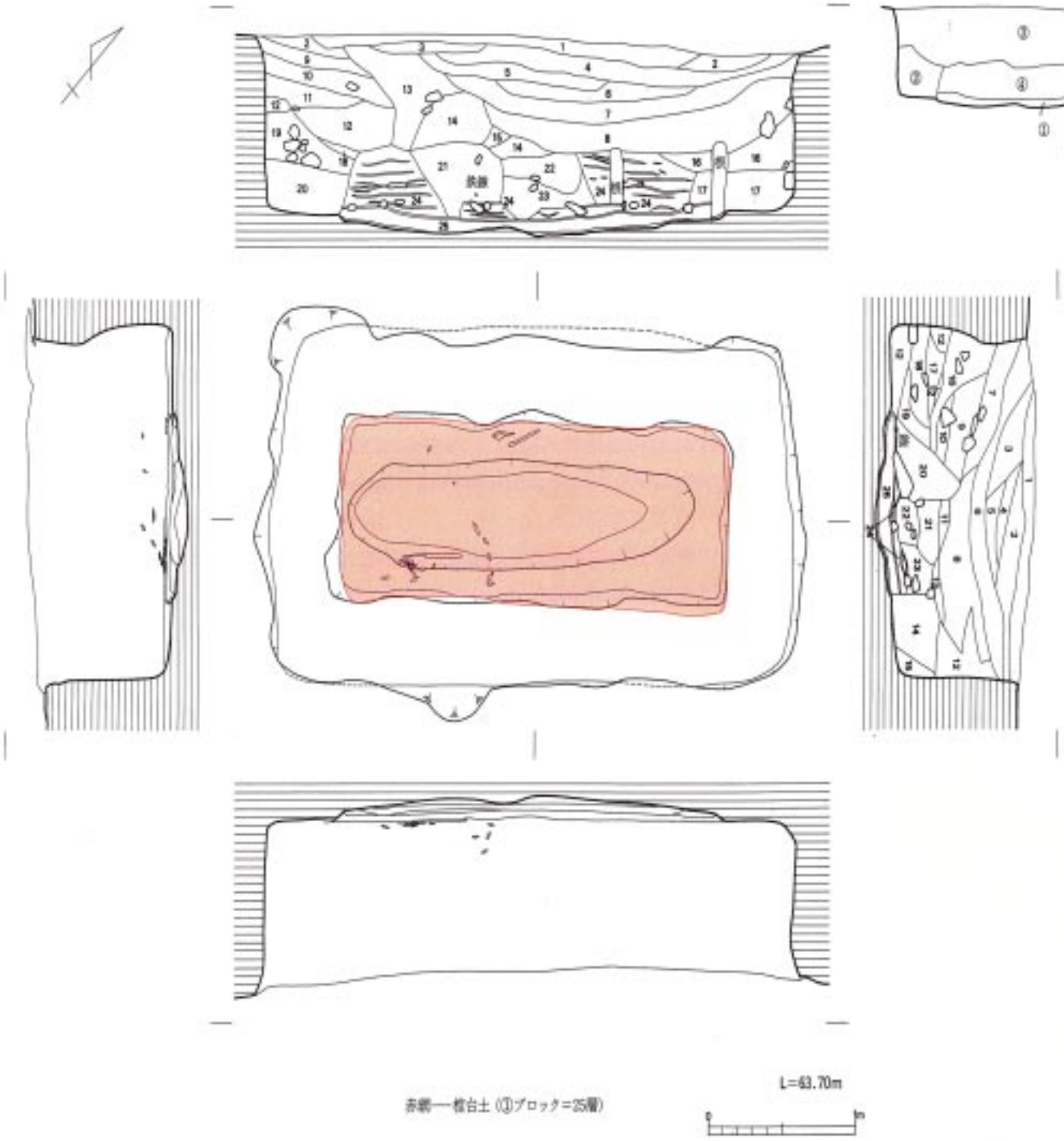
〈墓壙〉

第 1 主体は，唯一墳丘上に営まれた埋葬主体で，墳頂部平坦面の中央に位置する。墓壙埋土の土層観察によれば，単に木棺を直葬しただけではなく木槨を伴う可能性のあることが明らかになった。主軸方位は N43°E で，尾根筋及び墳丘長軸方向とほぼ並行する。平面形状は隅丸長方形で，3 段に掘り込まれている。一次壙の規模は検出面で長さ 385 ㎝幅 190 ㎝，底面は長さ 356 ㎝幅西小口 196 ㎝東辺 180 ㎝，底面はほぼ水平で標高は 62.6 mで，検出面からの深さは約 94 ㎝である。二次壙は一次壙底面のほぼ中央に掘り込まれており，平面形状隅丸長方形で，規模は上端で長さ 268 ㎝幅西小口 100 ㎝東小口 94 ㎝，底面で長さ 260 ㎝幅西小口 92 ㎝東小口 86 ㎝，底面最高所の標高は 62.54 mで，一次壙底面からの深さは 6 ㎝である。三次壙は二次壙底面の中央からやや南よりに掘り込まれており，平面形状は楕円形で，規模は上端で長さ 236 ㎝最大幅 60 ㎝，底面で長さ 200 ㎝最大幅 45 ㎝，底面最低所の標高は 62.46 mで，二次壙底面からの深さは 8 ㎝である。

〈埋土〉

この墓壙を埋めた埋土は，堆積状況から①棺床部を形成していたと考えられるブロック②棺槨の周囲を埋め戻したと考えられるブロック③埋土の上半分を占め，墓壙全体を埋め戻したと考えられるブロック④上記 3 層に囲まれたブロック，の 4 群に大別できた。

①ブロックは，二次壙及び三次壙を埋める厚さ 6 ～ 10 ㎝の真砂土を主体とすると思われる鈍い橙色の非常に堅緻な砂質土層である。平面形状及び範囲は二次壙上端とほぼ同一で，長さ 260 ㎝幅 100



第12図　第３号古墳第１主体実測図（Ｓ＝1:30）

㎝の隅丸長方形である。断面形状は縦横ともに概ね偏平な台形状だが，上面形状は中央部が縁辺部に比べ約10㎝窪む浅いU字形である。なお，最高所は縁辺部で一次壙底面よりも4㎝程度高い。本層の上面全域には厚さ1～2㎝の明赤褐色の粘土が広がっていた。その直上から鉄剣(9)・鉄鏃(11・12)・鉈(10)が出土している。これらの遺物は，出土時の位置から木棺内に納められた副葬品であったと考えられるが，いずれも粘土層にほぼ密着し，本層内部には入り込んでない。以上から，本層は木棺の下に敷かれた層であり，棺台的な役割を担っていたものと考えられる。

②ブロックは，一次壙底面上に堆積し，平面形状は二次壙を取り囲む□形で墓壙壁際から二次壙上端まで分布し，厚みは一次壙底面から壁際で約60～70㎝・二次壙側で約30㎝である。概ね橙色ないし明褐色の柔らかな砂質土からなり，その形状から棺槨の周囲を埋めた埋土であったと考えられる。このブロックは，一次壙底面から20～30㎝の高さでさらに上下2層に大別できるが，東西断面と南北断面でやや土質が異なる。東西断面では，上下両層ともに密度の低い柔らかな土質である。一方南北断面では，上層は東西断面同様密度が低く柔らかい土質であるのに対し，下層は明確に堅緻な土質となっている。下層の土質の違いは平面上にも現れており，一次壙底面から約15㎝の高さにおいて，墓壙南北両側壁側の埋土が墓壙東西両小口側の埋土を　形に挟み込む様子を観察することができた。以上から，棺槨の埋め戻しによる本ブロックの形成にあたって(ｱ)墓壙の小口側と側壁側の間を仕切るような　形の構造があった(ｲ)埋め戻しが少なくとも2回に分けて行われた(ｳ)下層の形成にあたって，墓壙側壁側では土が固く締まるような行為が行われたのに対し，墓壙小口側では同様の行為は行われていなかった，と考えられる。

③ブロックは，②ブロックより上層に位置し，墓壙上半を占める。属する層はおおむね6層で，多少の断絶はあるものの，ほぼ墓壙の端から端まで達する浅いU字形に堆積している。この状況から，本ブロックは墓壙を最終的に埋め戻した層群で，木棺が腐朽し，その空間に墓壙中央側の埋土が落ち込んだものと考えられる。このうち上から4層は褐色で，比較的密度が低く粗い土である。対して第5層は明褐色の堅緻な土層，さらに第6層は色調を明赤褐色に変えた堅緻な土層で，こぶし大程度の河原石がまんべんなく認められるようになる。ところで，東西断面の土層観察によれば西壁から約50～100㎝の範囲で，最上層を除く第2層から第6層まで垂直方向に延びる土層が認められる。この層は，土質が周囲の埋土に比べ極めて粗であることと，その形状から，墓壙中央の棺槨が腐朽し本ブロックが落ち込んだ際に，中央部と周辺部における沈下量の違いから生じた亀裂に周囲から土が流れ込んだものと推定される。このことから，少なくともこの亀裂が及んだ第2～6層は，棺槨が腐朽した時点で墓壙を埋めていた埋土である可能性が高い。よって，本主体の棺槨より上層の埋め戻しは，こぶし大程度の河原石が散布された明赤褐色の堅緻な層→明褐色の堅緻な層→褐色系で密度の低い粗い3つの層，の順で形成されたものと考えられる。

以上の3ブロックに囲まれた長さ約240㎝幅約100㎝高さ約40㎝の空間を占めるのが④ブロックである。本主体内から出土した遺物は，全て本ブロックと①ブロックとの境界面，及び本ブロックの埋土下半部から出土している。このことから，本ブロックが占める空間は本来木棺が据えられていた場所であり，本ブロックは木棺の上に位置していた土が，木棺の腐朽とともに崩落してきたものと考えられる。その主体となるのは真砂土状の堅緻な砂質土で，その層中に，ほぼ水平に広がる厚

さ約1㎝の赤褐色の粘質土層が約5㎝間隔で５～６層堆積する特徴的な構造を有している。東西断面では，中央部の約１ｍの範囲で粘土層が途切れているが，形成する土を詳細に観察した結果，真砂土と粘土層が混ざったものであることを確認した。また，この中央部でも，下から約10㎝までは粘土層を１～２層挟む真砂土層が断続的に分布している。よって，本ブロック全体が，本来版築状に真砂土と粘質土を交互に積み重ねた一体の層であった可能性が高い。おそらく当初の位置から沈下する際，中央部と周辺部でその速度が不均等となったため土層の攪拌が生じたのであろう。ところで，本ブロックに類似する土層は②・③ブロック中において一切確認できなかった。つまり本ブロックは，木棺を埋め戻す際，墓壙全体にわたって形成されたものの一部ではなく，木棺の上の限定された空間にのみ形成された土層と考えられる。

〈木棺及び木槨〉

墓壙に安置された木棺等については，直接，これを構成する部材が置き変わったと見られる土層の明確な確認はできなかった。ところで，本主体の墓壙の規模・形状は，安芸北部千代田町の中出勝負峠第８号古墳1)の中心主体ＳＫ８－１（前期初頭）に極似している。中出勝負峠例は，土層断面から組み合わせ式の箱形木棺が納められていたと考えられているが，本主体と比較すると棺台土（①ブロック）や木棺上の限定土層（④ブロック）の有無などの違いがある。これらは木棺の構造やその設置方法など，埋葬施設の基本にかかわる部分である。このため，墓壙埋土の各ブロックの状況を検討することで，その形状や構造を推定してみたい。

・木棺

木棺の平面規模は①ブロック＝棺台土と②ブロック＝棺槨埋め土の状況から，①ブロックの範囲に納まる長さ260㎝幅100㎝以下と考えられる。また高さは，③ブロック＝墓壙埋め土の沈降距離，及び②ブロックの壁際での厚みから④ブロックの厚みを引いた値が共に30～40㎝であることから，最大で40㎝程度であったと推定できる。

形状については，棺台土上面が，縁辺部から中央部に向けて浅いＵ字形に窪むことから，底面はゆるやかな舟底状であったと考えられる。仮に単純な形状の板材を組み合わせた箱形木棺を想定した場合，墓壙底面は平面，もしくは前述の中出勝負峠例同様，単純な長方形の二次壙を掘り込むだけで十分であろう。しかし，舟底状の底面の場合本質的に不安定であり，安定させるため何らかの施設が必要になる。中出勝負峠例と異なり，本主体で，舟底状の三次壙が掘り込まれていたこと，さらに棺台土が設置されていたことは，いずれも木棺の底部が不安定な舟底状であり，これを安定して設置するために行われたものと考えることができよう。

ところで，棺内に副葬されたと考えられる品のうち，鉄剣は向きが墓壙長軸と並行し棺台土に全体が密着しているなど，副葬時の状況をほぼ保っていると見られる。一方，鉄剣よりも棺台土の縁辺近くから出土した鉄鏃や鉈は，向き・傾き共に鉄剣よりも乱れた印象がある。仮に板材を組み合わせた箱形の木棺を想定した場合，棺台土との相対的位置関係は，両者ともほとんど違いは無いと考えられる。よって木棺の腐朽によって元位置から沈降していっても，出土状況に大きな差が生じることは考えにくい。つまり，出土状況に違いがあるということは，中心軸から端部へと離れるほど状況（位置）が変化するような内部形状の木棺であったことを示しているといえる。このような

形状の木棺としては，くり抜き式のものが想定できよう。

以上から，本主体に納められた木棺は，少なくとも底面はゆるやかな舟底状で，棺身はくり抜き式であった可能性が高い。

・木槨

②ブロックで述べたように，この層の下層には，墓壙側壁側と小口側を区画する平面形状　形の構造物が存在していたと考えられる。このような形状の構造物としては組み合わせ式の箱形木棺が考えられるが，既に検討したとおり，本主体に納められた木棺の下半部はくり抜き式であった可能性が高い。以上から，木棺と　形構造物は別の施設であり，本主体には少なくとも棺身を取り囲むような　形構造物が設置されていたものと考えることができる。

また，木棺の上には，木棺とほぼ同規模の限定された空間に，版築状の構造を有する④ブロックが位置していた。このような土層を形成するには，その空間を限定する必要があるが，その方法としては以下の２つの方法が考えられる。

(1)　いったん埋め戻した後，必要な部分を掘り返して確保した空間に，充填して形成する方法。

(2)　当該空間を区画する構造物を築き，この中に充填して形成する方法。

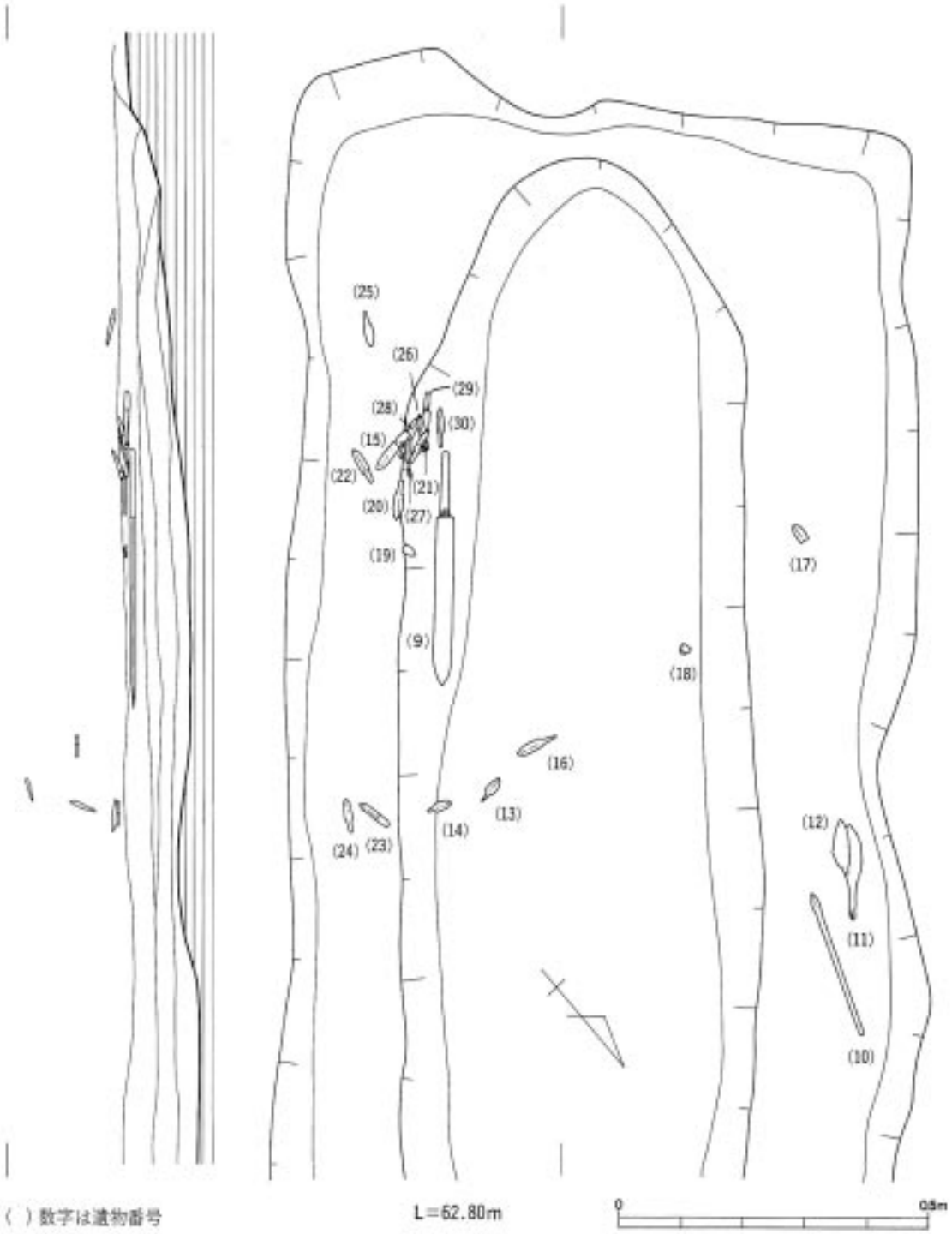
(1)案の場合，空間確保のために掘り返した時，壁面を保つためには埋め戻し土をある程度固めなければならない。特に④ブロックの様に土を版築状に固めながら積み重ねてゆく場合，その枠となる壁面には十分な強度が必要になることが想像される。また，④ブロックの形成作業は埋め戻し土の上を足場にして行わねばならず，この際にも土が締まるものと考えられる。しかしながら，この「枠」部分に相当する②ブロック上層は，かなり密度の低い粗い土質で，仮定と整合しない。また葬送儀礼を想定した場合，いったん埋めた木棺を掘り出すような作業は考えにくい。

対して(2)案は，木棺の上に位置する長方形の木枠のような構造物が想定できる。この構造の場合，(1)案に比べ④ブロックを形成するに十分な強度を確保できる。また，②ブロック下層が堅緻であることは，この層を作業足場としたと推定できること，また②ブロック上層が粗い土層であることは，作業終了後に枠の外を埋めたと推定できること，とそれぞれ整合する。さらに葬送儀礼を復元する上でも,(1)案に比べ直線的な手順となり，理解しやすい。以上から，④ブロックの形成にあたっては，木枠状の構造物が用いられたものと考えられる。

このように，本主体には，木棺以外に棺身を取り囲む　形構造物と，木棺上の④ブロックを形成するための木枠状構造物が存在していたことが推定できた。そして，この２つの構造物は，上下に重なるように位置し，かつその平面規模がほぼ同一であることから考えれば，本来単一の構造物であった可能性が高い。以上から，本主体には木棺全体を囲い込むような木製構造＝「木槨」が存在していたと考えられるのである。

〈遺物〉

遺物は，鉄剣(9)･鉈(10)･大型鉄鏃２点(11・12)･小型鉄鏃 19 点(13 ～ 31)が出土した。このうち，すでに述べているように棺台土の上面に広がる粘土層の直上から鉄剣(9)･鉄鏃(11・12)･鉈(10)が出土している。鉄剣(9)は棺台土の南側縁から約 20 ㎝北，西小口から約 50 ㎝東に位置し，峰を東に向けて墓壙長軸と並行し，棺台土に全体が密着していた。一方鉄鏃(11・12)と鉈(10)は，北側縁か



第13図　第３号古墳第１主体遺物出土状況実測図（Ｓ＝1:10）

ら約10㎝南，棺台土の西小口から約100㎝北に位置し，いずれも峰を東に向け，棺台土にほぼ密着していた。ただし鉈(10)は峰がやや南に向き，鉄鏃２点は折り重なるように出土している。以上の４点は，その出土状況から棺内に副葬されていた可能性が高い。一方，小型鉄鏃19点(13～31)は，大きく２群に分かれて出土している。第１群は11点からなり，棺台土の西小口から約50㎝東，南側縁から約15㎝北，棺台土の１～２㎝ほど上方に集中して出土した。一方第２群は７点からなり，西小口から約80～90㎝東，南側縁から７～40㎝北，棺台土の上方３～15㎝までの範囲を中心に分布し，第１群とは最短でも35㎝離れている。両群ともに峰の向きや身部の傾きに規則性は認められない。第１群の集中の様子と両群の距離から，これらの鉄鏃群は当初から２群にわかれていたと考えられる。また向き・傾きの乱れや棺台土から離れて出土したものが見られることは，前述の鉄剣・鉈・大型鉄鏃に比べ元位置が高く，④ブロックが沈降した際に巻き込まれたことを示していると考えられる。以上と，大半が矢柄の痕跡を有していることも含めて考えれば，本来小型鉄鏃群は，供献品として２つの矢の束を互い違いにして，木棺の蓋の上に置いたものであった可能性が高い。

〇第２主体（第14図・図版10b）

第２主体は墳丘南側，墳裾から約１ｍの墳裾部平坦面上に位置する。平面形状は側辺がやや外側に張った隅丸長方形で，主軸方位はN87°Ｅである。規模は検出面で長さ139㎝最大幅65㎝，墓壙底面で長さ70㎝，幅は西小口で39㎝東小口で43㎝で，底面の標高は61.87ｍ，深さは最大52㎝である。また，底面の両小口際には溝が掘り込まれており，その断面形状は逆台形で，幅は上端で約15㎝底面で約10㎝，墓壙底面からの深さは５～７㎝である。位置と形状から，組み合わせ式木棺の材を差し込むための溝と考えられる。

本主体から遺物は出土していない。

〇第３主体（第15図・図版11a）

第３主体は墳丘南東側，墳裾から約２ｍ，第２主体からは東2.5ｍに位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位はN49°Ｅ，規模は検出面で長さ231㎝最大幅95㎝である。一方，墓壙底面は平面形状が両小口に比べ中央部が狭まる細長い鼓形で，長さ208㎝，幅は西小口80㎝東小口62㎝中央部46㎝，底面の標高は61.92ｍ，深さは最大37㎝である。．北側壁面は３つの小平坦面が認められるが，位置・形状ともに性格は不明である。底面の形状から考えれば，壁面が崩落した痕跡の可能性も考えられよう。

本主体から遺物は出土していない。

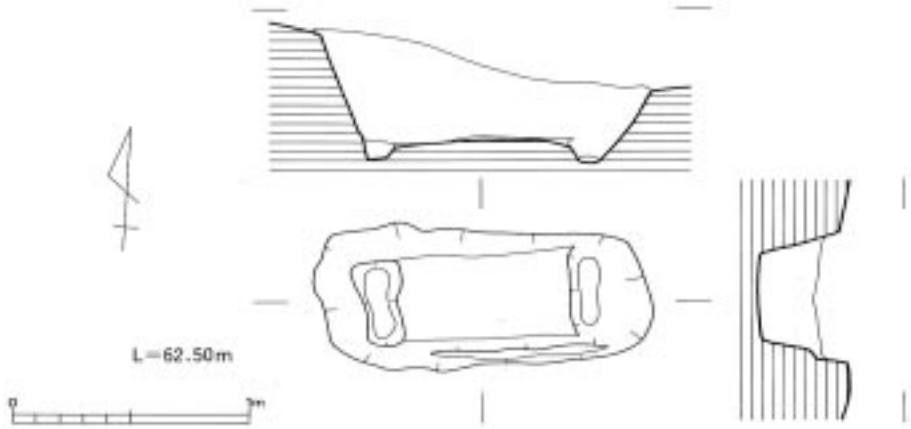
〇第４主体（第16図・図版11b）

第４主体は墳丘東南東側，墳裾から約３ｍ，第３主体から北東1.3ｍに位置し，主軸方位はN40°Ｅである。上部の大半を削平されており，底面の一部も欠損している。残存部から推定した平面形状は隅丸長方形で，墓壙底面の規模は長さ約250㎝幅約55㎝，最高所の標高は62.00ｍで，深さは最大20㎝である。

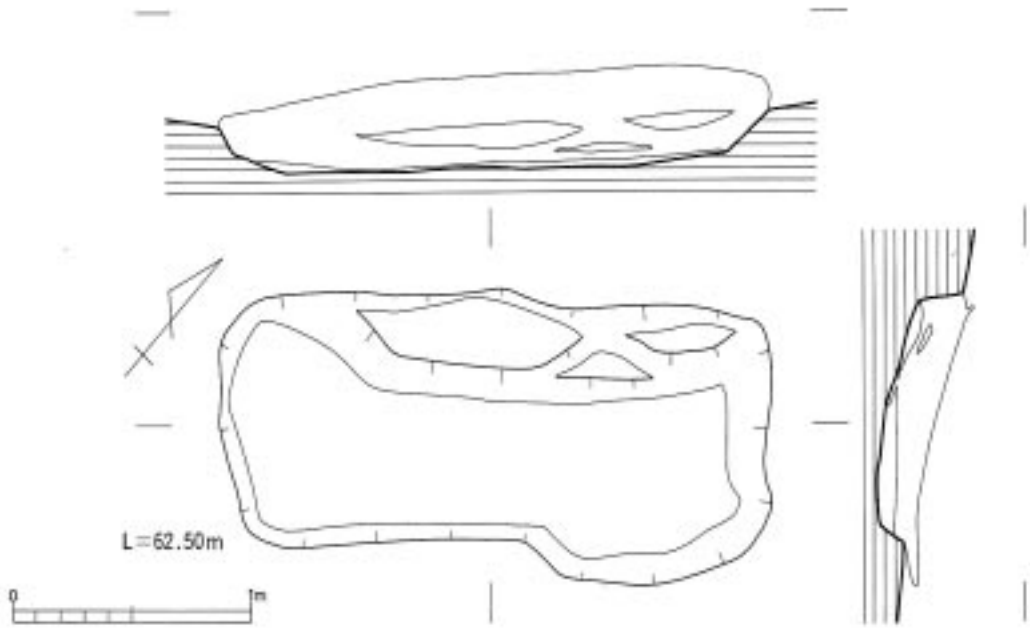
本主体から遺物は出土していない。

〇第５主体（第17図・図版11c）

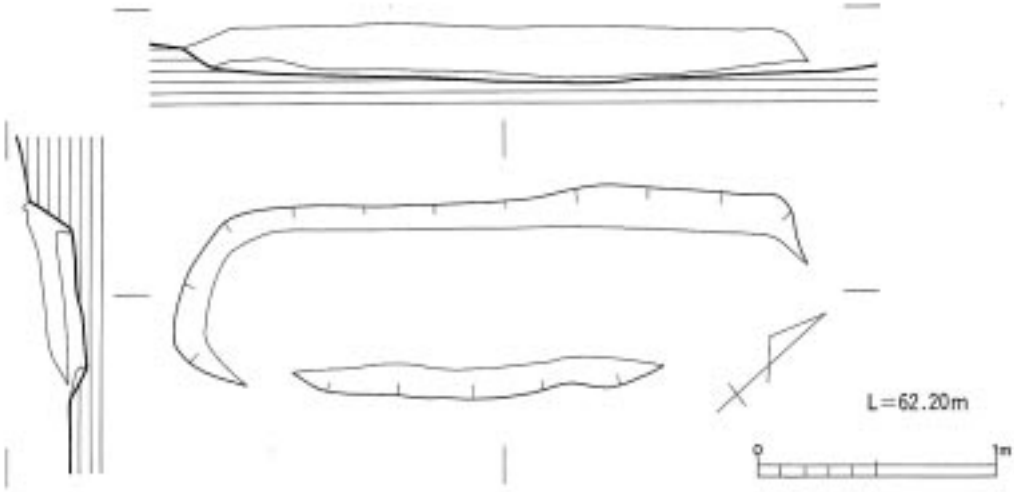
第５主体は墳丘東南東側，墳裾から１ｍ，第３主体の北北東約２ｍ，第４主体の北1.7ｍに位置す



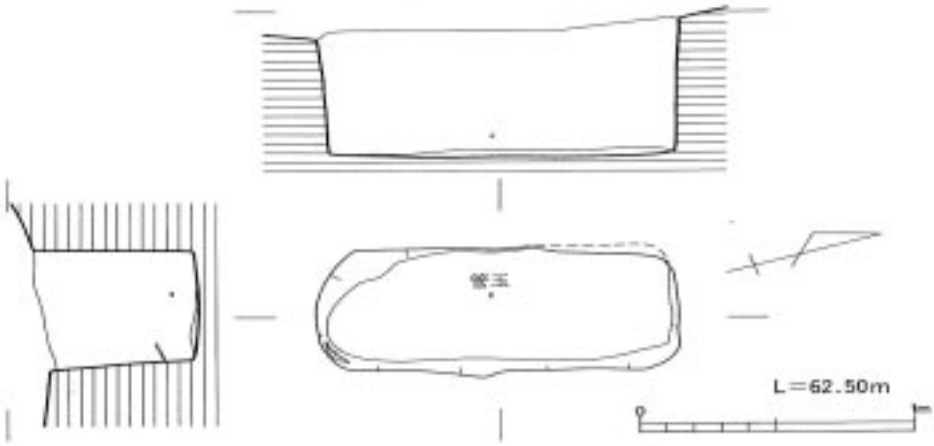
第 14 図　第 3 号古墳第 2 主体実測図（S ＝ 1:30）



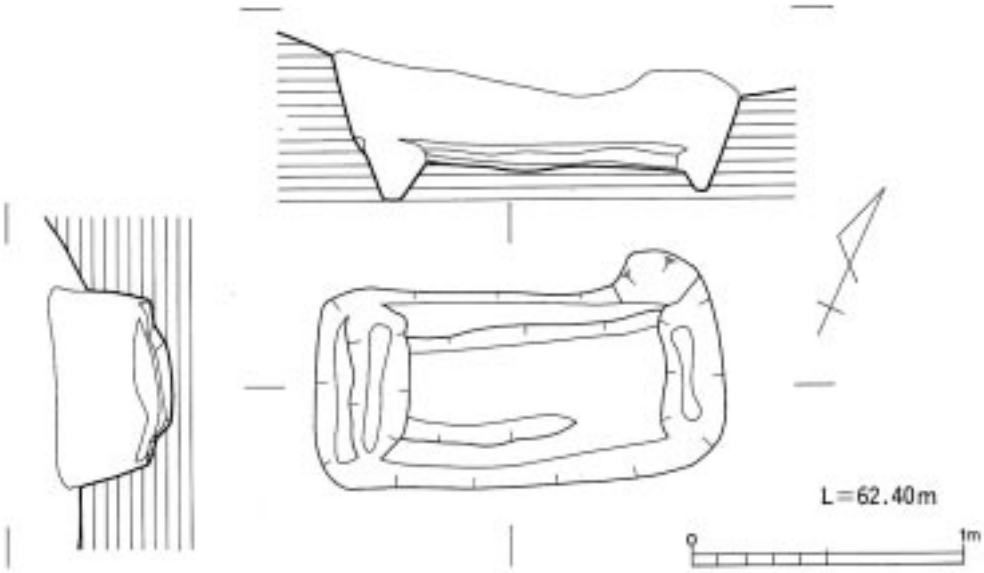
第 15 図　第 3 号古墳第 3 主体実測図（S ＝ 1:30）



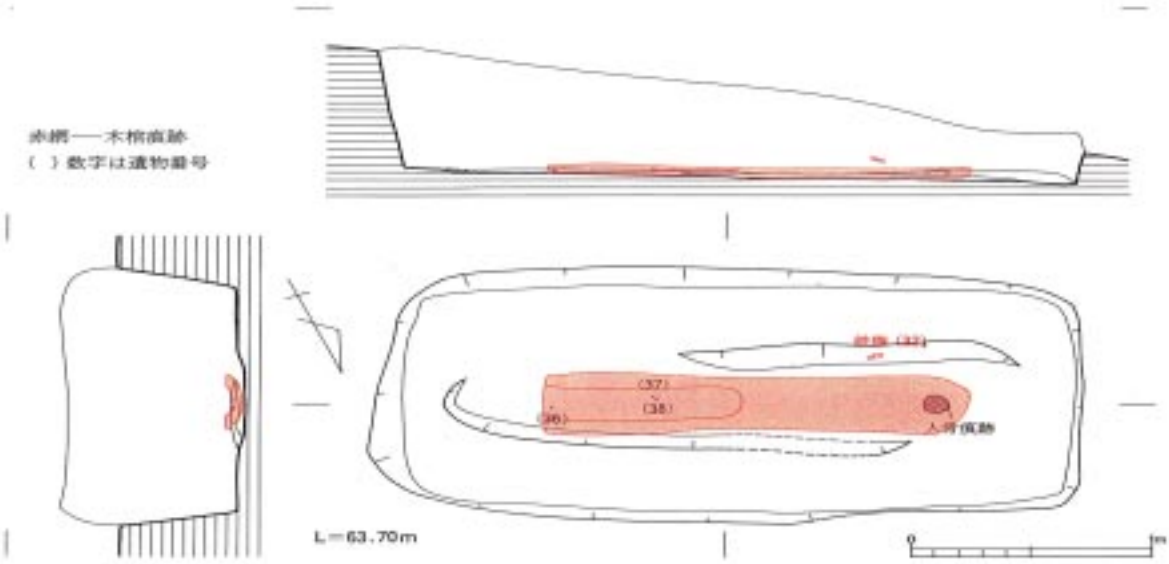
第 16 図　第 3 号古墳第 4 主体実測図（S ＝ 1:30）



第 17 図　第 3 号古墳第 5 主体実測図（S ＝ 1:30）



第 18 図　第 3 号古墳第 6 主体実測図（S ＝ 1:30）



第 19 図　第 3 号古墳第 7 主体実測図（S ＝ 1:30）

る。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位はN19°E，規模は検出面で長さ132㎝幅60㎝である。墓壙底面は，北半分は隅丸方形，南半分はいびつな半円形で，長さ125㎝最大幅55㎝，最高所の標高は61.83ｍで，深さは最大65㎝である。

遺物は，墓壙底面中央のやや西側壁よりから管玉(33)が出土した。標高は61.9ｍで，穴は短軸方向を向いていた。

○第6主体（第18図・図版12a）

第6主体は墳丘東南東側，墳裾から約2.7ｍ，第4主体の東約1ｍに位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位はN65°E，規模は検出面で長さ150㎝幅75㎝である。墓塘底面は長さ95㎝で2段に掘り込まれており，一次壙の幅は西小口で60㎝東小口で50㎝，その中央に掘り込まれた二次壙は上端で幅37㎝，底面で30㎝である。底面の標高は一次壙が61.90ｍ，二次壙で61.80ｍで，深さ最大で46㎝である。また，底面の両小口際には溝が掘り込まれており，その断面形状は逆台形で，幅は上端で15～20㎝底面で約5㎝で，墓壙底面からの深さは西側が15㎝，東側が7㎝である。位置と形状から，組み合わせ式木棺の材を差し込むための溝と考えられる。

本主体から遺物は出土していない。

○第7主体（第19図・図版12b）

第7主体は墳丘東側，墳裾から2ｍ，第6主体の北1.5ｍに位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位はN13°W，規模は検出面で長さ275㎝幅は南小口で90㎝北小口で85㎝である。墓壙底面は，平面形状が側辺が内湾する細長い鼓形で，長さ255㎝幅南小口77㎝北小口57㎝中央部46㎝である。墓壙底面の標高は61.87ｍで，深さは最大62㎝である。また西側壁には，墓壙底面から約10㎝の高さに，長さ135㎝最大幅6㎝の細長い平坦面がつくられていた。

本主体の埋土は真砂土を主体とするが，墓壙底面直上において，中央部での厚さ約10㎝の黄褐色の土層を確認した。この層は墓壙底面から約10㎝上方で面的な広がりを確認することができ，この面での平面形状は長円形で，長さ200㎝最大幅45㎝である。その位置と形状から，本主体に納められた木棺の痕跡と考えられる。なお，木棺の全体の形状は確認できなかったが，本層の形状から，底面の形状はゆるやかな舟底状であった可能性が高い。

本主体からガラス小玉(34)が出土した。

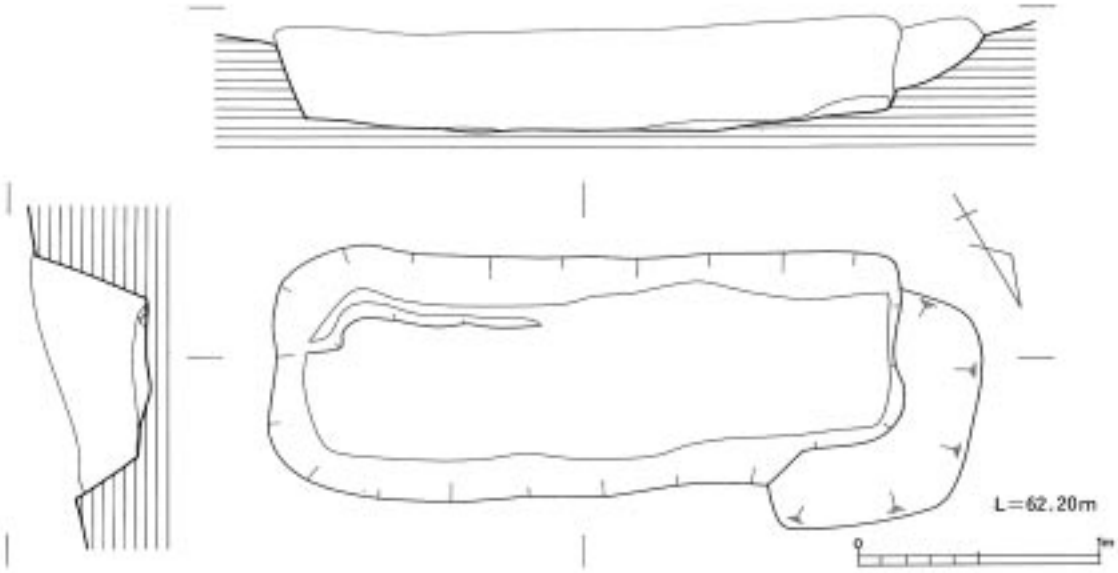
○第8主体（第20図・図版12c）

第8主体は墳丘東北東側，墳裾から3.8ｍ，第7主体の北2ｍに位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位はN62°W，規模は検出面で長さ242㎝幅115㎝である。墓壙底面は，長さ255㎝幅65㎝で，墓壙底面の標高は61.63ｍで，深さは最大52㎝である。墓壙底面の西側辺際南半には溝が掘り込まれており，断面形状逆台形で，長さ約100㎝深さ4㎝，幅は上端で10㎝底面で5㎝である。位置と形状から，組み合わせ式木棺の側板を差し込む溝の可能性が考えられる。

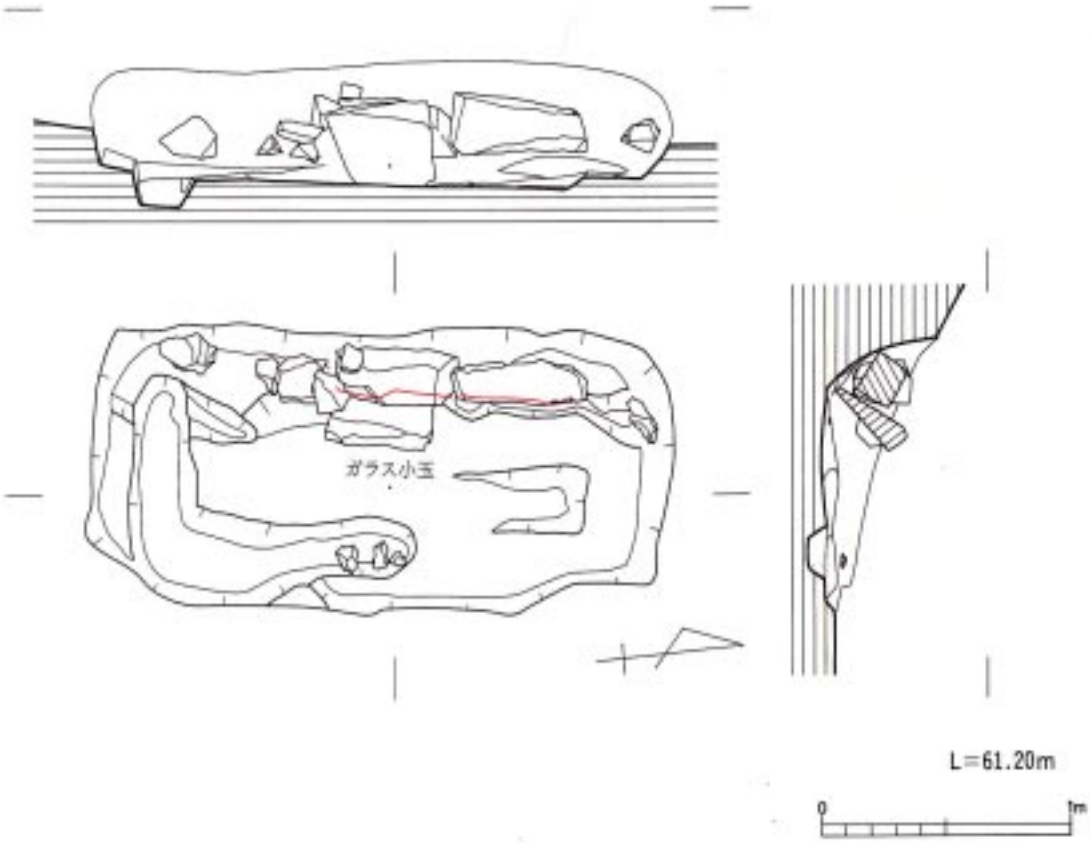
本主体から遺物は出土していない。

○第9主体（第21図・図版13a）

第9主体は墳丘東側，墳裾から10ｍ，第7主体の東7.5ｍに位置する。第3号古墳に伴う埋葬主体群中唯一の箱式石棺であるが，斜面中に位置していたため東半分の墓塘・石棺材は流失している。



第 20 図　第 3 号古墳第 8 主体実測図（S ＝ 1:30）



第 21 図　第 3 号古墳第 9 主体実測図（S ＝ 1:30）

墓壙は平面形状が南にややひらく隅丸長方形で，主軸方位はN9°E，規模は検出面で長さ234㎝幅は南小口100㎝北小口87㎝である。墓壙底面の標高は60.52ｍで，その南小口及び東西両側壁際には，石棺材を据えるため幅約15～25㎝，深さ10㎝までの溝が掘り込まれている。据えられていた石棺材の大半は失われており，元位置をほぼ保っていると思われるのは西側壁の２石のみである。石材の規模は長さ約50㎝厚さ約15㎝高さ10～20㎝で，横長に据えられている。石棺の構造は，欠損部分が多く明らかにはできなかった。このため，石棺の内寸も不明確であるが，遺存していた石材や底面の溝などの位置関係から推定すれば，概ね長さ160㎝幅30㎝高さ20㎝程度であろう。

遺物は，墓壙底面のほぼ中央，底面から約10㎝の高さからガラス小玉(35)が出土した。

○第10主体（第22図・図版１３ｂ，14a）

第10主体は墳丘南側溝の外側，溝南岸から約２ｍに位置する。平面形状は側辺がやや外湾する隅丸長方形で，主軸方位はN68°Wである。規模は，一次壙が検出面で長さ295㎝幅は両小口130㎝中央部150㎝，底面が長さ280㎝幅両小口115㎝中央部130㎝である。二次壙は一次壙底面中央部が浅く掘りくぼめられたもので，平面形状は長円形で，上端で長さ約240㎝最大幅58㎝，底面で長さ約235㎝最大幅39㎝で，深さ3㎝である。二次壙底面の標高は62.58ｍで，深さは最大80㎝である。

本主体の埋土は真砂土を主体とするが，二次壙底面直上において，厚さ２～８㎝の黄褐色の土層を確認した。この層は二次壙底面から約８㎝上方で面的な広がりを確認することができ，その平面形状は北小口が半円形になる長方形で，長さ178㎝最大幅34㎝ある。また，南半部は断面形状が浅いＵ字形であった。その位置と形状から，本主体に納められた木棺の痕跡と考えられる。なお，木棺の全体の形状は確認できなかったが，断面の形状から，底面の形状はゆるやかな舟底状であった可能性が高い。

また，木棺痕跡の北小口端から約20㎝中央側，墓壙底面から約５㎝の高さで，直径約10㎝厚さ５㎝の黒紫色の土層を確認した。位置と形状から，葬られた遺体の後頭部の痕跡の可能性が考えられる。

遺物は，鉄鏃１点(32)･ガラス小玉３点(36～38)が出土した。鉄鏃は木棺痕跡北半部西縁の西約15㎝に位置し，一次壙底面からの高さは約10㎝である。切っ先は北側を向いていた。一方ガラス小玉は全て木棺痕跡の南半部埋土中からの出土である。その出土状況から，鉄鏃は木棺外の供献品，ガラス小玉は相内に納められた副葬品と考えられる。

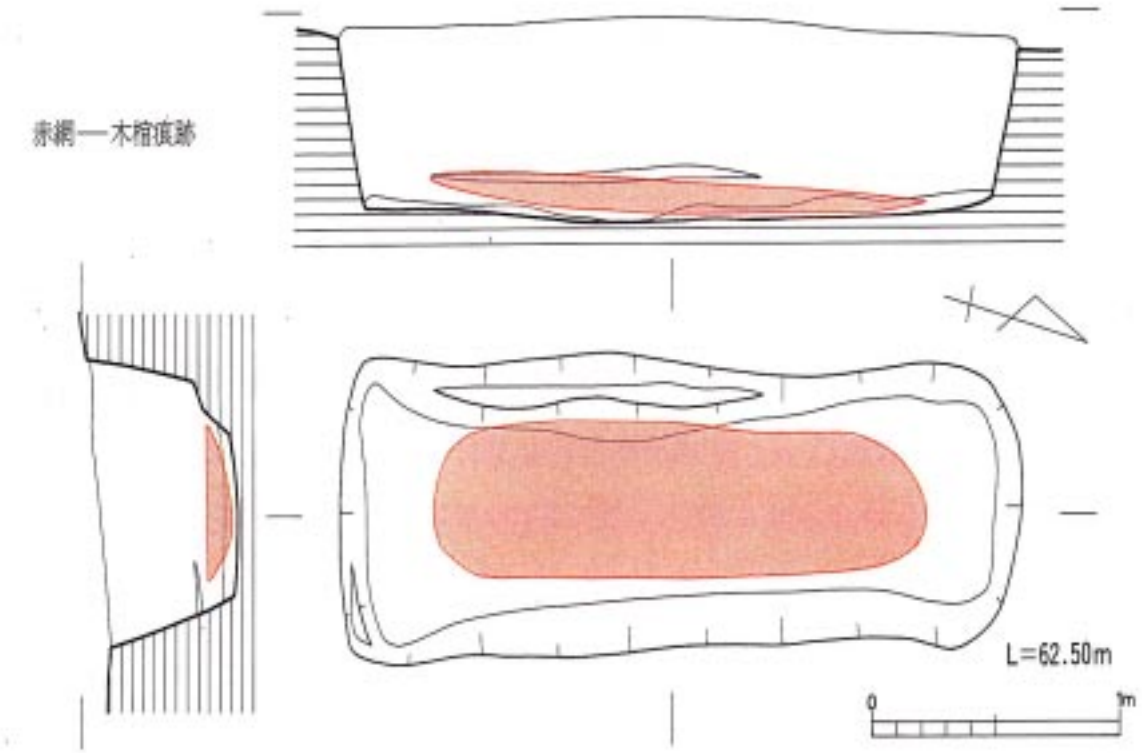
④　出土遺物（第23，24図・巻頭図版，図版14b，15，16，17）

・鉄剣(9)

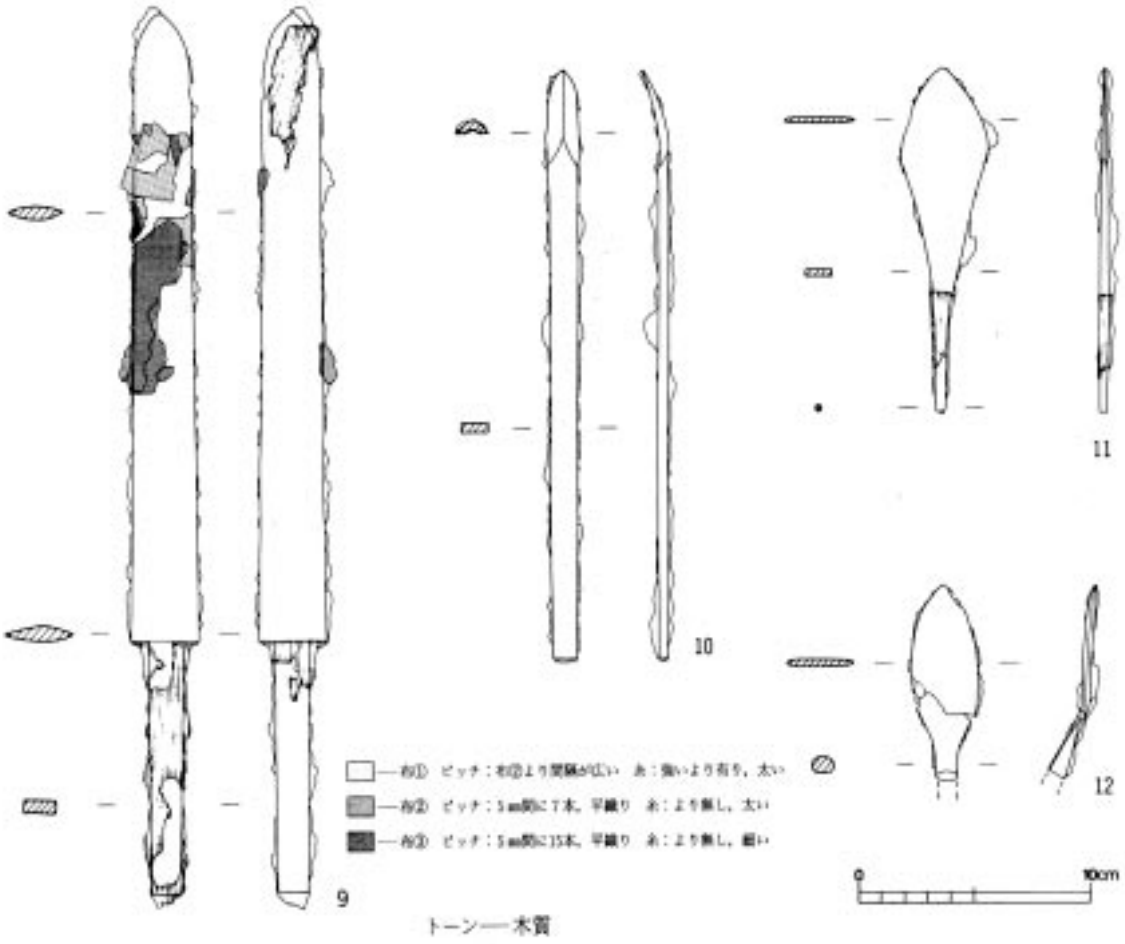
完形品で，全長345㎜刃部最大幅20㎜刃部厚７㎜茎部長99㎜茎部端幅13㎜茎部厚５㎜重量191.4ｇである。明確な関を持ち，基部は平らである。目釘穴は無い。茎部と峰に木質が遺存している。茎部のものは柄と考えられ，材はとねりこ属である。一方峰のものは，鞘と棺材の可能性があるが，材質は不明である。また刃部の上半分に布の痕跡が残っていた。副葬時に剣を巻いていたものと考えられるが，ピッチと糸のよりから以下の３種類に分けることができた。

①　糸のピッチが幅１㎝中に30本で，糸が細くよりのかかっていないもの。

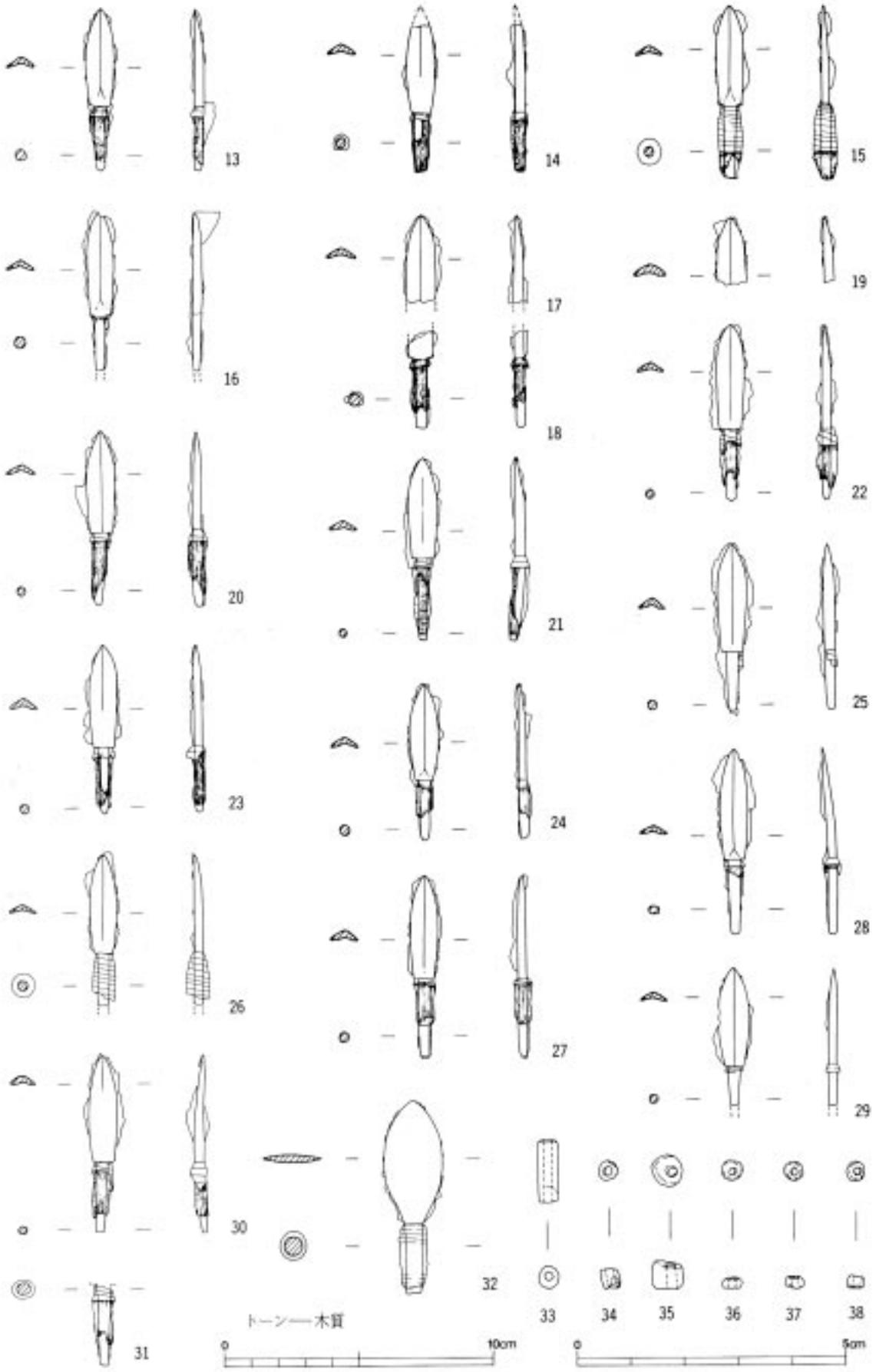
②　糸のピッチが幅１㎝中に14本で，糸が太くよりのかかっていないもの。



第22図　第3号古墳第10主体実測図（S＝1:30）



第23図　第3号古墳出土遺物実測図［1］（S＝1:3）



第24図　第３号古墳出土遺物実測図［２］（S＝1:2，33 ～ 38 は S＝1:1）

③　糸のピッチは正確に計測できなかったが，より間隔があき，糸が太くよりがかかっているもの。

実体顕微鏡で観察できた範囲では内側から③→②→①の順に重なっており，さらに①は二重になっていた。副葬時に剣を巻いた布と考えられる。

・鉈(10)

全長220㎜，刃部は長さ37㎜最大幅15㎜，明確な鎬と裏鋤を持ち断面形状は「へ」字形で，身部は横断面が長方形で最大幅12㎜厚さ4㎜重量66.6 gである。

・鉄鏃(11 ～ 32)

(11)は全長134㎜で，茎部側に大きく引き延ばされた菱形，いわゆる圭頭式の鏃身を持つ凸基有茎式である。刃部は屈曲点から峰側だけに形成されており，緩やかに外湾しながら開き，断面形状はレンズ状で厚さは2㎜である。最大幅は屈曲点で38㎜である。屈曲点から茎部側はわずかに内湾しながら閉じてゆく。茎部との明確な関は無い。峰から87.5 ～ 118㎜の部分に矢柄と考えられる木質が遺存している。木質に覆われているためこの部分の断面形状は不明確だが，屈曲点から木質との間の断面形状は長方形で厚さは3㎜，木質から茎部端の間の断面形状は円形で端部の直径は3㎜である。重量は36.9 gである。

(12)は柳葉形の鏃身を持つ凸基有茎式で，鏃身部と茎部の間には明確な関がある。茎部は約10㎜を残し欠損しており，現在長76㎜鏃身長66㎜最大幅30㎜である。刃部が形成されているのは峰から約50㎜の範囲で，この部分の断面形状はレンズ状で，厚さは3㎜である。残存茎部の端は断面形状楕円形で，幅8.5㎜厚さ6.5㎜である。重量は23.3 gである。

(13 ～ 31)は平基有茎式で鏃身部と茎部の間には明確な関がある。鏃身部の平面形状は細身の柳葉形の範疇に入るものであるが，明確な鎬と裏鋤を持つ断面Ｖ字形で，一見小型の鉈のようにも見える独特の形状をしている。茎部の断面形状は円形である。この形状の鉄鏃は，韓国釜山市老圃洞遺跡第31号墳などから出土している「骨鏃形鉄鏃」と呼ばれているもので，日本では現在のところ福岡県郷屋遺跡出土例が知られるのみである2)。詳細な寸法は第３表に記すが，概ね鏃身長55㎜前後，幅10 ～ 11㎜茎部端径3 ～ 4㎜，全長は完形のもので60㎜前後と，形状・寸法ともに非常に規格性が高い。なお，茎部が遺存していたもの全てにおいて多少の差はあるものの，矢柄（タケ亜科）と，矢柄と鏃を固定するための樹皮が遺存していた。

(32)は木の葉形の鏃身を持つ凸基有茎式で，鏃身部と茎部の間には明確な関がある。現存長66㎜鏃身長42㎜最大幅21.5㎜で茎部は約25㎜を残し欠損している。鏃身部の断面形状は厚さ3㎜のレンズ状で，鏃身全体に刃部が形成されている。残存茎部の端の断面形状は円形で，直径6㎜である。重量12.6 gである。なお，茎部には矢柄の部が遺存しており，矢柄の直径は10㎜である。

・管玉(33)

碧玉製で長さ10.5㎜直径3.8㎜重量0.4 gで片側穿孔である。

・ガラス小玉(34 ～ 38)

いずれもアルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス（K2O-SiO2系）で，色調は淡青色である。また，内部に残る気泡が全て球形であることから，鋳造品と考えられる。寸法は以下の通りである。

(34) 直径 3.5 ㎜　長さ 3.1 ㎜　孔径 1.5 ㎜　重量 測定不能

(35) 直径 6.0 ㎜　長さ 5.0 ㎜　孔径 2.0 ㎜　重量 0.2 g

(36) 直径 3.8 ㎜　長さ 2.0 ㎜　孔径 1.1 ㎜　重量 測定不能

(37) 直径 3.7 ㎜　長さ 2.0 ㎜　孔径 1.2 ㎜　重量 測定不能

(38) 直径 3.1 ㎜　長さ 2.0 ㎜　孔径 1.4 ㎜　重量 測定不能

⑤　築造時期

第３号古墳の築造時期については，時期決定の参考になる遺物が一切出土しなかったため明確にはできなかった。ただし，類例が非常に限られているが，骨鏃形鉄鏃の国内に於ける出土例は，弥生時代末から古墳時代初頭にかけてのものである。

第２表　骨鏃形鉄鏃観察表

番号	全長(㎜)	刃部長(㎜)	刃部幅(㎜)	基部幅(㎜)	茎部幅(㎜)	茎部径(㎜)	重量(g)	備　　考
13	55	33	10.5	7.5	22	3	3.9	矢柄遺存
14			10	7.5	20	3.5	3.6	矢柄遺存
15	60	34	10	7.5	26	4	4.6	矢柄径8.5㎜
16	55	35	10	7.5	20	3.5	4.1	
17			11				2.5	18と同一？
18				8.5	24	4	2.4	17と同一？　矢柄遺存
19			11				1.5	刃部のみ
20	60	35	11	8	25	3.5	4.2	矢柄遺存
21	63	35	11	8	28	3	4.5	矢柄遺存
22	60	36	10	8	24	3.5	5.9	矢柄径8㎜
23	58	35	10	8	23	3.5	4.4	矢柄遺存
24	53	33	10.5	6.5	20	4	3.6	
25	57	37	11	8	20	3.5	5.6	矢柄遺存
26	53	34	10	7	19	4	3.9	矢柄径8.5㎜
27	63	35	10	7.5	28	4	4.3	矢柄遺存
28	63	38	10.5	8	25	3.5	5.0	矢柄遺存
29		34	11	7			2.5	
30	61	36	10.5	8	25	3.5	4.7	矢柄遺存
31					28	3.5	2.1	茎部のみ　矢柄遺存

２．その他の遺構

(1) 概要

前述した古墳以外にも遺構を確認した。調査区の南西半を占める標高64ｍ平坦面の南西端でＳＨ１を，その東側にＳＢ１を，さらにその北側にＳＫ１を，また，調査区の北東半を占める緩斜面中，57ｍ平坦面の南側，標高約58～55ｍの位置でＳＨ２・３，ＳＸ１，ＳＫ２・３を，北西側，標高約57～55ｍの位置でＳＸ２，ＳＫ４・５，ＳＸ３を確認した。

(2) 遺構

① ＳＨ１（第25，26図・図版18）

64ｍ平坦面の南西端に位置する住居跡で，南西側半分は調査区域外であるため確認できていない。また床面に掘り込まれた楕円形の窪みは，埋土の状況から，尾根上に点在する後世の土坑のひとつである。

本住居跡の平面形状は確認範囲から推定すると歪な隅丸方形である。確認した床面の規模は北東辺で約370㎝，調査範囲外に延びる北西辺で約300㎝，南東辺で約100㎝である。最高所の標高は63.27ｍである。壁高は最大26㎝，壁溝は北側から東側にかけて断続的に遺存しており，幅10～15㎝，深さは2～7㎝である。

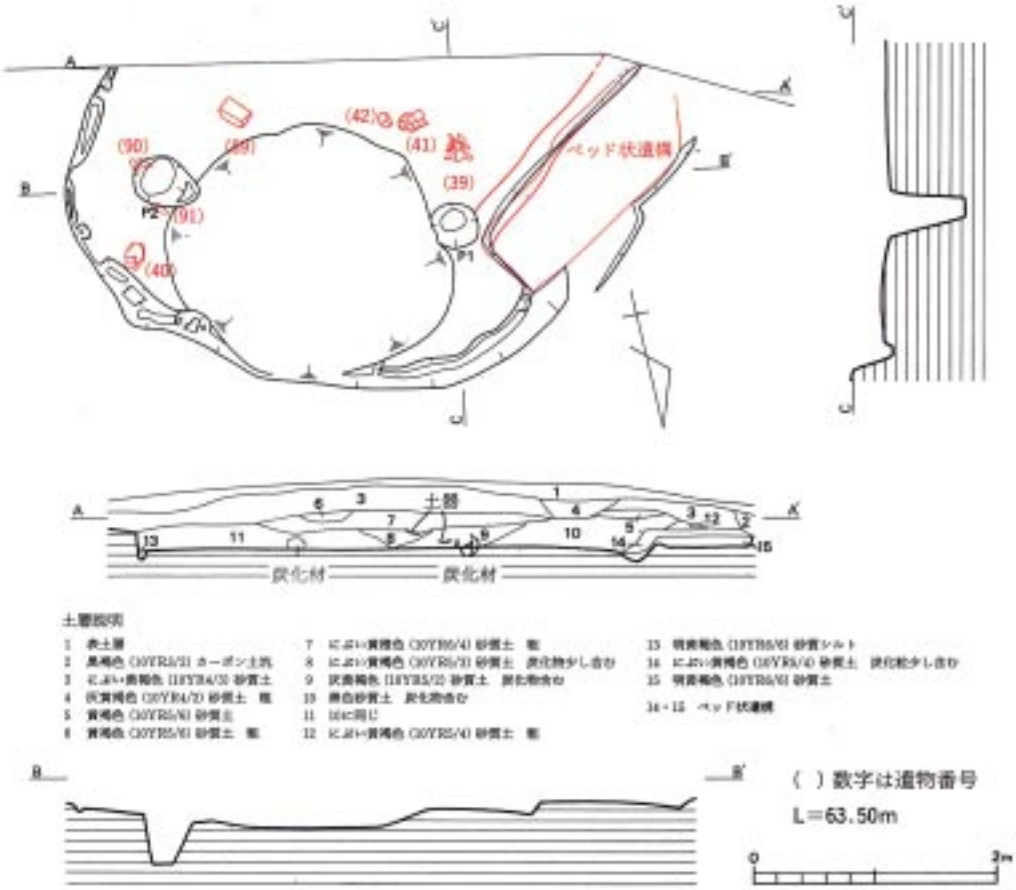
床面にはＰ１・Ｐ２を確認したが，規模・形状から主柱穴と考えられる。Ｐ１は底面直径が約15㎝，深さが約60㎝，底面標高62.6ｍ，Ｐ２は底面直径が約25㎝，深さが約40㎝，底面標高62.77ｍで，柱穴間の距離は約250㎝である。また北西壁に沿った床面上には，幅約70㎝，長さ約200㎝，高さ約15㎝の長方形の盛土を確認した。位置・形状からベッド状遺構と考えられる。検出部の床面や柱穴の状況から，床面の平面形状が径5～6ｍの楕円形で５基の主柱穴を持つ住居と推定される。

ところで，本住居跡からは多量の炭化材が出土した。これらの炭化材は出土位置と形状から以下の５つに大別できる。

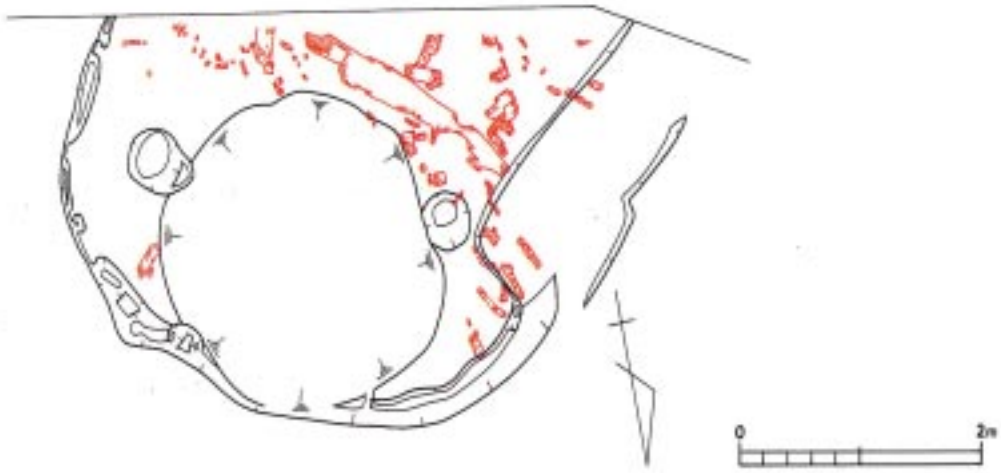
① 床面中央付近の幅15～20㎝，長さ約190㎝の板状の材
② 床面中央付近の径15～20㎝の丸太状の材
③ 床面中央付近の径10㎝程度の丸太状の材
④ 床面縁辺で中心から壁面へ向けて放射状に延びる径3～5㎝の丸太状の材
⑤ 2～3㎝の規則性のない材

①は位置・規模から棟木・梁材とい？た上屋構造を構成する材で，Ｐ１・Ｐ２とこれに対応する主柱穴との間に位置しており，棟木であった可能性が高い。棟木であるとするなら北西一南東を棟方向とする住居を想定できる。②は規模から柱材，③は規模から垂木材であると考えられる。④は位置や規模から垂木材であり，⑤は建築材が炭化して砕けたものであると考えられる。これらの炭化材は科学分析を行った結果，すべて，ブナ科クリ属のクリであることが判明した。

これらの炭化材が出土していること，また，後述するように遺構に伴いほぼ完全に復元できる弥生土器等の遺物が９点出土していることから，本住居跡は失火による焼失住居であると考えられる。遺物は床面上から，弥生土器(39～42)と砥石(89～92)が，また，埋土中からは弥生土器(43・44)



第 25 図　ＳＨ１実測図（Ｓ＝1:60）



第 26 図　ＳＨ１炭化材出土状況実測図（Ｓ＝1:60）

と鉄鏃(98)が出土した。本遺構の時期は，土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

②　ＳＢ１（第27図・図版19a）

ＳＨ１の東側約5ｍに位置する掘立柱建物跡である。南東部は傾斜が急になっており，流失していると考えられる。柱穴はコの字形に位置する６基を確認した。柱穴の底面直径は20～30㎝，底面の標高は62.12～62.24ｍとほぼ水平である。柱間距離はＰ１－Ｐ２間で約180㎝，Ｐ２－Ｐ３間で約140㎝，Ｐ３－Ｐ４間で約170㎝，Ｐ１－Ｐ５間で約195㎝，Ｐ４－Ｐ６間で約185㎝である。Ｐ１－Ｐ４間の柱間距離の間隔はＰ１－Ｐ５とＰ４－Ｐ６の間隔よりも短いため，Ｐ１からＰ４のラインを長軸すなわち桁行とする柱穴の配置が想定できる。その場合，棟方向はN43.5°Ｅとなる。

なお，桁行であるＰ５－Ｐ６間に柱穴が確認できなかったことから，さらに斜面側にＰ１～Ｐ４に対応する柱穴列が存在し，２間×３間の柱穴配置になる可能性が考えられる。Ｐ１～Ｐ４に対応する４基の柱穴は，各柱穴の底面標高とほぼ同じ高さの底面標高と想定した場合，地山に達していないため，流失したものと考えられる。ただ本遺構を２間×３間の建物とすると，地山に達していない南東部の柱穴の存在から，長期間の使用や重量物の貯蔵には不向きである。なお，本遺構に伴う遺物は出土しておらず，その性格については明確にし得なかった。

③　ＳＫ１（第28図・図版21a）

ＳＫ１はＳＢ１の北側約７ｍに位置する平面形状は円形，断面形状は，ほぼ長方形の土坑である。底面の規模は南北に約80㎝，東西に約90㎝，深さは，現状約70㎝で，底面標高は62.35ｍである。土坑の形状・規模からＳＫ１は貯蔵用と考えられる。また底面には，幅約6㎝，深さ３～５㎝の溝が，壁面に沿ってほぼ全周している。この溝は，貯蔵物の湿気防止を目的とした溝であると考えられる。

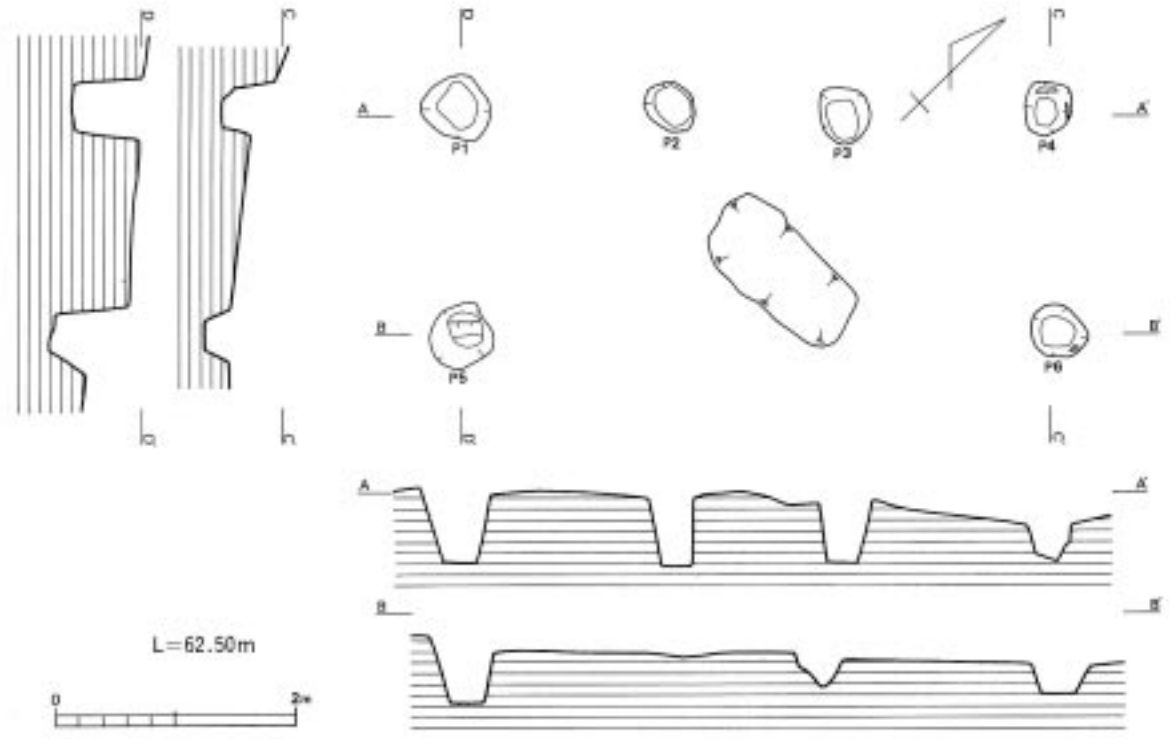
なお本遺構に伴う遺物は出土していない。

④　ＳＸ１（第29図・図版19b，20a）

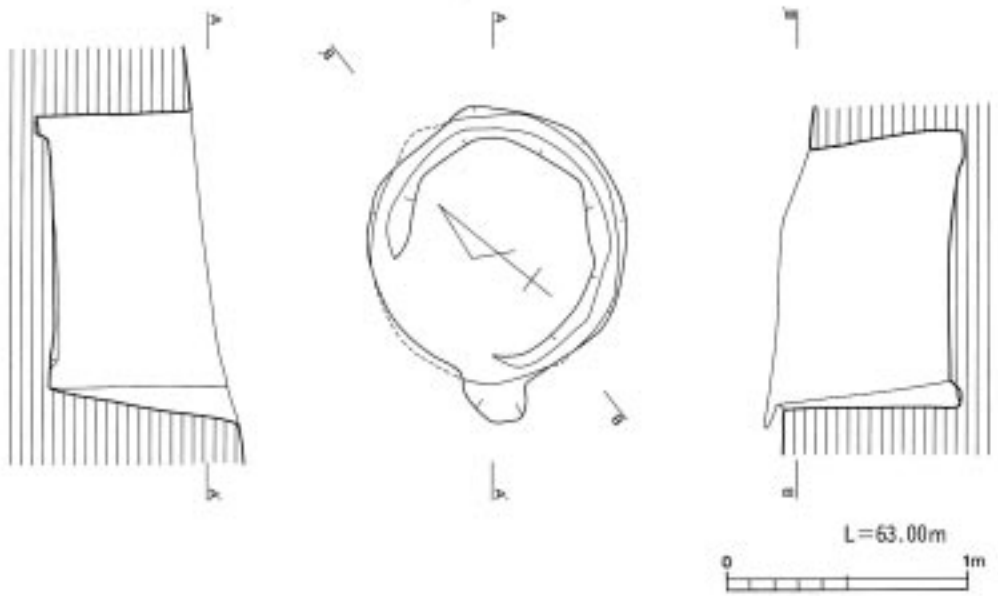
ＳＸ１は調査区北東半の緩斜面中，57ｍ平坦面の南側に位置し，尾根筋に平行して30～100㎝程度掘り込んで造られており，残存部で幅約11ｍである。位置や形状からＳＨ２等の築造に先行し，整地の目的で築造されたものと考えられる。ＳＨ２の東側が確認できず，流失していることから，本遺構も東側が流失していると考えられる。平坦面はＳＨ２の南辺で南北に二分し，北部は長さ約7.5ｍ，奥行0.2～1.8ｍ，最高所の標高57.1ｍ，一段下がる南部は長さ約3.9ｍ，奥行0.25～1.08ｍ，最高所の標高56.4ｍである。これらの平坦面の壁際には，ほぼ全域に溝状遺構が造られており，このうち北側平坦面の溝は幅３～12㎝，深さ約２～18㎝，底面の標高は約57.0ｍ，南側平坦面の溝は幅５～58㎝，深さ７～20㎝，底面標高は約55.5ｍである。なお，掘方壁面中，ＳＨ２の南西からＳＫ２の東側にも溝状遺構が位置する。この溝は平坦面に伴うものではないものの，底面標高が約57.0ｍ前後であり，北端から伸びる溝状遺構と一連のものとして造られたものと考えられる。

遺物は平坦面上から，弥生土器(47・48)が出土した。本遺構の時期は，土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

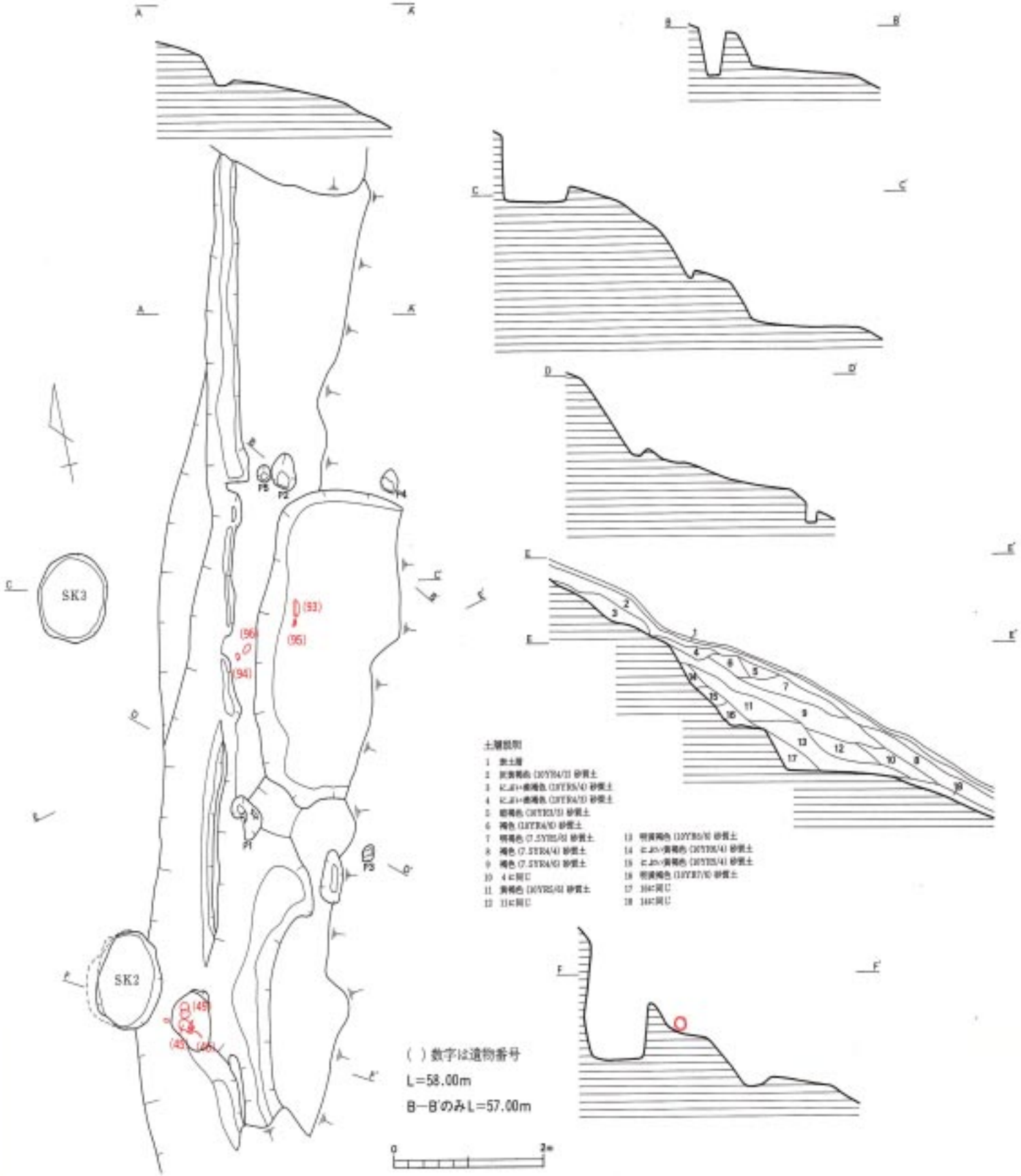
また，ＳＸ１の掘方壁面中，ＳＫ２の東に隣接して，南北約70㎝，東西約50㎝の歪な楕円状の平坦面を確認した。平坦面上からは弥生土器のほぼ完形の壷形土器(49)・甕形土器(45・46)が出土した。壷形土器(49)は若干傾いているものの口縁を上に向けて立った状態で出土しており，人為的にこの



第 27 図　ＳＢ１実測図（Ｓ＝1:60）



第 28 図　ＳＫ１実測図（Ｓ＝1:30）



第29図　ＳＸ１・ＳＨ２実測図（Ｓ＝1:60）

平坦面上に土器が置かれた可能性がある。本遺構の時期は，土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

⑤　ＳＨ２（第29図・図版20b）

ＳＨ２は，ＳＸ１のほぼ中央に位置している。本住居跡は，壁面がコの字状に遺存しており，東壁側は流失したと考えられる。残存部から推定できる平面形状は長方形で，残存部での床面の規模は，南北に約340㎝，東西に現状で約140㎝，最高所の標高は56.51ｍである。壁高は最大42㎝である。

柱穴は床面では確認できず，すべて掘方の外側に位置している。位置とその規模から，主柱穴と考えられるのはＰ１～Ｐ４で，底面はＰ２が直径約18㎝の円形で大きめだが，他は約10㎝前後の歪な長円形である。Ｐ１は深さ約30㎝，底面標高56.64ｍ，Ｐ２は深さ約50㎝，底面標高56.43ｍで，Ｐ３は残存部で深さ約30㎝，底面標高56.20ｍ，Ｐ４は残存部で深さ約30㎝，底面標高56.22ｍである。柱間距離はＰ１－Ｐ２間で約400㎝，Ｐ１－Ｐ３間で約170㎝，Ｐ２－Ｐ４間で約140㎝である。また，Ｐ２の西側に隣接して，底面直径約10㎝，深さ約21㎝，底面標高56.86ｍのＰ５を確認した。本住居跡東側は傾斜が急であるため，Ｐ３から約170㎝，Ｐ４から約140㎝東側に柱穴が存在したとは考えにくい。したがって掘方は約400㎝×170㎝程度の長方形で，上屋構造は，掘方に近接し，南北方向に対称的に位置するＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４の計４基を基本とすると考えられる。Ｐ５は，Ｐ２と距離が近いことから，上屋構造を支えるものか，もしくはＰ２を補強する柱のものであると推定される。なお，柱穴の底面標高を比べるとＰ１－Ｐ３間で44㎝・Ｐ２－Ｐ４間で21㎝西側の方が高くなっている。これは，ＳＸ１が築造時においても，平坦面の奥行がそれほど無く傾斜しており，主柱を支えうる柱穴の底面標高が東側では低くなっていたことを示していると考えられる。

ところで，ＳＸ１の南側は北側に比べ，本住居跡の南側で約30㎝下がっていまた住居の南壁に沿って床面から約6㎝高い段状の遺構を確認した。このことから住居の入口施設が南側に位置していた可能性がある。

ここで，本住居跡の上屋構造について考えてみたい。本住居跡において，宮本長二郎氏の分類3)による伏屋式の住居構造の柱をそのまま，掘方の外側に移動させたと想定した場合，柱の上部は床面から，かなり高い地点に位置することとなる。その場合，垂木の先端が，掘方からかなり離れることとなり，掘方の意味が失われることになる。さらに本住居跡西側には傾斜面が近接しており，地形的に難がある。柱穴の位置・地形面からは，壁立式の構造の可能性が考えられるが，そのことを示す痕跡は確認できなかった。これらのことから，Ｐ１－Ｐ２，Ｐ３－Ｐ４方向を棟とする切妻屋根を上屋構造とした可能性が考えられる。

遺物は，弥生土器(52～60)と砥石（93・95)が床面から，西壁上平坦面で，砥石(94)・磨石（96)が出土した。本遺構の時期は，土器型式から上深川Ⅲ式古段階であると考えられる。

⑥　ＳＨ３（第30図・図版22a）

ＳＨ３は，調査区北東半の緩斜面中，57ｍ平坦面の南側，ＳＨ２の北東約10ｍに位置している。南西側が第２号古墳により削平されているが，残存部から推定できる平面形状はやや歪な方形である。本住居跡は床面及び土層の状況から少なくとも１回の拡張が行われていた。以下，床面の低い方からＳＨ３ａ・ＳＨ３ｂと呼称し，述べていくこととする。

ＳＨ３ａは，床面の規模が一辺約245㎝で，標高は約55.8～55.9ｍである。西壁は大半がＳＨ３ｂによって削られているが，約10㎝程度の高さが遺存している。壁高は最大95㎝である。また，床面の南西１偶には，四壁から東に約6㎝離れて，床面との比高差が現状で約2～3㎝の盛り上がりがある。この盛り上がりと西壁との間は，ＳＨ３ａの壁溝である可能性が考えられる。

ＳＨ３ｂは，ＳＨ３ａ面を東西に約25㎝拡張したもので，床面の規模は南北約245㎝，東西約270㎝，標高は約55.9～56.0ｍである。壁高は最大89㎝である。西壁沿いには約120㎝にわたり，幅約4～7㎝，深さ約4～9㎝の壁溝を確認した。また，床面中央に約55×90㎝の範囲で炭化物を含む層の広がりを確認した。

柱穴はＳＨ２と同じく床面上には無く，掘方の外側から，Ｐ１～Ｐ４の４基を確認した。底面はＰ１が直径約27㎝，Ｐ２が直径約23㎝の円形で，Ｐ４が南北約20㎝，東西約33㎝の長円形である。Ｐ３は北東面が第２号古墳埋葬主体の築造により削られており，北西－南東方向17㎝，北東一南西方向の残存部は約22㎝である。第２号古墳の築造により，いずれも上部が削平されており，底面標高は，Ｐ１が56.35ｍ，Ｐ２が56.7ｍ，Ｐ３が56.54ｍ，Ｐ４が56.28ｍである。柱間距離はＰ１－Ｐ２間で約300㎝，Ｐ１－Ｐ３間で約410㎝，Ｐ２－Ｐ３間で約135㎝，Ｐ３－Ｐ４間で約220㎝である。掘方からの距離はＰ１・Ｐ２が約70㎝，Ｐ３が約80㎝，Ｐ４が約75㎝である。掘方との位置関係から，上屋構造の基本となる主柱穴は長方形の床面の対角線上に位置するＰ１・Ｐ３と北壁ラインのほぼ中央に対応する位置にあるＰ４の３基であると考えられる。Ｐ２は西壁上縁に沿ったＰ１－Ｐ３を結んだ線より若干外側にずれていること，Ｐ３寄りに位置すること，底面標高も他のものより若干高いことなどから，副次的な柱穴であった可能性が考えられる。なお，掘方と上部構造を支える３基の柱穴の位置関係から復元すると，Ｐ４の約220㎝東に１基，Ｐ４とその１基と掘方を挟んで対応する位置に２基の計６基の柱穴が必要となる。なお，床面には大幅な変更が無く，これらの柱穴は，ＳＨ３ａ・ＳＨ３ｂに共用されていたと考えられる。

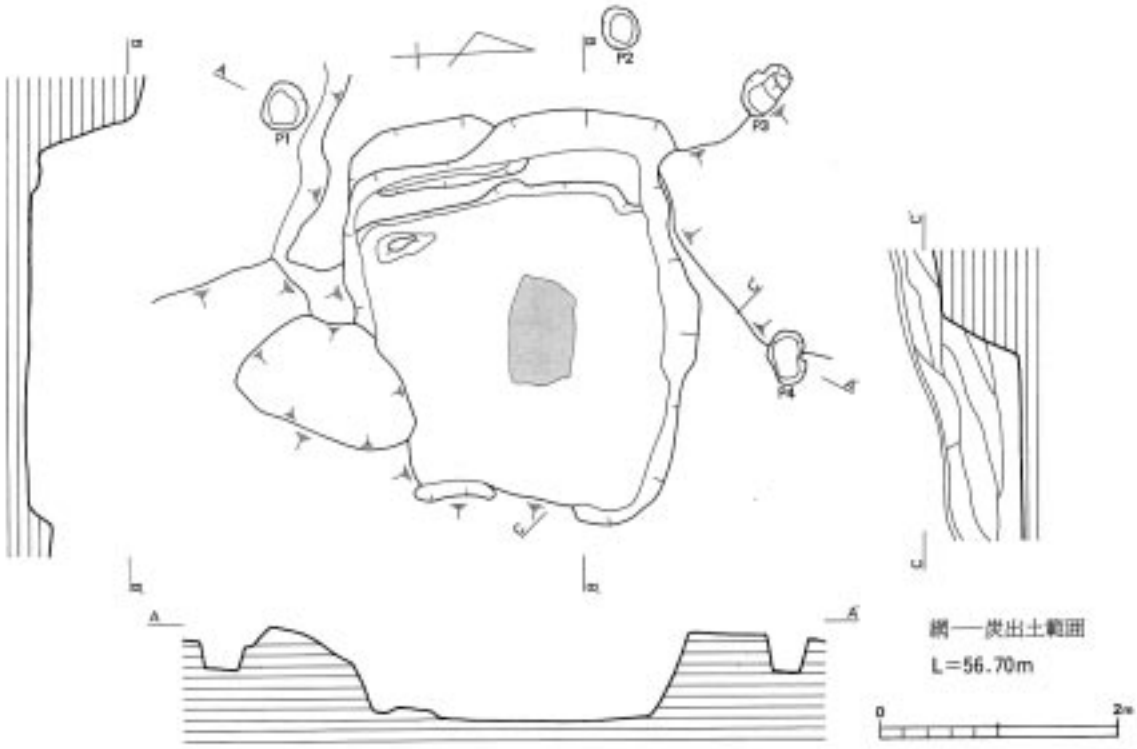
本住居跡の上屋構造も，ＳＨ２で想定した切妻屋根の可能性が考えられる。その場合Ｐ１の東隣の柱穴とＰ４のラインを棟木とする構造が想定できる。なお，本住居跡の床面積は約6.8㎡と広島市域で見られる住居跡の中でも最小級の面積であり，居住を行う場合の利便性は著しく低いものと考えられることから，住居としての使用に疑問が残る。小屋的な役割を果たしていた可能性も考えられよう。

なお，本住居跡の東側は平坦面になっている。この平坦面の最高所の標高が56.93ｍであることとＳＸ１の最北東部が57.05５ｍであることから，この平坦面がＳＸ１の延長である可能性も考えられる。ただ，Ｐ２の周辺とＳＸ１の間は，第２号古墳南側周溝の築造により削平されており，確認することはできなかった。

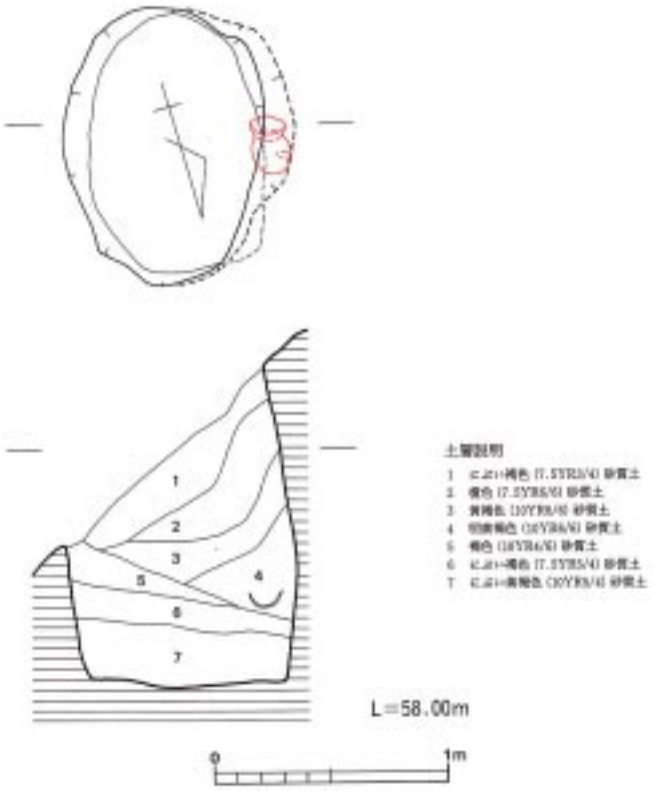
本遺構に伴う遺物は出土していないが，埋土中から弥生土器(61～63)が出土しており，本遺構の時期は，土器型式から上深川Ⅲ式古段階以降であると考えられる。

⑦　ＳＫ２（第31図・図版21b）

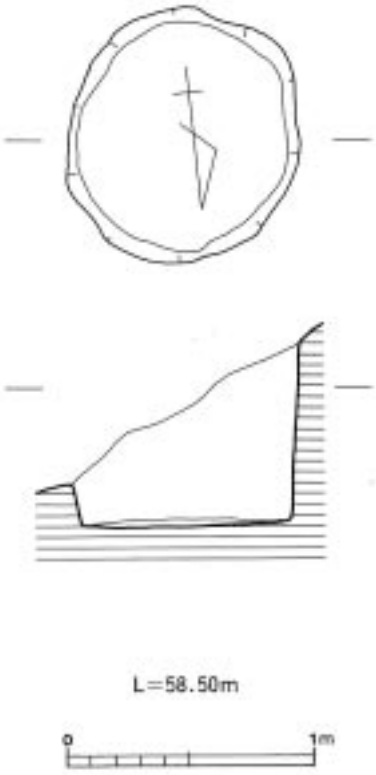
ＳＸ１の南端から約1.3ｍ，掘方の西側に隣接して位置する平面形状が長円形，断面形状が西側で袋状になる土坑である。底直の規模は南北に約110㎝，東西に約70㎝，深さは最大約130㎝で，底面



第30図　ＳＨ３実測図（Ｓ＝1:60）



第31図　ＳＫ２実測図（Ｓ＝1:30）



第32図　ＳＫ３実測図（Ｓ＝1:30）

標高は56.99ｍである。土坑の形状・規模からＳＫ２は貯蔵用と考えられ岳土坑内の土層は７層に分かれるが，上側の１～４層は山側から下側５～７層は谷側から土が流入して埋没していた口このことから，本土坑には当初，山側からの土の流入を防ぐ施設として，谷側に口の開いた上屋構造が設置されており，廃絶後，いずれかの時点で上屋構造が無くなったことで，土の流入方向が変化したと考えられる。

また，本土坑内からは使用可能な髪形土器(64)が５層の上面から出土している口土器はその形状から上深川Ⅲ式古段階に属すると考えられる。

なお，先述のとおり，本土坑の東側に接して，弥生土器が出土した小規模な平坦面を確認している。土器の出土状況など本土坑との関係が想定できるが，土層の観察ではこれを明らかにすることができなかった。ただし，土器型式では，時期差がほとんど無いものと考えられる。

⑧　ＳＫ３（第32図・図版21c）

ＳＸ１の南端から約5.9ｍ，掘方の西側約0.7ｍに位置する平面形状が長円形，断面形状が逆台形の土坑である。底面の規模は南北に約95㎝，東西に約85㎝，深さは最大約75㎝で，底面標高は57.91ｍである。土坑の形状・規模からＳＫ３は貯蔵用と考えられる。一

本遺構に伴う遺物は出土していない。

⑨　ＳＸ２（第33図・図版22b，23a）

ＳＸ２は64ｍ平坦面の北側，57ｍ平坦面へ向けて急峻に下る斜面中に位置する。北東側は第２号古墳周溝の築造に伴い削平されている。また北西側は急峻な斜面際の直前に位置しているため，流失した可能性がある。

本遺構は等高線に平行して，60～100㎝程度掘り込んで造られており，幅約12ｍ，奥行は残存部で1.5～4.1ｍである。本遺構は大きく２つの平坦面から構成されており，標高の高い順にＡ・Ｂと呼称する。

平坦面Ａは最大規模の平坦面で，現状で幅約10.5ｍ，奥行は東端では約1.2ｍであるが・中央付近で最大3.7ｍに拡がり，西面に向けて再び狭まり，西端では約0.5ｍになる。標高は最高所で57.71ｍ，最低所で57.22ｍである。

平坦面Ｂは，平坦面Ａ西半部北側に位置する。半円形をしており幅約6.4ｍ，奥行約0.6～1.9ｍで，標高は最高所で57.07ｍ，最低所で56.81ｍである。また，平坦面Ａ・Ｂ間の斜面中に細長い帯状の幅約4.8ｍ，奥行約0.2～0.85ｍの平坦面と，その北側約10～15㎝低い場所に位置する幅約2ｍ・奥行約0.1～0.5ｍの平坦面を確認した。ただ，位置や形状からは，これらの平坦面の機能は想定できなかった。時期については埋土中から後述する土器(65～78)が出土しており，その土器の時期よりは先行するが，埋土もそれほど厚くないため，それほど時期差は無いものと考えられる。

遺物は本遺構西端，平坦面Ｂへの傾斜面上で石錐(97)が出土した。

ＳＸ２の埋土中には，炭化物を大量に含んだ黒褐色の土層の広がりを確認した。位置はＳＸ２南半部のほぼ中央で，平面形状は第２号古墳に向けて広がる半円形で幅約340㎝奥行約100㎝，ＳＸ２平坦面からの高さ約10～30㎝である。また，この黒褐色土層の東側から多数の土器(65～78)の破片が出土した。いずれも床面から約12～45㎝の高さに位置しており，ＳＸ２固有のものとは考えられない。

第33図　ＳＸ２実測図（Ｓ＝1:60）

しかし，遺存状況が比較的良好なものが多いこと，第３号古墳付近から接合する土器片は一切出土していないことから，第３号古墳周辺から転落してきたものとも考えにくい。

以上を併せて考えるならば，この黒褐色土層は，廃絶後やや埋まったＳＸ２をそのまま，もしくは僅かに掘りなおし，火を用いた行為を行った痕跡であり，土器はこの行為に伴う可能性が高い。

土器の型式は，上深川Ⅲ式古段階であり，いずれも古墳時代初頭のものである。またこの黒褐色土は，第２号古墳の区画溝の北半部に流れ込んでおり，その堆積は溝が僅かに埋まった直上から始まっている。このことから，この黒褐色土層は第２号古墳と同時期のものと考えられ，第２号古墳に伴う祭祀が行われた可能性が考えられる。

⑩　ＳＫ４（第34図・図版24a，b）

ＳＫ４はＳＸ２の平坦面Ａのほぼ中央，第２号古墳の築造に伴う削平部にかかる位置に存在する平面形状は楕円形，断面形状は逆台形の土坑である。位置・状況から当初はＳＸ２の平坦面内に築造されたものと推定される。底面の規模は南北に約７８㎝，東西に約８７㎝，深さは最大約７２㎝で，底面標高は56.62ｍである。土坑の形状・規模からＳＫ４は貯蔵用であると考えられる。

また，底面より22～30㎝上で，南北約60㎝，東西約70㎝，厚さ約30㎝にわたる貝層を，土坑の壁面から内側に約10～15㎝間隔を開けた状態で確認した。その位置と，貝層を構成する貝のうち二枚貝は大半が開いたり，対になる貝殻が無くなったりしており，食用に供された後のものと考えられることから，本遺構が貯蔵穴としての用途を終えた後，投棄されたと考えられ観貝種はカキ・アサリ・カガミガイ・ハマグリが主で，その他にコウロギガイ・タマビキガイ・サルボウガイが若干出土した。コウロギガイ・タマビキガイは食用ではないため，採集時に混入したものであろう。これらの貝は内湾や磯に棲息する貝である。

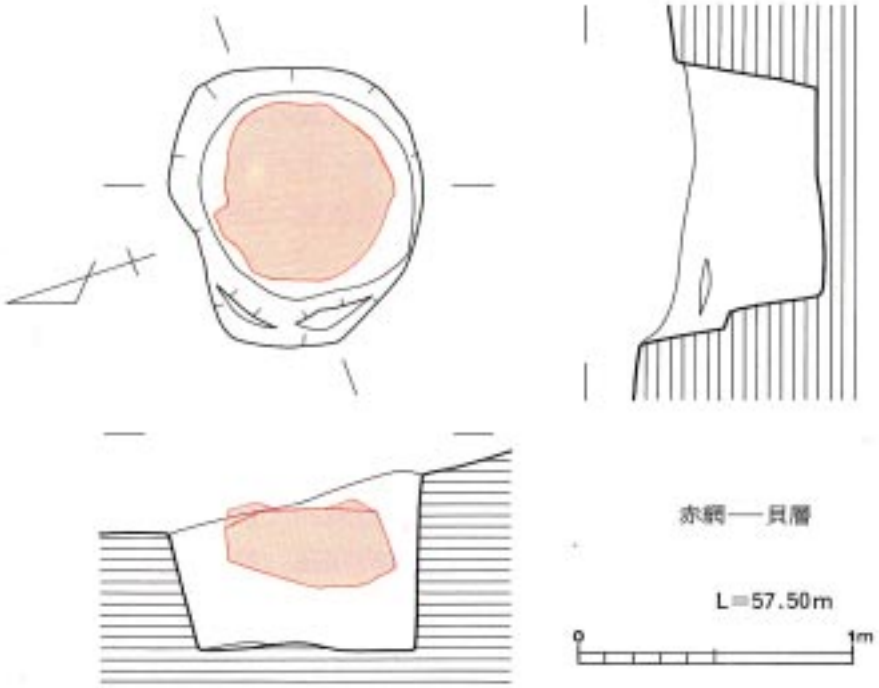
なお本遺構に伴う遺物は出土していないが，埋土中から弥生土器(79)が出土している。本遺構の時期は土器型式から，上深川Ⅲ式古段階以降であると考えられる。

⑪　ＳＫ５（第35図・図版24c）

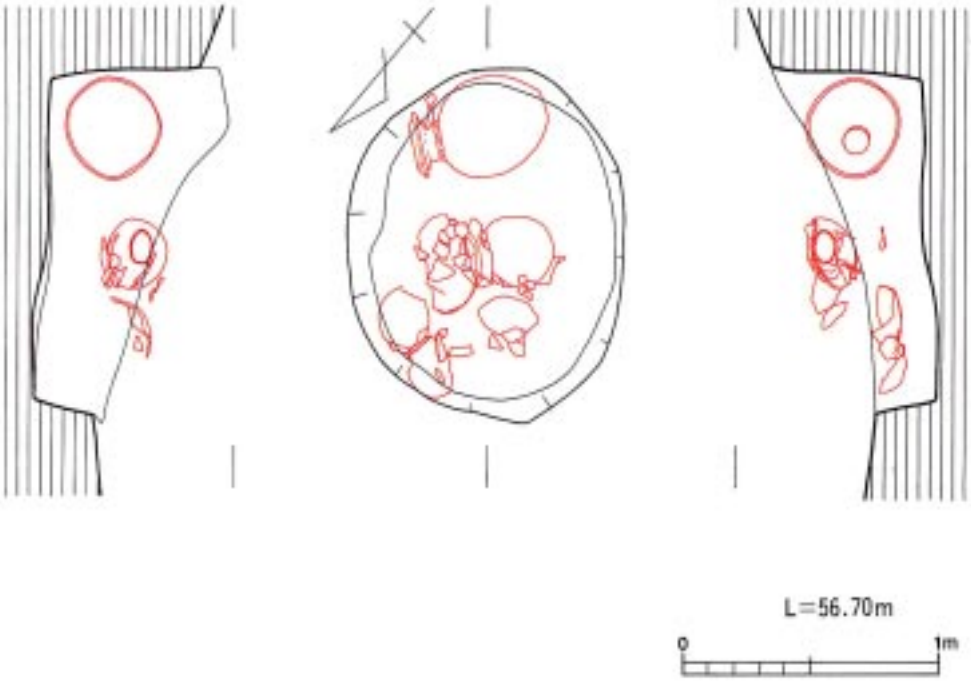
ＳＫ５はＳＫ４の北東約４ｍの位置にある平面形状は長円形，断面形状は逆台形の土坑である。底面の規模は北西－南東方向に約115㎝，北東－南西方向に約95㎝，深さは最大約70㎝，最小約20㎝で，底面標高は55.92ｍである。土坑の規模・形状から，貯蔵穴と考えられる。土坑内からは，弥生土器(80～85)が出土した。このうち，甕形土器(80)，壷形土器(83・84)は，ほぼ完形に近い。土器の出土レベルは底面から約８㎝上部と約20㎝上部との２段階に分かれる。土器の型式は，布留０式の土師器であり，第２号古墳とほぼ同時期の遺構となるため，第２号古墳の築造に伴う祭祀が行われた可能性が考えられる。その場合，土器の出土レベルが２段階に分かれているのも，祭祀を２段階で行ったためと想定できる。

⑫　ＳＸ３（第36図・図版23b）

ＳＸ３は調査区北東半の緩斜面中，57ｍ平坦面の北側，ＳＨ３の北西約10ｍの地点に位置する。壁面はコの字状に遺存しており，北側は完全に流失していると考えられる。平坦面規模は東西方向に約450㎝，南北方向は現状で150～230㎝，最高所の標高は55.45ｍである。壁高は最大112.2㎝である。



第34図　ＳＫ４実測図（Ｓ＝1:30）



第35図　ＳＫ５実測図（Ｓ＝1:30）

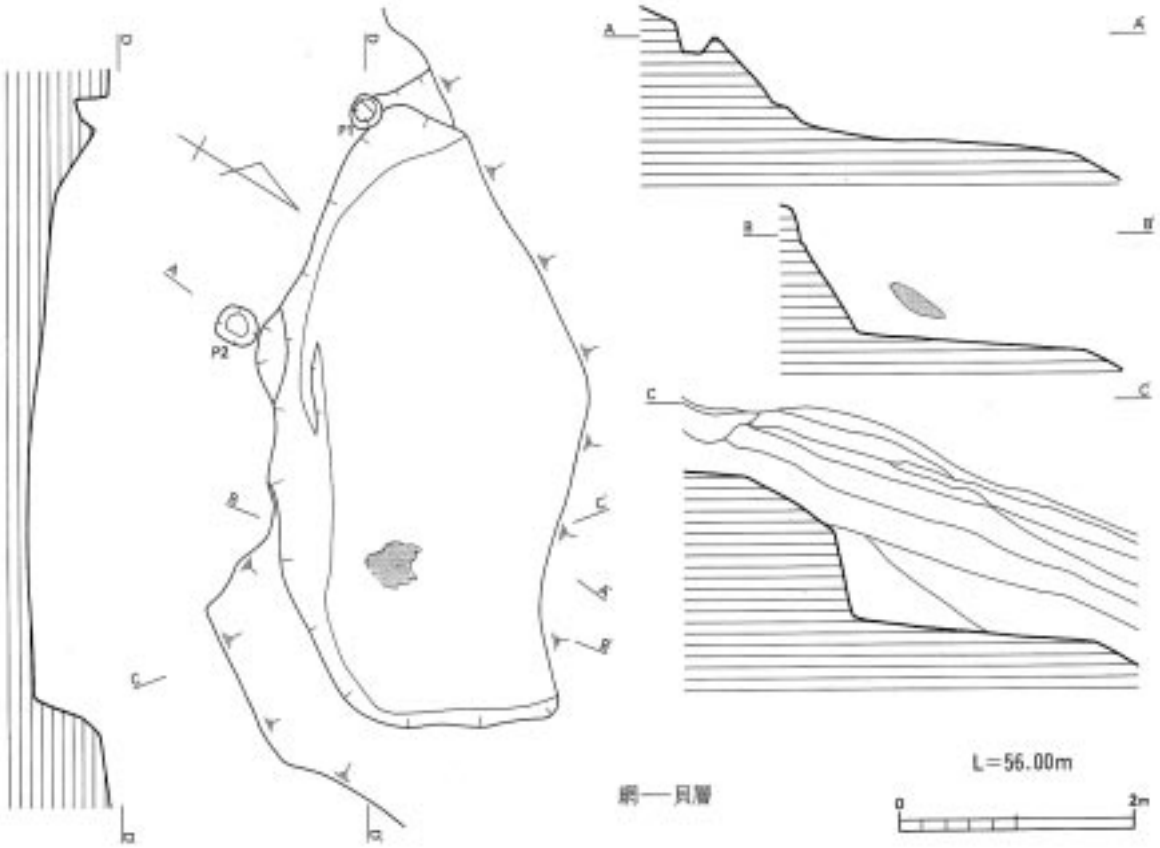
また壁面の外側に残存部の深さが約25㎝のＰ１・Ｐ２を確認した。底面の規模はＰ１が直径約17㎝，Ｐ２が直径約18㎝の円形である。底面標高はＰ１が55.87ｍ，Ｐ２が55.65ｍで，柱間距離は約205㎝である。柱穴があることから，本遺構がテラス状遺構では無く，住居跡であるという可能性も考えられるが，現状では上屋構造の想定が困難なため，テラス状遺構と判断した。

なお，東寄の平坦面上約30㎝で，貝層が出土した。貝層は約40×45㎝の範囲で5～15㎝の厚みを持つ。また，貝層を構成する貝のうち二枚貝は大半が開いたり，対になる貝殻が無くなったりしており，食用に供された後のものであろう。これらのことから，本貝層は本住居跡が遺棄された後に廃棄されたものと考えられる。貝はカキ・アサリが主で，ウミニナ・レイシガイを１点ずつ確認した。ウミニナやレイシガイは食用貝の採集の際に混入したものであろう。いずれも内湾に棲息する貝である。

本遺構に伴う遺物は出土していないが，埋土中から弥生土器(86・87)・鉄斧(99)が出土している。本遺構の時期は土器型式から上深川Ⅲ式古段階以降のものであると考えられる。

(3) 出土遺物

集落跡の出土遺物としては，多数の土器の他，石器（砥石・石錘・磨石），鉄器（鉄鏃・鉄斧）が出土した。以下，各遺物について述べたい。なお，個々の土器の詳細については，後掲する土器観



第36図　ＳＸ３実測図（Ｓ＝1:60）

察表を参照されたい。

①　土器（第 37 ～ 42 図・図版 25 ～ 30）

当遺跡内で出土した土器の内，出土状態及び形状から古墳に伴うと断定しがたいものについて，ここで一括して取り扱うこととする。そのため，時期的にみて古墳に伴うものも含まれている。従来から，広島湾周辺の弥生時代後期の土器については，口縁部の形態等の特徴から上深Ⅰ式，Ⅱ式，Ⅲ式という分類が行われているが4)，本遺跡の出土遺物を見れば，Ⅲ式がその大半を占め，次いでⅡ式，Ⅰ式については１点(87)のみの出土である。最も数の多いⅢ式について概観すれば，①胴部最大径を中位に持ち，口縁部屈曲点辺りから底部に至るまで均一に薄く仕上げられているものと，②胴部最大径が中位より僅かに高く底部周辺が肥厚するものの２種類がある。後者の中には，頸部の文様体や底部に平底を一部残すなどⅡ式に見られる古い要素を残すものが多く有り，その相違は時期の差に起因するものと考えられる。すなわち従来Ⅲ式古段階，新段階と呼称しているのがほぼこれに該当するものである。次に出土数の多いⅡ式について概観すれば，Ⅱ式の中でも口縁部の中位から強く外湾するタイプが大多数を占めており，これらがⅢ式と共伴することが多く，丸胴化や無文化の傾向も強くあらわれるなど，Ⅱ式でも最も新しい要素を多く含む，Ⅱ式終末の時期の土器と考えられる 5)。

また，遺構内から出土した遺物について見てみれば，Ⅱ式終末のものについてはＳＸ１・ＳＨ２遺構面から出土した遺物にほぼ限られ，Ⅲ式新段階のものについても，出土がＳＫ５に限られている。Ⅲ式古段階のものについては調査区全域から最も数多く出土しているが，一括資料としてはＳＨ１出土のものやＳＸ２土器だまり出土の土器が注意される。

次に，当遺跡出土の土器の時期比定についてであるが，それについては従来から上深川Ⅱ式終末を庄内式，鍵尾Ⅱ式に併行する弥生時代終末の時期に，上深川Ⅲ式古段階を庄内式新層ないしは布留０式，大木式に併行する古墳時代初頭の時期に，上深川Ⅲ式新段階を布留１式，小谷式に併行する古墳時代前期前葉に比定する考え方が提示されてきた6)。今回の調査では，上深川Ⅲ式古段階に属するＳＸ２土器だまり及び新段階に属するＳＫ５の出土土器の中に非在地系の土器が含まれており，従来の時期比定の妥当性について検討を行うこととする。まず，ＳＸ２土器だまり出土の(65・66)については吉備系の甕形土器と考えられるが，時期は古墳時代初頭に比定されていることから7)，従来の時期比定の妥当性を傍証するものと考えられる。また，同じくＳＸ２土器だまり出土の(71)については山陰系の壷形土器と考えるが口縁端部の平坦面の形成が不十分であることから大木式に属すと考えられ8)，これも従来の時期比定を追認するものと考えられる。次に，ＳＫ５出土の(85)であるが，山陰系の甕形土器と考えられ，口縁端部に平坦面が形成され胴部も丸胴化が顕著であるなど，小谷式の特徴を示すものと考えられる9)。前述したようにＳＫ５出土の在地系土器のほとんどが上深川Ⅲ式新段階に属すると考えられることから，これらの土器の共伴関係も従来の時期比定を傍証するものと考えることができよう。

また，ＳＸ２土器だまり出土の(76)については，城ノ下第６号古墳出土のものと酷似しており，同様に第６号古墳出土の複合口縁壷と同様な(6)も第２号古墳埋土中から出土しており，当土器だまりの土器が時期的にも性格的にも第２号古墳と極めて深い関係にあることを伺わせる。

以上のように，出土土器のかなりのものが古墳時代に属しており，これらを伴出する古墳以外の遺構と古墳との関係についても慎重な取り扱いが必要であろう。

② 石器（第42，43図・図版30）

・砥石

ＳＨ１から(89～92)が，ＳＨ２から(93～95)が出土している。

(89)は全長227㎜・幅152㎜・厚さ62㎜の四角柱状の石の１面を利用している。使用面は，ほとんど磨耗していない。

(90)は全長196㎜・幅48㎜・厚さ33㎜の四角柱状の石の５面を利用している。主要面は，磨耗しており，部分的に線状痕が見られる。中央部で折れている。

(91)は全長167㎜・幅74㎜・厚さ30㎜の偏平な石の１面を利用している。使用面は，ほとんど磨耗していない。

(92)は全長131㎜・幅71㎜・厚さ67㎜の偏平な石の１面を利用している。使用面は，ほとんど磨耗していない。

(93)は全長222㎜・幅79㎜・厚さ63㎜の四角柱状の石の２面を利用している。使用面は，磨耗しており，２面ともに部分的に線状痕が見られる。

(94)は全長93㎜・幅52㎜・厚さ24㎜の偏平な四角柱状の石の２面を利用している。２面ともに，ほとんど磨耗していないが，主要面に２条の溝状の擦痕が見られ，そのうち三条は反対面に至っている。

(95)は全長98㎜・幅40.5㎜・厚さ38㎜の八角柱状の石の８面を利用している。主要面は，著しく磨耗しており，すべての面で部分的に線状痕が見られる。

・磨石

ＳＨ２から(96)が出土している。全長126㎜・最大幅74㎜・最大厚69㎜で，長卵形を呈している。幅広の側に使用痕跡が見られる。

・石錘

ＳＸ２から(97)が出土している。全長115㎜・最大幅63㎜・最大厚39㎜・重量398ｇで，偏平な長円盤状を呈している。長円形の長径にあたる両端を打ち欠いて，綱の固定面としている。

③ 鉄器（第43図・図版30）

・鉄鏃

ＳＨ１の埋土中から(98)が出土している。茎部が一部を残して欠損しており，残存長116㎜・最大幅38㎜・刃部厚3㎜・重量39.9ｇである。形状は凸基有茎式で，刃部は柳葉状になる。刃部と茎部の間に明確な関は存在しない。刃部の断面形状は薄いレンズ状，茎部の断面形は長方形を呈している。

・鉄斧

ＳＸ３の埋土中から(99)が出土している。全長74㎜・刃部幅44㎜・基部幅40㎜・厚さ4.5㎜・重量74.9ｇの板状鉄斧である。平面形状は基部幅より，刃部幅が大きくなり，ばち形に開く。基部の断面形は長方形である。刃部は片刃式である。

注

1．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『歳ノ神遺跡群　中出勝負峠墳墓群』1986 年

2．村上恭通「弥生時代における鉄器文化の特質－東アジア諸地域との比較を通して－」『九州考古学会・嶺南考古学会第 1 回合同考古学会：資料編：』九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学会実行委員会　1994 年

3．宮本長二郎「竪穴住居の復元」『考古学による日本歴史　15　家族と住まい』雄山閣　1996 年

4．広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡発掘調査報告』1988 年

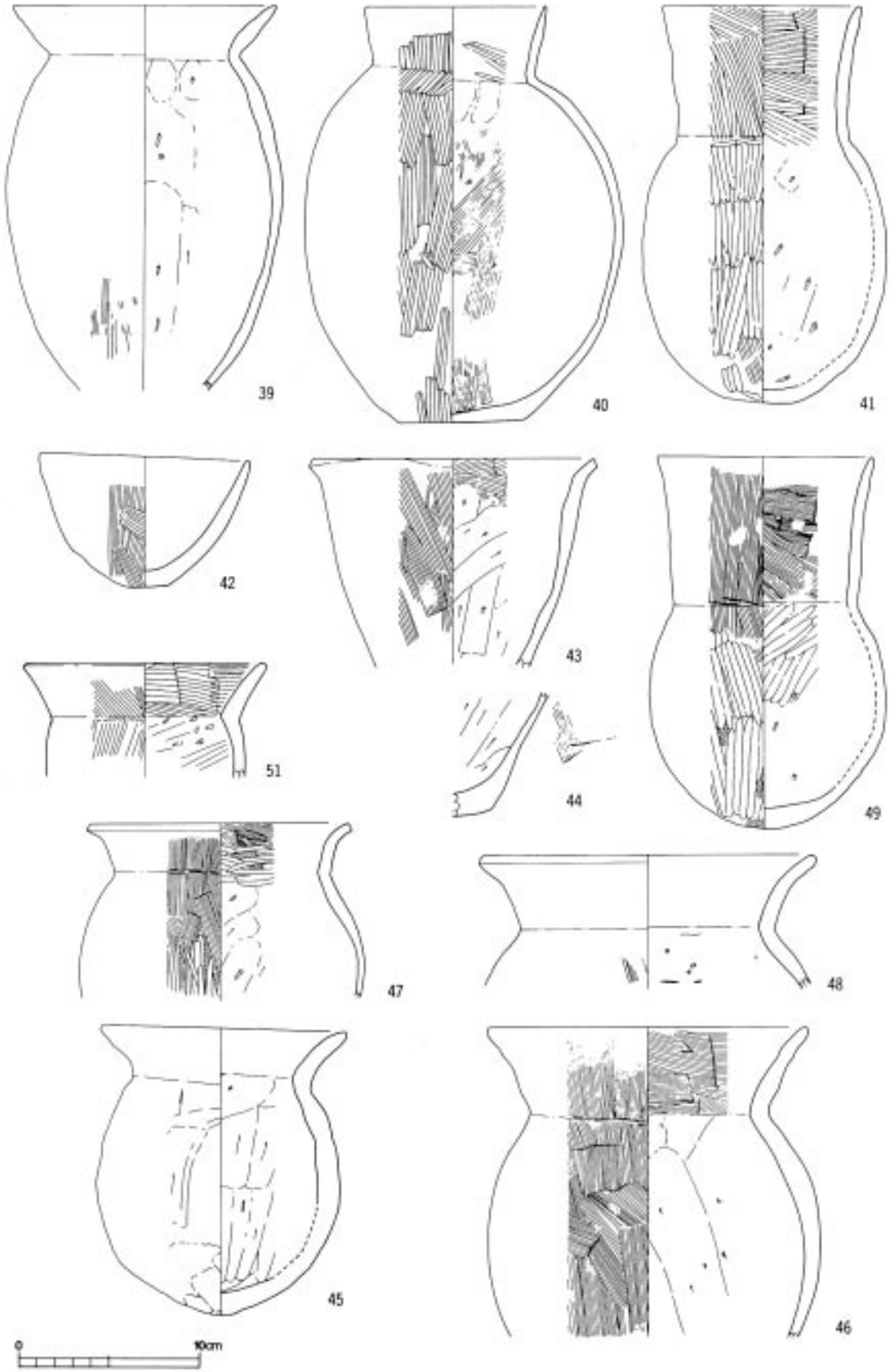
5．財団法人広島市歴史科学教育事業団『牛田早稲田遺跡発掘調査報告』1994 年

6．４に同じ

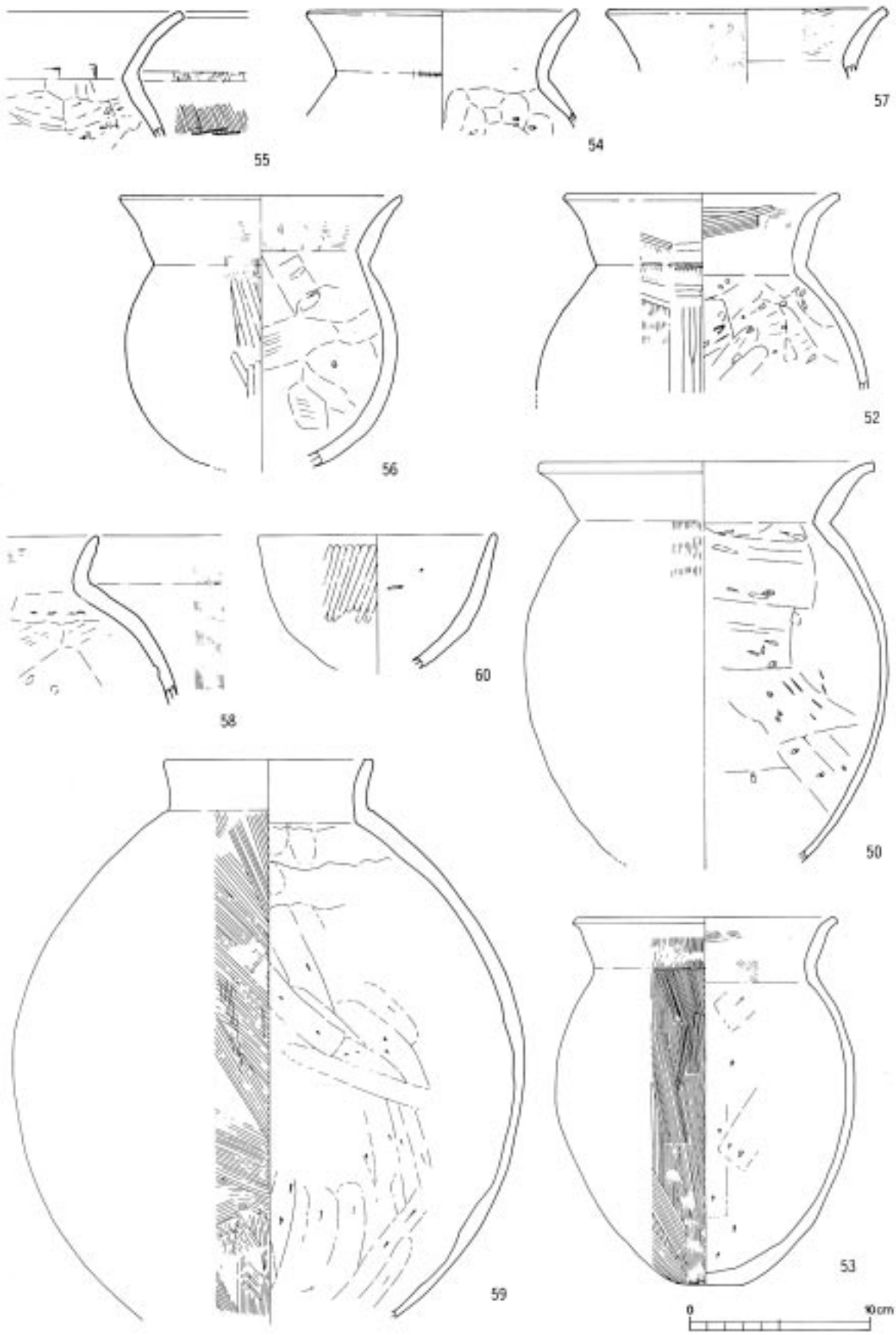
7．高橋　護「土師器の編年　中国・四国」『古墳時代の研究　6　土師器と須恵器』雄山閣　1991 年

8．鹿島町教育委員会『講武地区県営ほ場整備事業発掘調査報告書　5　南講武草田遺跡』1992 年

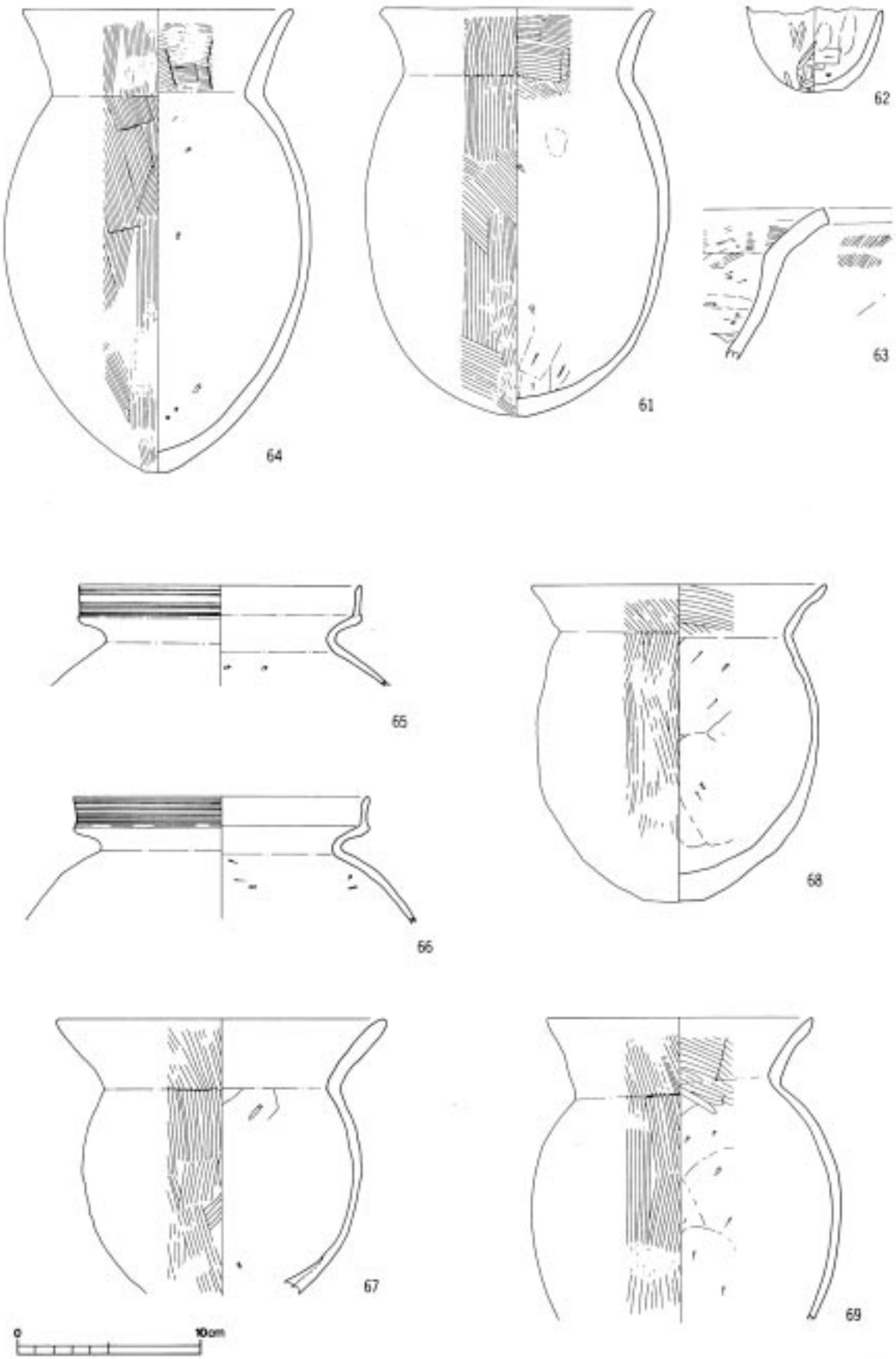
9．８に同じ



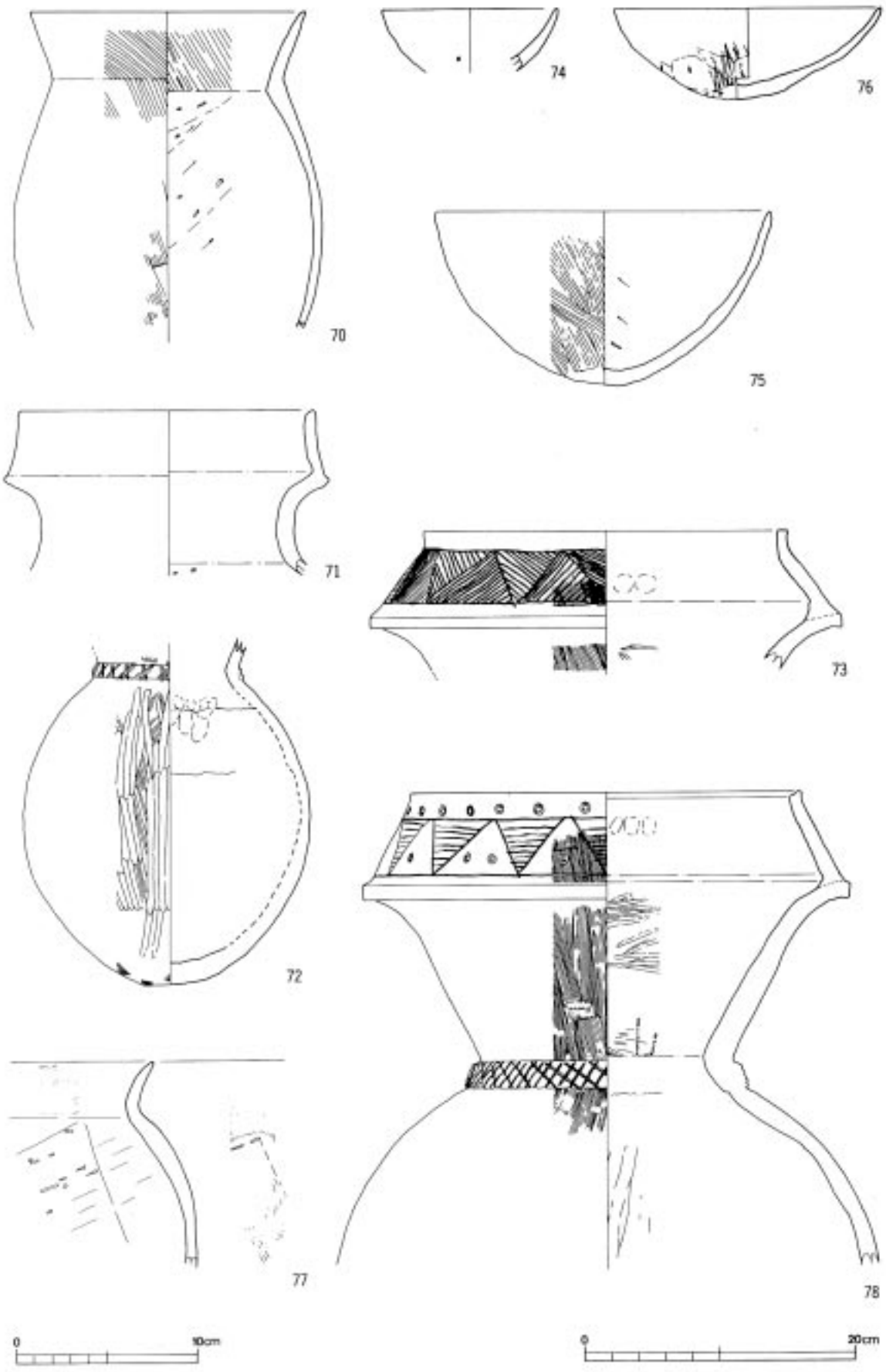
第37図　その他の遺構出土遺物実測図［1］（S＝1:3）



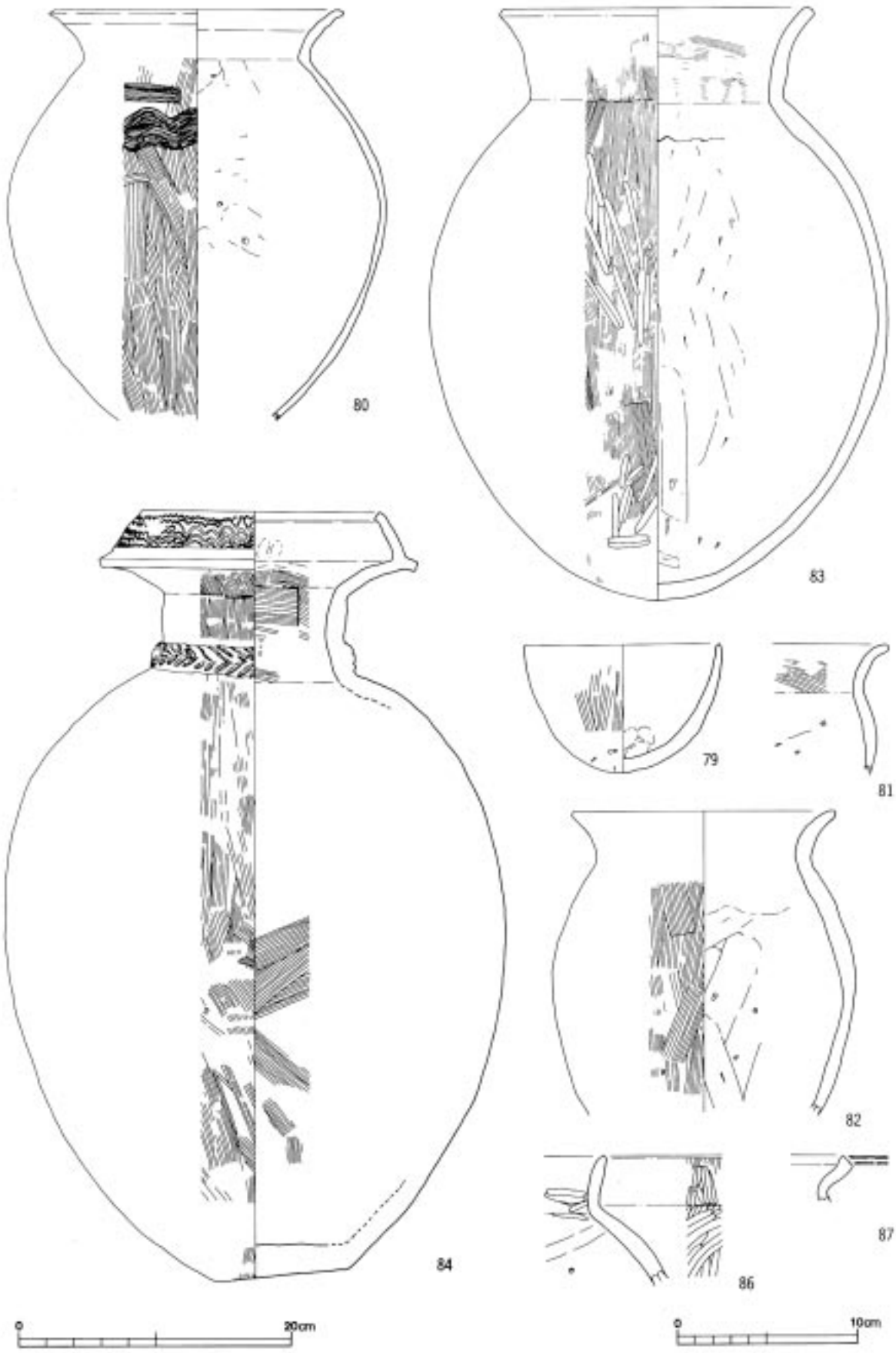
第38図　その他の遺構出土遺物実測図［２］（Ｓ＝1:3）



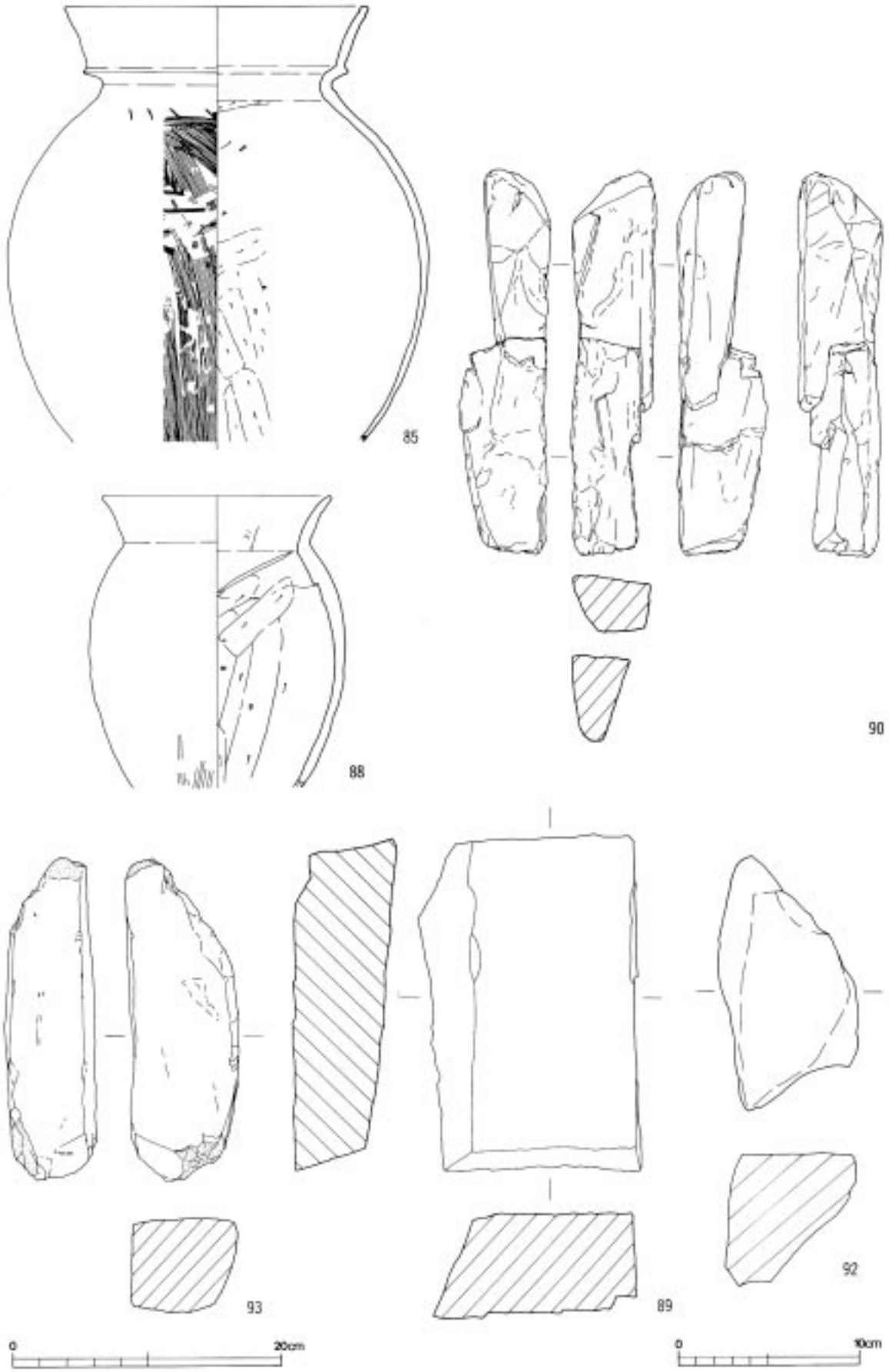
第39図　その他の遺構出土遺物実測図［３］（S＝1:3）



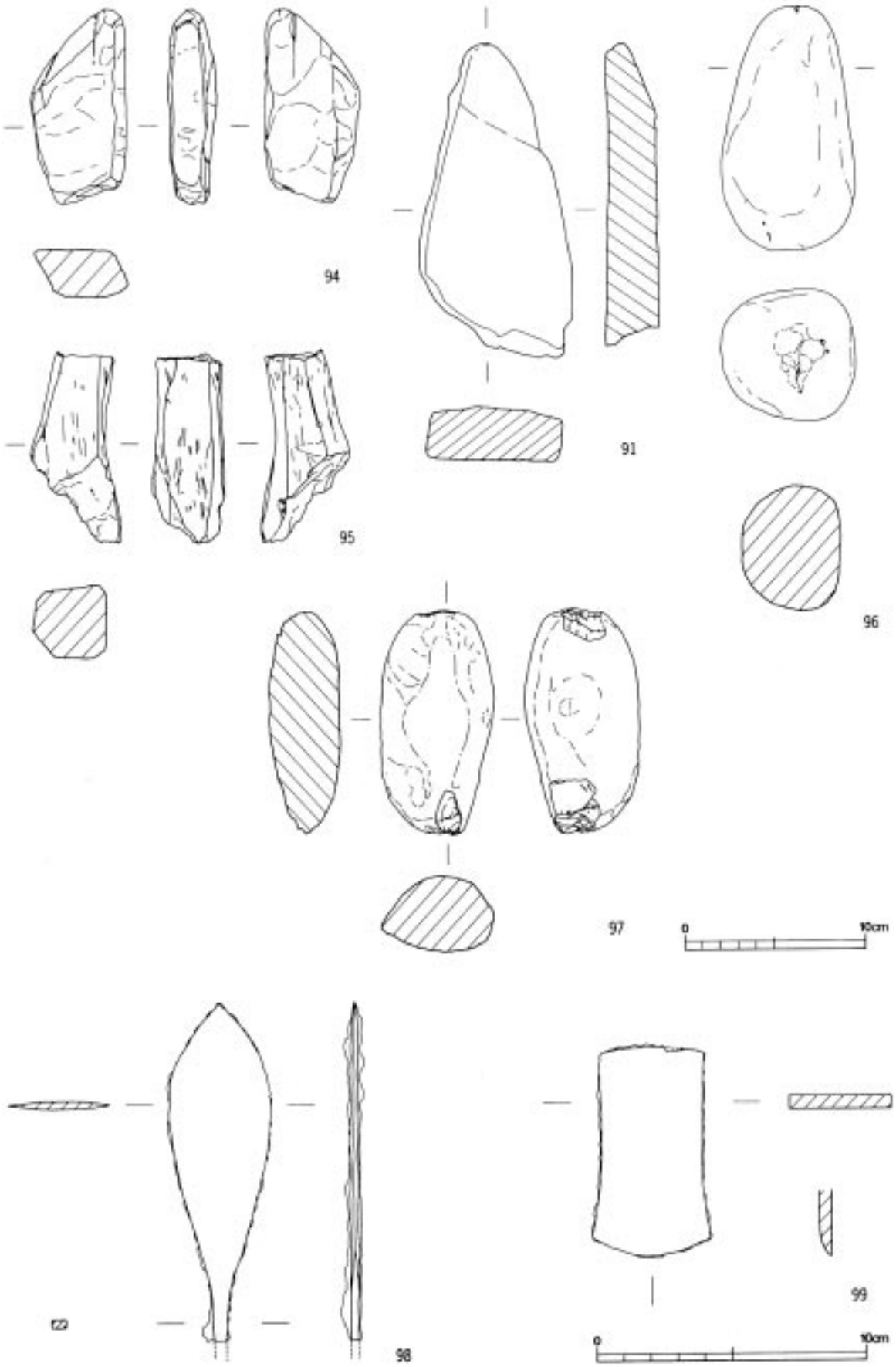
第 40 図　その他の遺構出土遺物実測図［４］（S ＝ 1:3，73・78 は S ＝ 1:4）



第41図　その他の遺構出土遺物実測図［5］（S＝1:3，84はS＝1:4）



第 42 図　その他の遺構出土遺物実測図［６］（S ＝ 1:3，85・89・93 は S ＝ 1:4）



第 43 図　その他の遺構出土遺物実測図［７］（S ＝ 1:3，98・99 は S ＝ 1:2）

第３表　その他の遺構出土土器観察表

（[　]は復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器　　形	調整・成形	備　　考
39	甕形土器	ＳＨ１	口径　14.6 胴部部最大径 ［15.4］	口縁部は外反し，頸部直上で肥厚し，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁端部ヨコナデ。胴部下部ハケ目。調整ののち化粧土を内面口縁部まで塗布。 内面：　頸部直下ヘラ削りのちナデ，指頭圧痕。以下ヘラ削り。	色調：　外面　茶褐色 内面　明褐色 胎土：　1mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好 スス付着。
40	壷形土器	ＳＨ１	器高　21.4 口径　10.1 胴部部最大径 ［17.9］	口縁部は「く」の字状に外反しつつ上方にのび，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ヘラ磨き。底部ハケ目。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部一部ヘラ磨き。頸部直下ヘラ削りのちナデ。指頭圧痕残る。以下ヘラ削りのちハケ目。	色調：　外面　明褐色 内面　褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
41	壷形土器	ＳＨ１	器高　20.3 口径　11.0 胴部部最大径 13.8	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し，端部はやや尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面：　口縁部ハケ目。頸部からはハケ目のちヘラ磨き。 内面：　口縁部ハケ目。頸部ナデ。以下ヘラ削り。	色調：　茶褐色 胎土：　2mm大の砂粒含む 焼成：　良好
42	椀形土器	ＳＨ１	器高　6.7 口径　11.6	口縁部は外方に延び，端部はやや尖り気味におさめる。底部は平底。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ナデ。	色調：　茶褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
43	鉢形土器	ＳＨ１埋土	口径　［15.8］	胴部は「く」の字状に内反し，口縁部は「く」の字状に外反する。端部は平たくおさめている。	外面：　口縁部ナデ。以下ハケ目。 内面：　口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調：　明橙色 胎土：　1mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好 44と同一個体の可能性あり。
44	鉢形土器？	ＳＨ１埋土		底部は平底。	外面：　ナデ。一部ハケ目。 内面：　ヘラ削り。	色調：　明橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好 43と同一個体の可能性あり。
45	甕形土器	ＳＸ１	器高　14.7 口径　13.6 胴部最大径 13.7	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめる。胴部は球形を呈する。底部はわずかに平底。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削りのちナデ。底部ヘラ削り。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　明橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
46	甕形土器	ＳＸ１	口径　17.9 胴部最大径 ［18.7］	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁上部ハケ目のちヨコナデ。口縁下部以下ハケ目。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。口縁上部に尖状工具による記号状の線刻あり。	色調：　茶褐色～黒褐色 胎土：　2～3mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
47	甕形土器	ＳＸ１	口径　14.4 胴部最大径 ［15.8］	口縁部は「く」の字状に外反し，端部にかけて外湾し，端部は平らにおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部以下ハケ目。胴部ハケ目のちヘラ磨き。 内面：　口縁上部ハケ目。頸部直下までハケ目のちヘラ磨き。以下ヘラ削り。	色調：　橙色～黄褐色 胎土：　1mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
48	甕形土器	ＳＸ１	口径　［18.4］	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平らにおさめる。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ハケ目のちヨコナデ。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ	色調：　橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒多 焼成：　良好
49	壷形土器	ＳＸ１	器高　19.1 口径　12.0 胴部部最大径 13.3	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し，端部はやや尖り気味におさめる。胴部は球形を呈する。底部は丸底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハ 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部	色調：　明橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒含 焼成：　良好
50	甕形土器	ＳＸ１埋土	口径　［18.6］ 胴部最大径 ［20.4］	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平たくおさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハ 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部 り。	色調：　茶褐色 胎土：　1～5mm大の砂粒多 焼成：　やや軟調 スス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器　　形	調整・成形	備　　考
51	甕形土器	ＳＸ１埋土	口径　　[13.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面：　口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調：　淡茶褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
52	甕形土器	ＳＨ２	口径　　[15.5]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目のちヘラ磨き。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちヘラ磨き。以下ヘラ削り。	色調：　茶褐色 胎土：　1～9mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調
53	甕形土器	ＳＨ２	器高　　19.5 口径　　14.4 胴部最大径 16.7 底径　　3.5	口縁部は外反し，頸部直上で肥厚し，端部にかけで外反し端部は平らにおさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部以下ハケ目。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調：　黄褐色 胎土：　1～3mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
54	甕形土器	ＳＨ２	口径　　[15.3]	口縁部は外湾し，端部は丸くおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目のちナデ。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調：　茶灰色 胎土：　1～3mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調
55	甕形土器	ＳＨ２		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たくおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ハケ目。 内面：　口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調：　橙褐色 胎土：　1～4mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好 スス付着。
56	甕形土器	ＳＨ２	口径　　[15.8] 胴部最大径 15.2	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味におさめる。胴部は球形を呈する。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。胴部ハケ目のちヘラ磨き。 内面：　口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調：　茶褐色 胎土：　1～5mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調 スス付着。
57	甕形土器	ＳＨ２	口径　　[15.8]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平らにおさめる。胴部は球形	外面：　口縁端部ヨコナデ。ハケ目のちナデ。 内面：　ハケ目のちナデ。	色調：　黒褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多 焼成：　やや軟調
58	壷形土器	ＳＨ２		口縁部は外反し，端部は尖り気味におさめる。	外面：　胴部ハケ目のちナデ。 内面：　口縁部ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調：　外面　黄褐色 内面　茶褐色 胎土：　1～5mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調 スス付着。
59	壷形土器	ＳＨ２	口径　　[11.5] 胴部最大径 [28.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たにおさめる。胴部は球形に近い。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面：　口縁部ナデ。口縁部直下ナデ，指頭圧痕。以下ヘラ削り。	色調：　淡橙色 胎土：　1mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
60	椀形土器	ＳＨ２	口径　　[13.3]	胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾しつつ外方に延び，端部は丸くおさめる。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ磨き。底部にかけてナデ。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削りのち一部ナデ。	色調：　橙色 胎土：　1mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
61	甕形土器	ＳＨ３埋土	器高　　21.1 口径　　15.0 胴部最大径 17.0	口縁部は外反し，端部はやや尖り気味におさめる。胴部は長胴形を呈する。底部は丸底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部以下ハケ目。底部一部ナデ。 内面：　口縁端部ヨコナデ。以下頸	色調：　淡黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒若 焼成：　良好 スス付着。
62	椀形土器	ＳＨ３埋土	器高　　4.4 口径　　7.5 底径　　2.3	口縁部は外方に延び，端部は尖り気味におさめる。底部は平底。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ 内面：　ヘラ削りのちナデ。体部に	色調：　外面　明黄褐色 内面　橙色 胎土：　0.5～1mm大の砂粒 焼成：　良好
63	不明	ＳＨ３埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たくおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハ 内面：　頸部までハケ目のちヨコナ	色調：　黄褐色～淡橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒含む 焼成：　良好
64	甕形土器	ＳＫ２	器高　　24.1 口径　　14.8 胴部際大径 16.8	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁上	色調：　外面　茶褐色 内面　暗黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調 スス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器　　形	調整・成形	備　　考
65	甕形土器	ＳＸ２	口径　　[15.6]	外反する口縁に，垂直な立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は尖り気味におさめる。口縁部外面に7条の沈線を施す。	外面：　ヨコナデ。 内面：　口縁部周辺ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　黄褐色 胎土：　1mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
66	甕形土器	ＳＸ２	口径　　[16.2]	外反する口縁に，ほぼ垂直な立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は，やや外傾し尖り気味におさめる。口縁部外面に9条の沈線を施す。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ナデ。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　黄褐色 胎土：　密 焼成：　良好
67	甕形土器	ＳＸ２	口径　　[17.9] 胴部最大径 [15.4]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味におさめる。胴部は急な弧を描く。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　暗黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好 スス付着。
68	甕形土器	ＳＸ２	器高　　16.5 口径　　16.2 胴部最大径 15.7	口縁部は「く」の字状に外反し端部にかけて外湾し，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。胴部下部ヘラ削り。底部ナデ。 内面：　口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調：　明褐色～明橙色 胎土：　0.5～1mm大の砂粒含む 焼成：　やや軟調
69	甕形土器	ＳＸ２	口径　　13.6 胴部最大径 [17.3]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部にかけて若干外反し，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁端部ハケ目のちヨコナデ。口縁部以下ハケ目。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。頚部ヘラ削りのちヘラ磨き。以下ヘラ削り。	色調：　明橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好 スス付着。
70	甕形土器	ＳＸ２	口径　　[15.2] 胴部最大径 [17.2]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハケ目。胴部ハケ目のち一部ナデ。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調：　明褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒若く含む 焼成：　良好
71	壺形土器	ＳＸ２	口径　　16.2	外湾する口縁に，内傾し，緩やかに外反する立ち上がり部に接合する複合口縁。端部は丸くおさめる。	外面：　ヨコナデ。 内面：　口縁部周辺ヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　淡黄褐色 胎土：　密 焼成：　やや軟調
72	壺形土器	ＳＸ２	胴部最大径 16.0	口縁部は「く」の字状に外反する。頚部は×状の刻みを入れた貼付突帯をめぐらす。胴部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面：　口縁下部ハケ目。胴部ハケ目のちヘラ磨き。底部ナデ，一部ハケ目。 内面：　ナデ。頚部直下に指頭圧痕。	色調：　黄褐色～明橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
73	壺形土器	ＳＸ２	口径　　[27.2]	外反する口縁に，内傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。口縁端部に向けて外湾し，端部は平らにおさめる。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁上部ハケ目のち刺突状工具による幾何学紋様をめぐらす。口縁下部ハケ目。 内面：　口縁部ヨコナデ，外面調整時の指頭圧痕残る。口縁下部，一部ヘラ磨き。	色調：　橙色 胎土：　1～3mm大の砂粒含む 焼成：　良好
74	椀形土器	ＳＸ２	口径　　[9.8]	口縁部は外方に延び，端部は尖り気味におさめる。底部は丸底。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ削りのちナデ。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ナデ。	色調：　暗黄褐色 胎土：　1mm大の砂粒若干含 焼成：　良好
75	椀形土器	ＳＸ２	器高　　9.0 口径　　18.8	口縁部は外方に延び，端部は尖り気味におさめる。底部は丸底。内面底部はややへこむ。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ナデ。	色調：　淡黄褐色 胎土：　0.5～2mm大の砂粒 焼成：　良好
76	椀形土器	ＳＸ２	器高　　4.7 口径　　15.0	口縁部は外湾し，端部は尖り気味におさめる。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ 内面：　ナデ。	色調：　黄褐色 胎土：　密 焼成：　良好
77	不明	ＳＸ２			外面：　口縁端部ヨコナデ。以下ハ 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部	色調：　黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器　　形	調整・成形	備　　考
78	壺形土器	ＳＸ２埋土	口径　　[28.8]	「く」の字状に外反する口縁に，内傾する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は平らにおさめる。頚部に刺突状工具による刻目格子を入れた貼付突帯をめぐらす。	外面：　口縁部ハケ目のち刺突状工具による幾何学紋様をめぐらし，竹管紋を施す。頚部ハケ目。以下ハケ目。 内面：　口縁部ナデ。外面調整時の指頭圧痕残る。頚部上部ヘラ磨き。頚部下部ハケ目のちナデ。頚部直下ナデ。以下ヘラ削りのちナデ。	色調：　淡橙色 胎土：　1～3mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
79	椀形土器	ＳＫ４埋土	器高　　6.6 口径　　10.8	体部から急な弧を描き，口縁部は外方に延び，端部はほぼ垂直に立ち上がり，丸くおさめる。底部は丸底。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ハケ目。底部はヘラ削りのちナデ。 内面：　口縁部ヨコナデ。以下ナデ。底部に指頭圧痕。	色調：　暗黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
80	甕形土器	ＳＫ５	口径　　15.8 胴部最大径 21.2	口縁部は「く」の字状に外反し，端部にかけて外湾し，端部は丸くおさめる。口縁部には強いナデによる凹線がめぐる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ハケ目。頚部直下に波状紋をめぐらす。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調：　黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
81	甕形土器	ＳＫ５		口縁部は外湾し，端部にかけてさらに外湾し，端部は丸くおさめる。	外面：　口縁部ヨコナデ。 内面：　口縁上部ヨコナデ。口縁下部ハケ目。頚部直下ハケ目のちナデ。以下ヘラ削り。	色調：　外面　灰褐色 内面　橙色 胎土：　1mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
82	甕形土器	ＳＫ５	口径　　14.5 胴部最大径 17.0	口縁部は外湾し，端部はやや尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面：　頚部直下までヨコナデ。以下ヘラ削り。	色調：　外面　明橙色 内面　橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：　やや軟調
83	壺形土器	ＳＫ５	器高　　31.0 口径　　[17.0] 胴部最大径 25.7	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平らにおさめる。胴部は倒卵形を呈する。底部は丸底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。以下ハケ目のち一部ヘラ磨き。底部ハケ目のち一部ナデ。 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目。以下ヘラ削り。	色調：　外面　黄褐色～橙色 内面　黄褐色～明橙色～黒色 胎土：　1～3mm大の砂粒多く含む 焼成：　良好
84	壺形土器	ＳＫ５	器高　　53.6 口径　　17.4 胴部最大径 37.1 底径　　9.9	「く」の字状に外反する口縁に，内傾し，緩やかに内湾する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部は平らにおさめる。頚部にヘラ状工具による綾杉紋を１段入れた貼付突帯をめぐらす。胴部は倒卵形を呈する。底部は平底。	外面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部には櫛歯状工具による波状紋をめぐらす。頚部ハケ目。以下ハケ目のち一部ナデ。底部ハケ目。 内面：　口縁部ヨコナデ。外面調整時の指頭圧痕。以下頚部までハケ目のちナデ。以下ナデ，部分的にハケ目。	色調：　黄褐色～淡橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
85	壺形土器	ＳＫ５	口径　　22.6 胴部最大径 31.6	外反する口縁に緩やかに外湾する立ち上がり部を接合する複合口縁。端部はやや平たく，やや内傾する。	外面：　口縁部周辺はヨコナデ。以下ハケ目。肩部に刺突状工具により線状の施紋を1段施す。 内面：　口縁部周辺ヨコナデ。以下	色調：　淡黄褐色 胎土：　1～2mm大の砂粒若干含む 焼成：　良好
86	壺形土器	ＳＸ３埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平らにおさめる。	外面：　口縁部ヨコナデ。以下ヘラ 内面：　口縁部ヨコナデ，一部ヘラ	色調：　橙色 胎土：　1mm大の砂粒若干含 焼成：　良好
87	不明	ＳＸ３埋土		口縁部は外反し，端部は平らにおさめる。端部に２条の沈線を施す。	外面：　ヨコナデ。 内面：　ヨコナデ。	色調：　黄褐色 胎土：　1mm大の砂粒若干含 焼成：　良好
88	甕形土器	標高64m平坦面埋土	口径　　[12.7] 胴部最大径 [14.5]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は尖り気味におさめる。胴部は倒卵形を呈する。	外面：　口縁部ヨコナデ。胴部ハケ 内面：　口縁端部ヨコナデ。口縁部ハケ目のちナデ。頚部直下ナ	色調：　外面　黄褐色～橙色 内面　橙色 胎土：　1～2mm大の砂粒多 焼成：　良好

Ⅳ　ま　と　め

成岡Ａ地点遺跡では，３基の古墳をはじめ，竪穴式住居跡３軒・掘立柱建物跡１棟・テラス状遺構３か所・土坑５基を調査した。なお，本遺跡の位置する丘陵の最高所で，小型の円墳と思われる第４号古墳を確認している。しかし，第４号古墳は未調査であるため，本稿では調査によって明らかにすることが出来た遺構について，その時期と性格，また広島市域における歴史的位置付けについて，若干の考察を行いたい。

１．古墳群の構成と時期

(1) 概要

３基の古墳は，尾根筋の先端から順に第１号～第３号古墳である。本遺跡の位置する尾根筋全体の中でも最も広い平坦面で，調査区西半分を占める64 m平坦面上を第３号古墳が専有し，第２号古墳・第１号古墳はその東側の緩斜面上に築かれている。

第１号古墳は東西を溝によって区画された方墳で，規模は東西９ｍ南北7.5 ～ 11 m，埋葬主体は木棺直葬で，刀子と飾り金具が副葬されていた。第２号古墳は西側を溝で区画された円墳で，直径約11 m，埋葬主体は箱形石棺で，老年の男性人骨が良好な状態で出土し，その頭骨の脇に刀子が副葬されていた。第３号古墳は，西側を溝で区画され，残る東南北は平坦面（墳裾部平坦面）が巡らされた長円形の墳丘を持ち，規模は東西13.5 ｍ南北11.5 ｍで，３基の中で最も規模が大きい。中心となる埋葬主体は墳丘中央に築かれた木槨木棺墓の第１主体で，鉄剣・鈍・大型鉄鏃２点が相内から，小型鉄鏃19点が棺外からそれぞれ出土した。また，墳丘の周囲に９基の埋葬主体（第２～第10主体）が築かれていた。これらは，それぞれの長軸方位が直近の墳裾とほぼ平行し，あたかも墳丘を取り囲むように位置していること，第９・第10主体を除き墓壙底面の標高がほぼ一定で，その深さから墳裾部平坦面から掘り込まれている可能性が高いことなどから，本古墳に伴う副次的な埋葬主体（副主体）と考えられる。埋葬施設は，第９主体が箱形石棺の他はいずれも木棺直葬である。また，第５主体から管玉が，第７・第９主体からガラ久小玉が，第10主体からはガラス小玉３点・鉄鏃１点がそれぞれ出土している。

(2) 築造時期

各古墳の築造時期は，第１号古墳は，区画溝から出土した布留０式に並行するものと考えられる小型丸底壷形土器から，第２号古墳は，やはり周溝から出土した鼓形器台や墳丘埋土中の布留０式の二重口縁壷形土器の□縁部から，いずれも古墳時代初頭までに築造されたものと考えられる。この両古墳間の新旧関係については，第２号古墳墳丘東斜面上にほとんど埋土が堆積していなかったため，土層断面の観察では確認する事はできなかった。ところで，第１号古墳は東西を溝で区画するが，西側が東側に比べ非常に浅く造られている。第１号古墳単独で考えるならば，この構造は緩斜面という地形を積極的に活用し，投入した労働力以上に墳丘の規模を大きく見せる効果を求めた結果と考えることができる。しかし，他の２基が墳丘の西側を大きく掘り込んだ溝によって区画されていることを考えれば，第１号古墳の西側区画溝だけが浅く作られた理由としては不十分と思わ

れる。そこで，第１号古墳と第２号古墳の位置関係を見ると，第２号古墳の東側墳裾は第１号古墳西側区画溝の西縁から約１～２ｍに位置すると推定される。このため，第１号古墳の西側区画溝を，少なくとも他の２基と同程度，若しくは東西が対称となるように掘削した場合，第２号古墳の墳丘が削り込まれることになる。つまり，第１号古墳は，第２号古墳との関係からその構造を規制された可能性が考えられるのである。

一方第３号古墳の築造時期については，時期決定の参考になる遺物が一切出土しなかったため明確にはできなかった。また，土層の観察からも，東側に位置する第２号古墳との新旧関係について明らかにすることはできなかった。ただし，第３号古墳が専有する64ｍ平坦面は，本遺跡の位置する尾根のなかで最も広く，見晴らしもよいなど，第１号古墳・第２号古墳の築造地点に比べ明らかに造墓地として優れている。よって，本古墳群中，最初に築かれたのは第３号古墳であった可能性が高い。また，古墳群以外の遺構群の時期は，後述のように弥生終末期～古墳時代初頭であり・これが第３号古墳の築造時期の上限と考えてよいであろう。以上から，第３号古墳は最古式・出現期の古墳と考えられる。

このように，本古墳群は第３号古墳を契機に，第２号古墳，第１号古墳の順に古墳時代初頭の，極めて短期間に相次いで築造されたものと考えられる。

(3) 関係

言うまでもなく，古墳とは本来集団から隔絶した有力者のための個人墓である。つまり本古墳群の個々の古墳の被葬者も，それぞれ集団を代表する有力者であったと見るべきである。しかし，前段で見たように，本古墳群の形成は極めて短期間であったと考えられる。よって，本古墳群は同じ集団を代々率いた有力者達の世代墓とは考えにくい。では，３基の古墳はどのような関係にあったのであろうか。

ここでまず第３号古墳の副主体群の被葬者達の性格について考えてみたい。第１に副葬品に着目すると，広島市域における弥生時代後期～古墳時代初頭の一般集団墓の場合，副葬品を持つ例は非常にまれである。よって，副葬品を持つことは，その被葬者が一般民衆とは異なる社会的な階層に属していることを示していると考えられる。その副葬品が，本副主体群では９基中４基とほぼ半数から出土している。さらに，古墳の周囲という特殊な場所に位置することも合わせて考えれば，本副主体群の被葬者達は，副葬品を持たないものも含めて，一般集団とは異なる社会的階層に属する人々であったと考えられる。次に墓壙の規模を見ると，底面の長さが２ｍを越える大型のもの（第３・４・７～10主体）と１ｍ前後の小型のもの（第２・５・６主体）に分かれる。しかし，構造は基本的に違いが認められないため，規模の違いは被葬者の体格の違いに根ざしたものであり，大型の墓壙には成人が，小型のものには小児が葬られていたと考えられる。このことは，被葬者達が，母集団の中から能力や年齢など社会的な条件で選び出された集団ではなく，より個人的な関係に根ざした集団であることを示していると言えよう。以上から，第３号古墳の副主体群の被葬者集団は・第１主体の被葬者と個人的な関係によって結び付けられた特定集団＝家族とみてよいであろう。なお，第５主体は小児用であるにもかかわらず，副葬品として管玉を持ち，第10主体は，墓壙規模・副葬品の質・量ともに副主体群中最も優れている。これらのことは，この特定家族の中にも何らかの階

層差が存在しており，それは年齢に囚われない質，おそらく第１主体の被葬者との血縁の遠近などであることを示していると考えられる。
さて，これまで見てきたように，３基の古墳の構造は墳丘・埋葬施設ともにすべて異なっている。仮に３基の古墳の被葬者が血縁を有し，葬送儀礼を同じくするのならば，このような違いが生じる要因としては築造時期や被葬者の階層の相違などが挙げられよう。しかしながら，築造時期にほとんど差は認められない。また，第３号古墳の副主体群を見ると，埋葬施設の構造は基本的にほぼ共通であるため，その被葬者である特定家族内における階層差は，副葬品の有無やその量，もしくは墓壙規模によって表現されていると考えられる。よって，階層差が要因とも考えにくい。つまり，３基の古墳の被葬者は同一の特定家族には属しておらず，それぞれの古墳の築造母体となったのは，葬送に関して異なった伝統を持つ，異なった集団であった可能性が高いのである。
以上のように，本古墳群は，同一尾根上に近接して，ほぼ同時期に，葬送儀礼が異なる別個の集団が，それぞれ古墳を築いたものということができる。このような一見矛盾するとも思える集団の形態として，例えば３つの小集団からなる瀬野川流域連合ともいうべき大集団を想定してみたい。本古墳群の被葬者達は,．同世代に属するそれぞれの小集団の長であり，かつ連合を率いていたのが第３号古墳の被葬者であったと考えるならば，本古墳群の一見相反するとも思える条件をみたすことができよう。埋葬主体の墓壌規模と副葬・供献品の量だけを取り出せば，第３号古墳第10主体が第１号古墳の埋葬主体を上回るという逆転現象も，第１集団と第３集団との相対的な関係の上から考えれば理解することも可能である。

２．古墳出土遺物

第１主体から出土した鉄鎌のうち，大型鉄鏃(11)は圭頭式の鉄鏃である。弥生時代では圭頭鏃は北部九州を中心に分布し，広島市域での出土例は極わずかである1)。また，骨銭形鉄鏃は本来朝鮮半島で製造されていた型式で，日本国内における出土例は福岡県郷屋遺跡の２点のみが知られているだけである。さらに骨鏃形鉄鏃は，全てがほぼ同一の形状・寸法であることから一括して製作され，この地にもたらされたものと考えてよいだろう。朝鮮半島の工人の手による可能性も考えられる。
一方，第２号古墳に供献されていた鼓形器台(4)は，形状は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半期の山陰で見られる鼓形器台に非常に近い。しかしながら，山陰で製作された鼓形器台の口径が20㎝前後で胎土も白っぽい粗いものであるのに比べ,・寸法が小型で胎土が緻密な黄褐色であるなど異なる点が多い。このことから，この(4)は，近年「近畿製鼓形器台」と認識されているものと判断することができる2)。さらに，表面には赤色顔料が塗布されているが，これは吉備北部で見られる特徴と考えられている。また，ＳＸ２土器だまりから出土した聾形土器(65・66)も，吉備地方の酒津式の特徴を持つものである。
以上のように，本古墳群出土遺物の様相は，本古墳群を築造した勢力の，北部九州（その先にある朝鮮半島も含め）や吉備・近畿地域との活発な交流を示しているものと考えられる。

３．その他の遺構の時期と性格

Ⅲ－２で述べたように，古墳以外の遺構は，64ｍ平坦面でＳＨ１，ＳＢ１，ＳＫ１を，57ｍ平坦面の南側でＳＸ１，ＳＨ２・３，ＳＫ２・３を，北西側でＳＸ２・３，ＳＫ４・５をそれぞれ確認した。

これらの遺構の時期について整理すると，ＳＸ１，ＳＨ２が上深川Ⅱ式終末＝弥生時代終末から上深川Ⅲ式古段階＝古墳時代初頭のもの，ＳＫ５及びＳＸ２土器だまりが上深川Ⅲ式新段階＝古墳時代前期前葉のものである以外はいずれも，上深川Ⅲ式古段階のほぼ同時期に営まれてい肌前述のように，古墳群の築造は古墳時代初頭と考えられることから，古墳とその他の遺構群は，一部さかのぼるものも含まれるものの，ほとんど時期差の無いものと考えられる。

このうち，ＳＸ２土器だまりは，Ⅲ－２-(3)－①で述べたように，城ノ下第６号古墳出土土器との関係から，またＳＫ５は出土土器の時期から，いずれも第２号古墳と同時期に存在した可能性が高い。その性格は，第２号古墳との位置関係から考えれば，第２号古墳築造に伴う祭祀遺構である可能性が考えられよう。

その他の大多数の遺構群の性格については，住居・掘立柱建物・貯蔵穴といった集落を構成する遺構が確認されており，その配置についても，64ｍ平坦面上に無遺構部分があり・その縁辺部に比較的規模の大きなＳＨ１を築造し，傾斜の急峻な場所に小規模なＳＨ２・ＳＨ３を築造しているなど，八幡川流域の浄安寺遺跡3)や下沖５号遺跡4)，太田川流域の大明地遺跡5)などでも確認された市域の集落の在り方の一類型と考えることができる。集落規模については，調査範囲外に続く尾根上等に遺構の存在する可能性があるものの，営まれた期間は，弥生時代終末～古墳時代初頭の短期間であり，市域の集落と比べれば，小規模な分村と見ることができよう。なお，古墳築造と時期が近接することから，古墳築造に伴って，集落が移転，廃絶した可能性も考えられる。

一方，本遺構群については，先述の浄安寺遺跡や下沖５号遺跡，大明地遺跡の集落と細部を比較した場合，住居の立地に最適な64ｍ平坦面にＳＨ１の１軒のみしか住居が確認できず，また，57ｍ平坦面やＳＸ２にも住居が確認できないなど，住居の密集度が低い。また，ＳＨ２・３は，柱穴が掘方の外にあり，床面積が約５～７㎡程度と狭く，市域に類例を見ない口また掘立柱建物についてもⅢ－２で想定したように２間×３間であるならば，規模が大きいにも関わらず，傾斜の低い側の柱穴が地山まで達しておらず，集落の構成建物として長期間便用できるものとは考えにくい。これらのことをあわせて考えると，本遺構群が，一定期間，通常の集落として機能を維持しえたのかという疑問が生じる。ここで，古墳群とほとんど時期差が無い点，住居構築の容易な第３号古墳のある64ｍ平坦面を避けるように遺構が分布している点，第２号古墳より，ＳＨ３，ＳＸ３が確実に先行している点をあわせて考えると，３基の古墳の中では，最も古い時期にさかのぼると考えられる第３号古墳の築造に伴う遺構群と捉える考え方もできよう。

いずれにしても，瀬野川流域でのこのような遺構の本格的な発掘調査は初めてのことであり，遺構群の性格を明らかにすることができなかった。今後の調査成果の蓄積により，本遺構群の性格が明らかになることを期待したい。

４．結び

成岡古墳群は，広島市域東部を流域とする瀬野川水系で初めて確認された前期前半期の古墳群である。なかでも，第３号古墳は広島市域の中でも最古級の出現期の古墳である可能性が高い。

さて，第Ⅱ章で見てきたように，弥生墳丘墓や古式古墳の様相から，弥生時代後期から古墳時代前期における広島市域では，太田川河口域にのみ突出した政治力・経済力をもつ勢力が存在していたものと，従来考えられてきた。この歴史観は，八幡川流域の城ノ下古墳群の調査によって，やや修正を迫られたものの，時期が該当する城ノ下第６号古墳の規模・内容は，太田川下流域の古墳に比べ著しく劣るため，その存在が十分に評価されていたとは言いがたかった。

しかしながら，本遺跡の調査によって，瀬野川水系においても古墳時代初頭の古式古墳群が存在することが明らかになった。特に第３号古墳の規模や構造，豊富な副葬・供献品は，その被葬者の勢力の大きさと，盛んな対外交流の様子を窺わせる。加えて，成岡遺跡の約 1.5 ㎞下流の丘陵上に位置する上安井古墳 6)は，成岡第１号古墳・第２号古墳とほぼ同時期に築造されたと考えられているが，埋葬主体に竪穴式石室を持つなど，成岡古墳群とはやや異なる様相を示している。このことから，古墳時代初頭の瀬野川水系には，複数の政治勢力が存在していた可能性さえ考えられるのである。

もっとも，太田川水系の主要な古式古墳と，成岡古墳群を初めとする他地域の古式古墳の規模や副葬品を比較するならば，やはり太円川水系の優位は揺るがないことは確かであろう。けれども，古墳時代初頭の広島市域には，太田川水系だけでなく東の瀬野川・西の八幡川と市域の主要河川の流域に，それぞれ古墳の築造を成しえた独自の勢力が存在していたという事実が明らかになったことは，これまでの広島市域の弥生時代後期後半から古墳時代にかけての歴史観・地域観を大きく塗り替えるものと評価することができる。

注

１．川越哲志『弥生時代の鉄器文化』1993 年

２．市村慎太郎「久宝寺遺跡出土鼓形器台の意義」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター　1999 年

３．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』1986 年

４．広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988 年

５．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）』1987 年

６．財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳見学会資料』2000 年

広島市成岡第２号古墳出土の人骨

松下孝幸＊

【キーワード】:広島県，古墳人骨，石棺墓，広顔，高身長

はじめに

広島県広島市安芸区中野東2丁目に所在する成岡Ａ地点遺跡の発掘調査が，東広島バイパスへのアクセス道路建設に伴い，広島市文化財団によって1999年から2000年にかけておこなわれた。成岡Ａ地点遺跡は瀬野川を見下ろす標高50ｍ～60ｍの尾根上に位置し，ここから瀬野川流域一帯を展望することが可能である。この尾根上から古墳時代前期の古墳３基と弥生時代後期に営まれた集落跡などが発見された。古墳３基のうちの１基（第２号古墳）の内部主体である箱形石棺から保存良好な人骨が１体検出された。なお，第１号古墳は一辺が約9ｍの方墳，第２号古墳は直径が約11ｍの円墳，第３号古墳は直径約13ｍの円墳で，内部主体はそれぞれ・木棺・石棺・木槨木棺墓である。木棺と木槨木棺墓からは人骨は検出されなかった。

これまで，広島県内で，筆者が古人骨の調査に加わったり，報告したもののうち，古墳人骨は，芳カ谷３号墳(広島市，1984)，大槙３号遺跡(東広島市，1985)，八鳥矢内迫横穴墓群(西城町，1990)，城ノ下Ａ地点遺跡(広島市，1991)，助平古墳(東広島市，1992)，陣開遺跡(本郷町，1993)，打堀山遺跡群Ａ地点(府中市，1997)・梶平塚第２号墳(東城町，1997)，山の神墳墓群(府中市，1998)，会下山(えげやま)(吉田町未刊行)，新宮第２号古墳(八千代町，2000)がある。また，弥生時代から古墳時代にかけての人骨については・歳ノ神遺跡群(千代田町，1986)，中出勝負峠墳墓群(千代田町，1986)，鷺の森遺跡(竹原市・1991)・手山由墳墓群(豊栄町・1991)，胡麻４号遺跡(東広島市，1990)の例がある。弥生人骨の出土例も増え，広島県内での弥生人骨や古墳人骨の出土例数が次第に増加しつつある。しかし，そうはいっても保存状態が良好なものはやはり少ない。古墳人骨としては保存状態が良かったのは八鳥矢内迫横穴墓群，中出勝負畔墳墓群，山の神古墳群出土の人骨であり，それぞれ特徴を明らかにすることができた。

地域的に注目されるのは千代田町と府中市である。千代田町の氏神正田古墳人は，「高顔・高上顔」ではあったが，「低身長」で，中出勝負峠古墳人は「低顔」ではあるが，「高上顔」，「高身長」であるというように「高顔・高身長」と「低・広顔，低身長」が混在したり，両者の中間的形態や計測値を示す古墳人が認められる。

一方，府中市の山の神墳墓群からは保存状態がきわめて良好な古墳人骨が出土した。彼らの特徴は男女とも顔は「低・広顔」で，顔は南九州の山間部の地下式横穴から出土する古墳人に酷似していたが，身長はかなり荷く，とくに女性は著しい高身長であった。

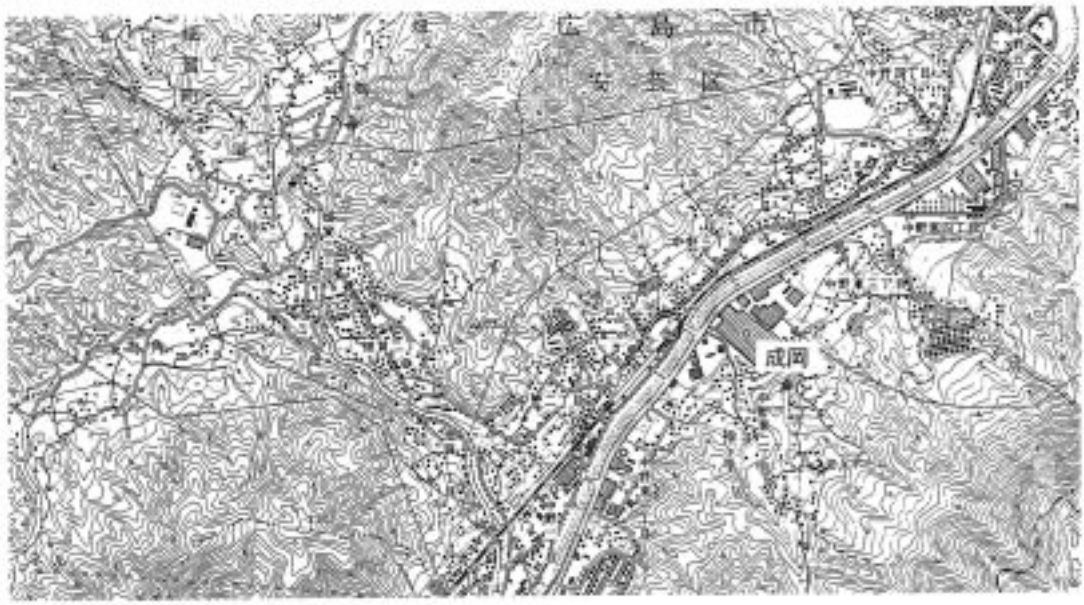
また，八千代町の新宮第２号古墳の北主体の石棺から保存良好な男性骨１体が出土した。この古墳人は頭蓋が大きく，頭型は短頭に近い中頭型で，顔の高径がやや高く，高身長であった。

本例は頭蓋の保存状態が良好で，また，現場で大腿骨の最大長を計測することができたので，推定身長を算出することも可能であった。人類学的観察や計測をおこない，若干の考察もあわせておこなったので，その結果を報告しておきたい。

資　料

第２号古墳の内部主体である箱形石棺から出土した人骨は１体である。本人骨は所見の項で詳述しているように老年の男性骨である。埋葬姿勢は仰臥で，肘関節と膝関節は伸展状態であった。人骨の保存状態は良好で，ほぼ全身の骨が残っていた。頭蓋はほぼ完全な状態で残存していた。鎖骨，肩甲骨，上腕骨，俠骨，大腿骨，脛骨，腓骨は両側が残存していたが，尺骨だけは左側のみで，右側は残っていなかった。また，肋骨も左側は残っていたが，右側は欠損しており，椎骨は腰椎と下位の胸椎は残存していたが，上部胸椎および頚椎は残っていなかった。仙骨も残存しており，足の骨(足根骨，中足骨，指骨)は左側の方が右側よりも保存状態が良い。なお，手の骨(手根骨，中手骨，'指骨)は両側とも残存していなかった。他の骨は良く残っていたにもかかわらず，右側

* Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum[土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]



第１図　遺跡位置（1/30,000）（Fig. 1 .Location of the Narioka Site Hiroshima City, Hiroshima Prefecture）

の前腕の骨や右側の肋骨が残存していなかったのは,右側の前腕の骨があった場所の死床面が一番低くなっていたので,相内に流れ込んだ雨水がこの低い面に溜まり,右側の前腕の骨や右側の肋骨を溶かしてしまったものと思われる。

出土人骨の性別，年齢は表１のとおりである。

表１　出土人骨一覧(Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	頭型，身長など
第２号古墳人骨	男性	老年	中頭型，高身長(161.58cm)

第２号古墳人骨は，考古学的所見から，古墳時代前期(3 世紀後半)に属する人骨と推定されている。なお，頭蓋の付近に鉄製の刀子が１口副葬してあった。

計測方法は，Martin-SaHer(1957)によったが，脛骨の横径はオリビエの方法で計測し，鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。

なお，性別と年齢については，所見の項で述べているとおり，男性で，老年と推定された。年齢区分に関しては表２の基準のとおりである。

表２年齢区分(Table2.Divisionofage)

年齢区分		年齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6 歳～ 15 歳(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16 歳～ 20 歳(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21 歳～ 39 歳(40 歳未満)
	熟年	40 歳～ 59 歳(60 歳未満)
	老年	60 歳以上

注)成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所　見

各骨の残存状態は第２図に示すとおりである。また，骨の計測値は，文末に掲載している。第２号古墳人骨の顔面頭蓋には赤色顔料が付着している。

１．頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の大部分を欠損している。骨壁はやや厚く，しっかりしている。外後頭隆起の発達はあまり著明ではない。また,乳様突起もあまり大きくない。外耳道は両側とも観察できたが,骨腫は左右とも認められない。三主縫合は，内板はすべて癒合閉鎖しており，外板もほとんど癒合閉鎖している。

脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長が 185 ㎜，頭蓋最大幅は 141 ㎜，バジオン・ブレグマ高は 135 ㎜である。頭蓋長幅示数は76.22，頭蓋長高示数は72.97，頭蓋幅高示数は95.74となり，頭型はmeso-，ortho-，metriokran(中，中，中頭型)に属している。また，頭蓋水平周は 530 ㎜，横弧長は 308 ㎜であるが，正中矢状弧長は計測できない。

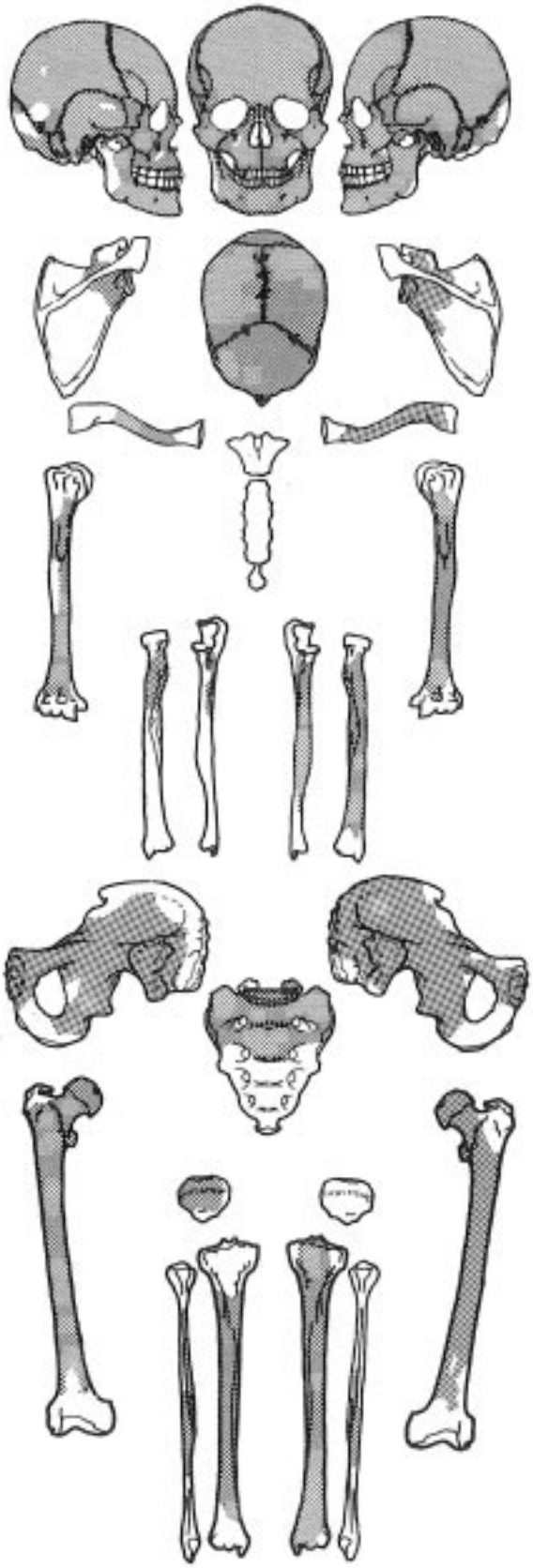
(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起は強く，前項鱗は後に傾斜している。鼻骨はわずかに隆起するだけで，鼻根部の陥凹はみられない。頬骨は外側へ著しく張り出し，顔の幅径は広い。

顔面頭蓋の計測値は，顔長が 102 ㎜，頬骨弓幅は 147 ㎜，中顔幅は 108 ㎜，顔高は 116 ㎜，上顔高は 71 ㎜で，顔示数は 78.91(K)，l07.41(V)，上顔示数は 48.30(K)，65.74(V)となり，顔面には著しい広顔傾向が認められる。

眼窩幅は 46 ㎜(右)，44 ㎜(左)，眼窩高は 32 ㎜(右)，32 ㎜(左)で，眼窩示数は 69.57(右)，72.73(左)となり，両側とも chamaekonch(低眼窩)に属している。

鼻幅は 27 ㎜，鼻高は 56 ㎜で，鼻示数は 48.21 となり，mesorrhin(中鼻)に属している。



第２図　人骨の残存部，アミかけ部分（Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.）

鼻根部の計測値は，前眼窩間幅が18㎜，鼻根横弧長は21㎜，鼻根彎曲示数は85.71となり，鼻根部はやや扁平である。両眼窩幅は103㎜で，眼窩間示数は17.48となり，顔の幅に対して，眼窩間幅が狭い。鼻骨最小幅は8㎜で，前頭突起水平傾斜角は70度を示し，前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は146度，鼻根陥凹示数は13.89である。また，鼻頬骨角は147度である。

側面角は，全側面角が85度，鼻側面角が89度，歯槽側面角は73度で，歯槽性突顎の傾向は弱い。

下顎骨は，右側の下顎枝の保存状態が悪い。下顎体の高さはあまり高くないが，下顎枝は幅広く，下顎切痕は浅い。下顎角は外反している。

２．歯

上下両顎には歯が釘値していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと，次のとおりである。

Ｍ3　Ｍ2　Ｍ1　Ｐ2　Ｐ1　Ｃ　Ｉ2　Ｉ1　Ｉ1　○　Ｃ　Ｐ1　Ｐ2　Ｍ1　Ｍ2　○　[○:歯槽開存]

Ｍ3　Ｍ2　Ｍ1　Ｐ2　Ｐ1　Ｃ　Ｉ2　Ｉ1　Ｉ1　Ｉ2　Ｃ　Ｐ1　Ｐ2　Ｍ1　Ｍ2　Ｍ3

咬耗度はBrocaの1～2度で，下顎の小臼歯はエナメル質しか咬耗しておらず，大臼歯は部分的に象牙質まで咬耗している。なお，風習的抜歯の痕跡は認められない。また，歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

３．四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨，鎖骨，上腕骨，橈骨，尺骨が残存していた。

①鎖骨

やや大きく，垂直径が矢状径よりも大きい。

②上腕骨

長さはわからないが，骨体は大きく，三角筋粗面の発達も良好である。計測は左側のみが可能であった。

計測値は，中央最大径が21㎜(左)，中央最小径は16㎜(左)で，骨体断面示数は76.19(左)となり，骨体はあまり扁平ではない。骨体最小周は計測できないが，中央周は64㎜(左)で，骨体は大きい。

③橈骨

左側の方が保存状態がいい。骨体は大きく，回内筋粗面はよく発達しており，また骨間縁も鋭く突出している。

④尺骨

尺骨も左側の方の保存状態がよい。径は大きく，骨間縁は中央部でよく発達している。

(2) 下肢骨

寛骨，大腿骨，脛骨，膝蓋骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

左右とも坐骨を欠損している。径はあまり大きくはない。大坐骨切痕の角度は小さく，恥骨下角も小さい。

②大腿骨

左右とも遠位端を欠損しているが，左側は現場では下端が残存しており，最大長を計測することができた。長さはやや長く，粗線の発達はそれほどよくなし㌔骨体上部は扁平である。

計測値は，現場で計測した最大長が427㎜(左)である。骨体中央周は86㎜(右)，85㎜(左)で，骨体は男性としてはそれほど大きいものではない。骨体中央矢状径は27㎜(右)，26㎜(左)，横径は27㎜(右)，27㎜(左)で，骨体中央断面示数は100.00(右)，96.30(左)となり，粗線や骨体両側面の後方への発達はあまりよくない。また，上骨体断面示数は77.42(右)，75.00(左)となり，骨体上部は扁平である。

③脛骨

両側とも残っていたが，左側はほぼ完全である。長さは短く，骨体は矢状径が大きく，やや扁平である。ヒラメ筋線の発達はよくないが，両側とも後面に一稜が形成されており，右側はかなり鋭く突出している。骨体の断面形は両側ともヘリチカのⅣ型を呈している。

計測値は，脛骨最大長が334㎜(左)，骨体周は85㎜(右)，84㎜(左)，最小周は76㎜(右)，77㎜(左)で，骨体は大きい。中央最大径は32㎜(右)，32㎜(左)，中央横径は21㎜(右)，23㎜(左)で，中央断面示数は65.63(右)，71.88(左)となり，骨体はやや扁平である。

④腓骨

両側ともよく骨体が残存していたが，計測はできない。骨体はかなり扁平である。

４．推定身長値

左側の大腿骨最大長から，Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると，それぞれ 161.58 ㎝(Pearsn)，160.31 ㎝(藤井)となり，高身長であるが，左側脛骨の最大長から算出すると，156.37cm(藤井)という低い値になってしまう。これは本例の脛骨が大腿骨長さの割には短いことによる。

５．性別・年齢

性別は，眉上弓が強く隆起し，大坐骨切痕の角度や恥骨下角が小さいことから，男性と推定した。年齢は，三主縫合の内板と外板の大部分が癒合していることから，老年と考えられる。

考　察

古墳時代人骨について，広島県内を中心にして周辺の人骨との比較をおこなってみた。

１．頭蓋

(1) 脳頭蓋

まず，頭型を検討してみたい。頭型は頭蓋長幅示数で表される。表３は脳頭蓋の主要計測値の比較表で，広島県内の古墳人とその他に山口県と四国愛媛県の古墳人を載せている。頭蓋長幅示数が算出できた県内の古墳人の例数は多くない。表３には主に筆者が所見を書いた古墳人を掲げた。本例は頭型は中頭型で，示数値も中頭型のほぼ中位にあり，表３に掲げた古墳人のなかでは八鳥矢内迫頭蓋Ⅴとほぼ一致する示数値である。県内の古墳人の頭型をみてみると千代田町の中出勝負峠５号人骨が短頭型で，同じ中出勝負峠７号人骨，氏神正田，山の神が長頭型に属しており，残りの５例は中頭型である。中頭型５例のうち八千代町の新宮，西城町の八鳥矢内迫Ⅳと Ⅷの３例は短頭に傾いた中頭型で，残りの成岡と八鳥矢内迫Ⅴが中頭型の中位である。従って，今のところ広島県の頭型は中頭型で，わずかに短頭に傾いているようであるが，なにしろ例数が少なすぎて時期差や地域的特徴をつかむところまで至っていない。また，山口県や愛媛県の古墳人の頭型は，愛媛県の相の谷が長頭型に属している以外は中頭型である。山口市の朝田古墳人は計測できないものも含めると示数値以上に長頭型に傾いていて，鼻根部が扁平で，歯槽性突顎がみられるなど中世化が進んでいた。成岡の頭蓋長幅示数は山口市の朝田にも近い示数値である。

頭蓋の高さを表すバジオン・ブレグマ高は135㎜で，広島県では中出勝負峠５号人骨と，愛媛県では二の谷と同じ計測値であるが，この値は広島県でみれば決して大きな計測値ではない。

また，脳頭蓋の全体の大きさを表す頭蓋水平周は530㎜もあり，この値は表３では最大値となり，成岡の脳頭蓋がかなり大きいことがわかる。

(2) 顔面頭蓋

表４は顔面頭蓋の比較表である。顔の幅を表す頬骨弓幅は表4では最も大きく，中顔幅も馬島に次いで大きな値で，これは新宮と同じ値である。要するに成岡古墳人の顔の幅はかなり広いのである。顔の高さを示す顔高は広島県内では氏神正田，中出勝負峠５号墳人骨および7号墳人骨に次いで大きな値であるが，120㎜を超える値ではない。また，成岡古墳人の顔高は山口市の朝田，汐汲，愛媛県の馬島，二の谷よりも小さな計測値である。上顔高は70㎜を超え，大想田山，山の神，八鳥矢内迫よりは大きな値ではあるが，氏神，胡麻よりは小さく，新宮，歳ノ神，中出勝負峠と大差ない。山口県と愛媛県の例では朝田よりは大きいが，二の谷と汐汲よりは小さく，馬島の値に一致する。このように成岡の顔面の計測値は，高径もけっして小さくはないが，それ以上に幅径がかなり広いので，顔示数や上顔示数は小さな値となり，コルマンの顔示数は表4では最小値となり，ウィルヒョーの顔示数は山の神に次いで小さな値である。コルマンの上顔示数は山の神，八鳥矢内迫よりは大きいものの，新宮，歳ノ神，中出勝負峠７号墳よりは小さく，また，汐汲，二の谷よりも小さく，中出勝負峠5号墳，朝田，馬島に近い。ウィルヒョーの上顔示数も山の神，大想田山，八鳥矢内迫頭蓋Ⅴよりは大きいが，歳ノ神，胡麻，中出勝負峠７号墳よりもわずかに小さく，新宮，中出勝負峠５号墳に近い値である。また，汐汲，二の谷よりも小さく，朝田と馬島にも近い。

眼窩示数は表４では最小値となるが，示数値は新宮と大差なく，眼窩の高径がかなり低い。鼻示数は鼻高が高いので，小さな示数値になり，歳ノ神，馬島，胡麻に次いで小さな値で，二の谷に一致し，眼窩の高径が低いわりには鼻高が高い。

歯槽側面角は氏神正田，山の神，中出勝負峠５号墳に次いで小さく，比較的中出勝負峠７号墳に近い値で，歯槽性の突顎傾向は弱い。

鼻根部の計測値をみてみると(表５)，鼻根彎曲示数は八鳥矢内迫頭蓋Ⅳよりは大きいが，氏神正田，中出勝負峠７号墳，八鳥矢内迫頭蓋Ⅴよりは小さく，示数値は山の神，八鳥矢内迫頭蓋Ⅷに一致し，その他の資料とも大差ない。山口県と愛媛県の資料とでは馬島と二の谷よりは大きく，朝田と相の谷よりは小さい。すなわち，鼻根部は氏神正田，中出勝負峠ほど扁平ではないが，鼻骨の正中矢状縫合方向への隆起は八鳥矢内迫頭蓋Ⅳや馬島ほ

ど強くはなく，山の神，八鳥矢内迫頭蓋Ⅷと同じ程度である。

２．四肢骨

①上腕骨

表６は上腕骨の比較表である。骨体の太さを表す中央周は山の神，朝田よりは小さいが，中出勝負峠，氏神正田，手島山，汐汲，相の谷より大きく，比較的鷺の森に近い値である。骨体断面示数は手島山，中出勝負峠よりは小さいが，氏神正田，山の神(松下)，汐汲よりも大きく，朝田，山ノ神(吉岡)，相の谷に近く，骨体の扁平性は強くない。

②大腿骨

表７は大腿骨の比較表である。成岡の最大長はほぼ中出勝負峠に一致し，氏神正田，山の神，新宮，鷺の森，朝田，二の谷，相の谷よりは長い。骨体の太さを表す骨体中央周は氏神正田，二の谷よりは大きいが，陣開よりは著しく小さく，計測値は中出勝負峠に一致し，八鳥矢内迫，山の神，鷺の森，朝田とも大差ない値である。要するに古墳人としては若干小さめの骨体である。骨体中央断面示数は陣開，鷺の森，山の神(松下)，中出勝負峠，朝田よりは小さいが，八鳥矢内迫，山ノ神(吉岡)，二の谷よりは大きく，氏神正田に一致する。上骨体断面示数は氏神正田，陣開，鷺の森，朝田よりは小さいが，八鳥矢内迫，中出勝負峠，山ノ神(吉岡)，馬島よりは大きく，山の神(松下)の値に一致する。すなわち，成岡古墳人の大腿骨は長さが長く，骨体の形状は氏神正田と同じように柱状性はみられず，骨体上部は扁平で，その程度は山の神(松下)と同じぐらいである。

③脛骨

表８は脛骨の比較表である。最大長は中出勝負峠，二の谷よりも短いが，氏神正田，山ノ神(吉岡)よりも長く，山の神(松下)に一致する。骨体の太さを示す骨体周は陣開，新宮よりは小さいが，その他の資料よりは大

きい。最小周は表７では大想田に次いで大きく，骨体は陣開ほどではないが，やや大きい方である。中央断面示数は馬島，氏神正田に次いで小さく，骨体は古墳人としては扁平な方である。

３．推定身長値

表９は推定身長値の比較表である。成岡の推定身長値は愛媛県の馬島よりは低いが，中出勝負峠や新宮と大差なく，その他の資料よりはやや大きい。すなわち，本古墳人は高身長である。表９をみてみると広島県の古墳人は山ノ神（吉岡）や氏神正田は低身長であるが，その他の160㎝程度である。山口県の古墳人は160㎝に届かず低身長である。また，愛媛県の古墳人は馬島が飛び抜けて高身長で，その他の２例は160㎝程度である。

要　約

広島県広島市安芸区中野東２丁目に所在する成岡遺跡の発掘調査で，古墳から１体の人骨が出土した。古墳人骨の保存状態はきわめて良好で，広島県の古墳時代人の特徴を明らかにするための貴重な資料となるものである。人骨の人類学的観察と計測をおこない以下の所見を得た。

1．古墳人骨は，第２号古墳の内部主体である箱形石棺から出土し，埋葬姿勢は仰臥の伸展葬である。
2．年齢・性別は，老年の男性骨である。
3．古墳人骨は，古墳時代前期(3 世紀後半)に属する人骨と推定されてし〕る。
4．脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長が 185 ㎜，頭蓋最大幅は 141 ㎜，バジオン・ブレグ高は 135 ㎜で，頭蓋長幅示数は 76.22 となり，頭型は中頭型である。
5．顔面頭蓋の計測値は，頬骨弓幅 147 ㎜，中顔幅 108 ㎜，顔高 U6 ㎜，上顔高 71 ㎜で，顔示数は 78.91(K)，107.41(V)，上顔示数は 48.30(K)，65.74(V)となり，顔面には広顔傾向が認められる。眼窩示数は 69.57(右)，72.73(左)となり，両側とも低眼窩に属し，鼻示数は 48.21 となり，中鼻に属している。鼻根部は狭く，歯槽側面角は 73 度で，歯槽性突顎の傾向は弱い。
6．上腕骨は太く，三角筋粗面の発達も良好で，橈骨と尺骨も大きく，骨間縁が突出している。大腿骨の長さはやや長いが，骨体は細く，粗線や骨体両側面の後方への発達はよくない。脛骨は，長さは短いが，骨体は太く，扁平である。また，腓骨もかなり扁平である。
7．推定身長値は，161.58 ㎝(Pearson)となり，高身長である。
8．成岡第２号古墳の被葬者は，頭型は中頭型で，顔面の幅が著しく広く，精桿な顔つきをしていたようである。顔面の形態と推定身長値は,広島県内の古墳人のなかでは八千代町の新宮第２号古墳の被葬者に近似している。広島県での古墳人骨の出土例も増えるに伴い，保存良好な人骨も増加してきている。地理的な変異や，ある特定の地域の特異性も次第にみえ始めてきた。

《参考文献》

1．池田次郎，他，1984：広島県氏神正田遺跡出土の古墳時代人骨について。広島県山県郡千代田町氏神正田遺跡発掘調査報告：1318.
2．MARTIN-SALLER，1957：Lehrbuch der Anthropologie.Bd.1.Gustav Fischer Verlag,Stuttugart：429-597.
3．松下孝幸，1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ(山口県埋蔵文化財調査報 64)：179-206.
4．松下孝幸，他，1983：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第７次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告 2)：1930.
5．松下孝幸，他，1992：東広島市助平古墳出土の古墳・中世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ(東広島市教育委員会文化財調査報告書第 21 集)：127-134.
6．松下孝幸，他，1983：山口県山口市朝田墳墓群第 11 地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群Ⅵ(山口県埋蔵文化財調査報告 69)：219-242.
7．松下孝幸，1984：広島市芳カ谷３号墳出土の古墳時代人骨。広島市安佐南区祇園町所在広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告(広島市の文化財第 30 集)：61-68.
8．松下孝幸，他，1985：東広島市大槙３号遺跡出土の古墳時代・中世人骨。大槙遺跡群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 38 集)：117-122.
9．松下孝幸，他，1986a：歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター報告書第 49 集)：201-212.
10．松下孝幸，他，1986b：中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集)：213-244.
11．松下孝幸，1990a：広島県の古人骨。みよし風土記の丘，No40：1-4．みよし風土記の丘友の会。
12．松下孝幸，他，1990b：広島県西城町八尾矢内迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。西城町教育委員会文化財報告書第 2 集:33-65.
13．松下孝幸・他，1991a：広島県竹原市鷺の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鷺の森遺跡発掘調査報告(付編)：1-40.
14．松下孝幸・他，1991b：広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群（広島県埋蔵文化財調査センター文化財発掘調査報告第 93 集）：61-80.
15．松下孝幸，他，1991c：広島市城ノ下Ａ地点遺跡出土の古墳時代人骨。(財)歴史科学教育事業団調査報告第 2 集：54-59.
16．松下孝幸，1993：広島県本郷町陣開遺跡出土の古墳時代人骨。陣開遺跡(本郷町教育委員会文化財調査報告書第 2 集)付編：1-5.
17．松下孝幸，1997a：福岡県犀川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群(犀川町文化財調査報告書第 5 集)：82-98.
18．松下孝幸，1997a：広島県府中市打堀山遺跡Ａ地点出土の弥生・古墳時代人骨。打堀山遺跡Ａ・Ｂ地点(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 147 集)：47-50.
19．松下孝幸，1997b：広島県東城町梶平塚第 2 号墳出土の古墳時代人骨。梶平塚第 2 号墳発掘調査報告書(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 150 集)：53-60.
20．松下孝幸，1998a：広島県福山市法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳出土の弥生・古墳人骨。法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古城(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 166 集)：52-58.
21．松下孝幸，1998b：広島県府中市山の神・池ノ迫 i 貫跡群出土の弥生・古墳時代人廿。山の神・池ノ迫遺跡群(広島県埋蔵文化財調布センター調査報告書第 165 集)：75-105.
22．松下孝幸，2000：広島県八千代町新宮第2古墳出土の人骨。新宮遺跡群発掘調査報告書（八千代町埋蔵文化財調査報告書第1集)：95-108.
23．鈴木　尚，1963：日本人の骨。岩波，東京。

成岡Ａ地点遺跡出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

成岡Ａ地点遺跡は，瀬野川左岸の天狗防山の北西尾根上に位置する。発掘調査により，古墳時代前期の古墳と弥生時代終末から古墳時代初頭の集落遺構が検出されている。このうち第１号住居跡は火災住居跡であり，住居構築材と考えられる炭化材が出土している。これらの炭化材は，樹種同定を行った全点がクリであることが確認されている。また，第３号古墳を取り囲む墓穴から出土したガラス小玉は，蛍光Ｘ線分析によりアルカリ珪酸塩ガラスのカリガラスであることが確認された。

本報告では，成岡遺跡の第３号古墳内から出土した剣に付着していた鞘の可能性がある木片の樹種同定，布の薄片および電顕観察，鉄鏃の矢柄の材質の同定を行う。

成岡第３号古墳出土遺物の分析

１．剣の布の分析（図版 16）

(1) 試料

試料は，剣に付着していた布片２点(細・粗)である。共に酸化鉄が染み込んでおり，本来の形質は失われている。

(2) 方法

実体顕微鏡および電子顕微鏡を用いて，試料外観の特徴を観察する。試料を樹脂で包埋し，ダイアモンドカッターで繊維の横断面を切断してスライドグラスに接着し，厚さ0.03㎜になるように研磨してプレパラートとする。生物顕微鏡などを用いて横断面に見られる組織などを観察する。

(3) 結果

布(細)は，実体顕微鏡による観察で，径O.5㎜以下の繊維で編まれている。隙間が小さく，全体に目が細かい。電子顕微鏡では，酸化鉄が染み込んでいるためにほとんど観察できない。薄片の観察では，横断面で円形状になる部分と波状の部分とがある。円形の組織は繊維の横断面である。波状の部分は，繊維に対して平行に切断した部分であり，円形の繊維を縫うように編まれている様子が見られる。繊維の横断面の観察では，径が10～15μmの繊維が150～160本集まって１本の繊維を形成している様子がみられる。これらの繊維は，芯が見られない，裂いたような部分が見られない，不規則な形状を有する等の特徴が見られることから，絹と同定される。

布(粗)は・径0.6㎜程の繊維で編まれている。布(細)に比較すると隙間が大きく，目が粗い。布(細)と同様に，電子顕微鏡による観察はできなかった。薄片の観察では，布(細)と同様の構造が見られ，サイズが異なるものの同じく絹と同定される。

(4) 考察

剣の布片は，いずれも絹糸で編まれていた。絹は蚕糸からつくられ，中国が発祥の地である。日本は，その技術を最も早く中国から導入した国の一つとされ，福岡市有田遺跡で出土した弥生時代前期末の例が国内最古の出土例とされる（布目，1992）。

弥生時代は，主に北部九州の遺跡から出土しているが，古墳時代にはいると富山市杉谷Ａ遺跡，天理市大和天神山古墳，埼玉県坂戸市人西石塚古墳など各地で出土例が報告されており，絹の利用が広まっていたことがうかがえる。古墳時代の出土例を見ると，古墳から出土した銅鏡や刀・剣等に付着している例が多く見られ，副葬品として納められた品々を絹製の布で包んでいたことが推定される。今回の例は，これらの例とも一致しており，本古墳でも剣が絹製の布に包まれて納められたことが推定される。

２．木質遺物の同定（図版 17）

(1) 試料

試料は，剣の柄材(表)と材(裏)，鉄鎌の矢柄の合計３点である。

(2) 方法

試料は炭化していないが，酸化鉄が染み込んで元の木材の形質も残していない。そのため，炭化材で用いられる方法を用いて同定を試みた。

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し，種類を同定する。

(3) 結果

試料のうち，剣の材(裏)は保存状態が悪いために種類の同定には至らなかった。その他の試料は，剣の材(表)が落葉広葉樹のトネリコ属に，矢柄がイネ科タケ亜科にそれぞれ同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・トネリコ属(Fraxinus)モクセイ科

試料は小片であるが，年輪界を挟んだ道管径の変化から環孔材と判断できる。道管壁は厚く，横断面では円形～楕円形，単独または 2 個が複合，複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，1 ～ 3 細胞幅，1 ～ 40 細胞高。

・イネ科タケ亜科(Gramineae subfam，Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ，放射組織は認められない。タケ亜科は，タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

(4) 考察

剣に付着していた木片は，落葉広葉樹のトネリコ属であった。古墳から出土した刀の鞘については，これまでにも各地で樹種同定が行われている(島地・伊東，1988；伊東，1990；福田，1995)。その結果を見ると，針葉樹のヒノキ属やスギなどが多く認められるが，広葉樹のシイノキ属，カエデ属などが認められることもある。今回の場合は，後者の例と同様の出土例といえる。

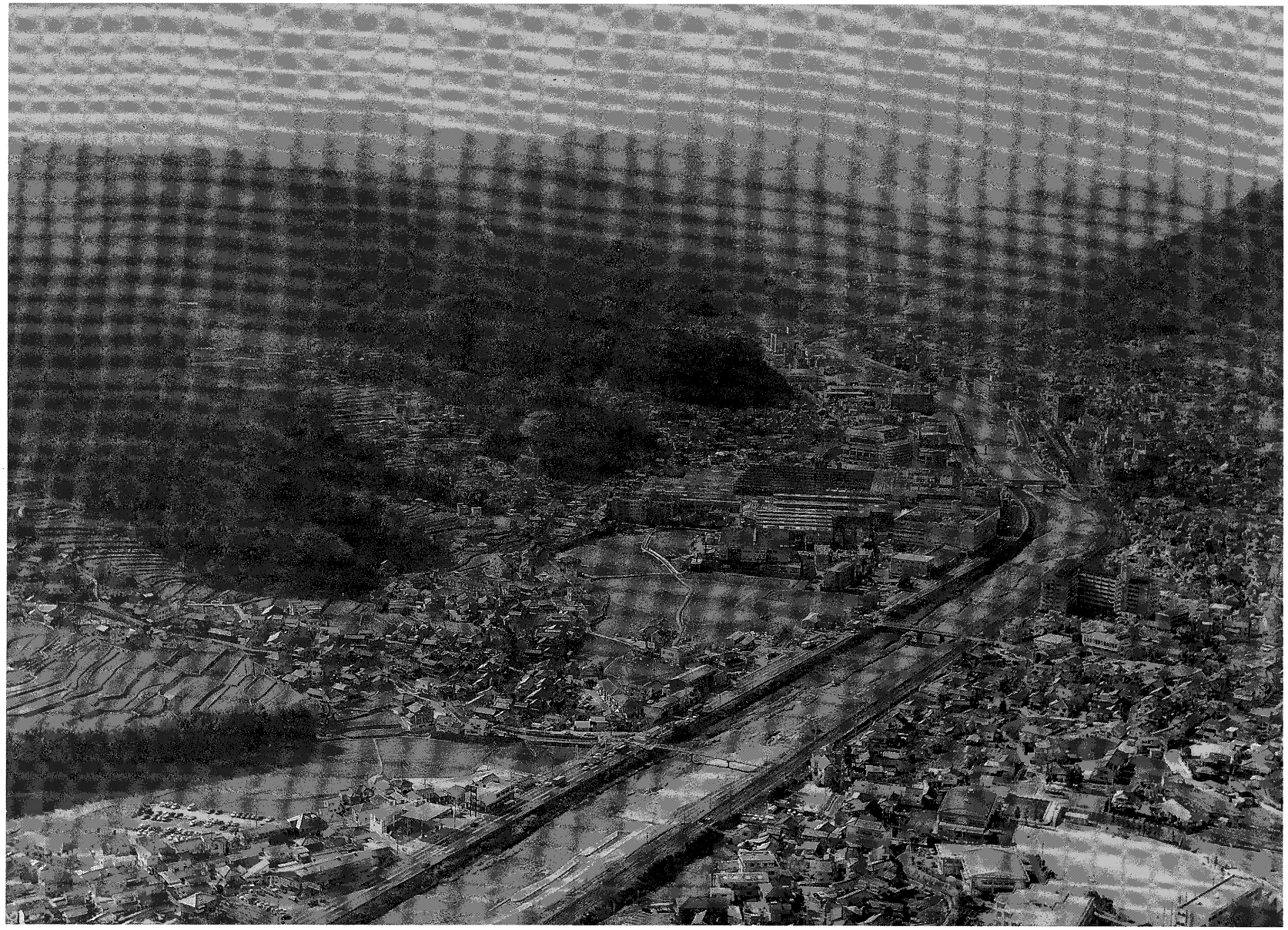
一般に，針葉樹と広葉樹では材質が大きく異なっており，前者には軟質の木材，後者には硬質の木材が比較的多い。材質が異なる背景には，利用目的(実用品・儀礼用)の違い，漆塗りの有無など様々な要因が考えられる。しかし，詳細は不明であり，今後さらに調査事例を蓄積したい。

矢柄はタケ亜科であった。タケ亜科にはヤダケ(矢竹)のように，矢柄として利用する種類が含まれる。出土例も報告されており(島地・伊東，1988)，古くから竹が矢柄として利用されていたことが推定され，今回の結果もその一例といえる。矢柄には樹皮が巻き付けてあり，鑑の固定や矢柄の補強などを行うためと考えられる。樹皮の種類は不明であるが，民俗事例などを考慮するとサクラ，カバノキ，スギ，ヒノキなど樹皮を利用する種類の可能性がある。

引用文献

福田さよ子(1995)刀剣類の外装に使用された木材．日本文化財科学会第 12 回大会研究発表要旨集，p.88-89.
平井信二(1979)木の事典第 2 巻．かなえ書房.
平井信二(1980)木の事典第 4 巻．かなえ書房.
平井信二(1982)木の事典第 15 巻．かなえ書房.
伊東隆夫(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途 11．木材研究・資料，26，p.91-189，京都大学木材研究所.
宮脇昭編(1983)日本植生誌中国，540p.，至文堂.
布目順郎(1992)目で見る繊維の考古学繊維遺物資料集成．314p.，染織と生活社.
島地　謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.

図版

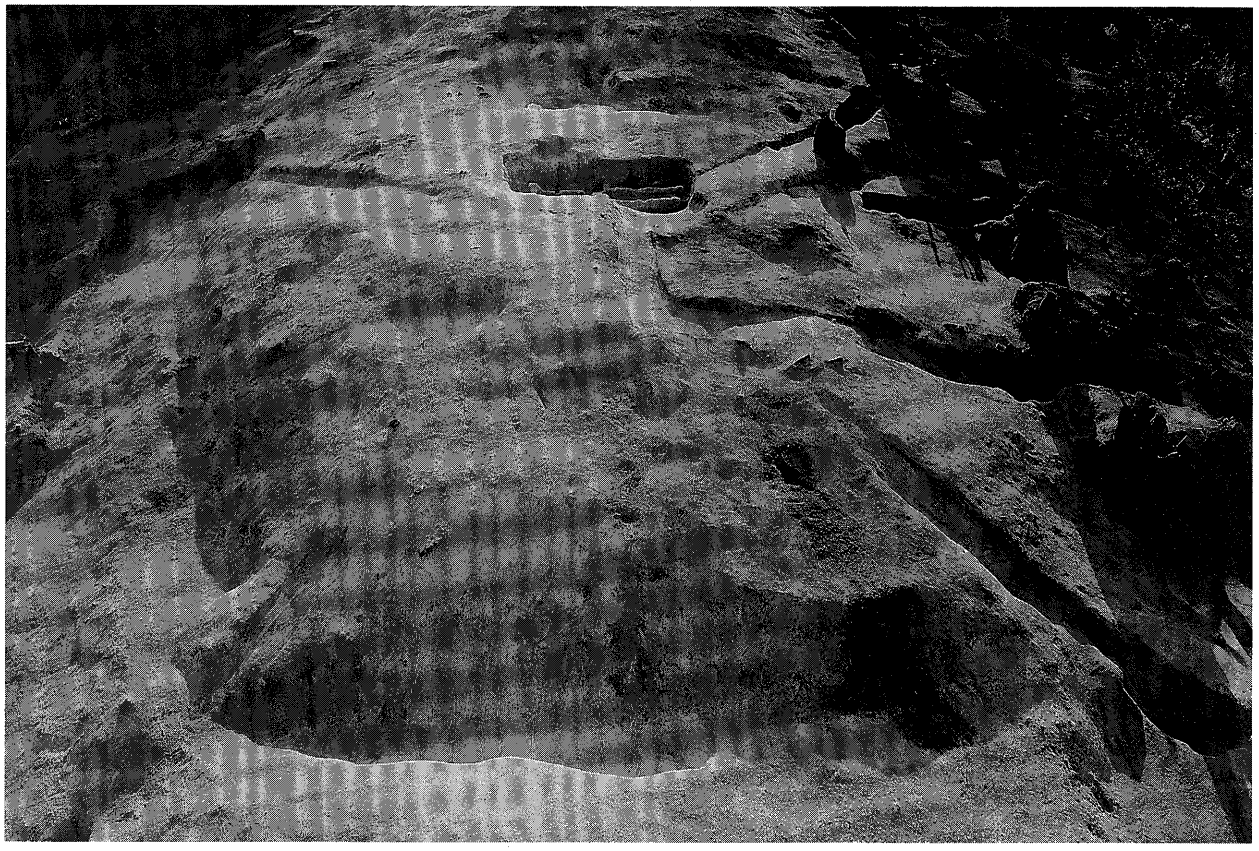


成岡Ａ地点遺跡遠景（航空写真・北東から）

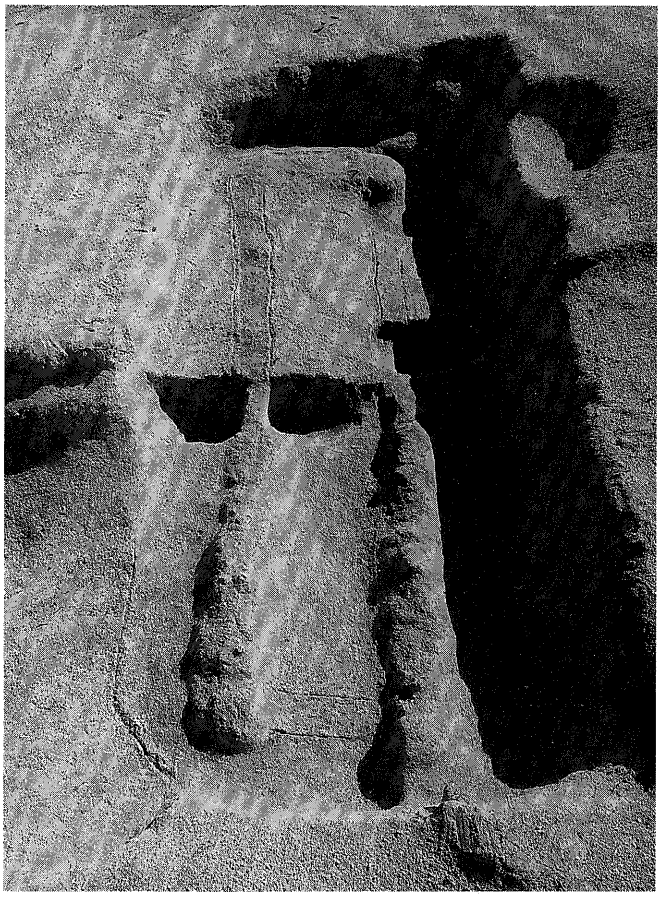
a　成岡Ａ地点遺跡調査前（航空写真・東から）

b　成岡Ａ地点遺跡調査後（航空写真・東から）

図版 2



a　第 1 号古墳墳丘全景（北東から）



b　第 1 号古墳埋葬主体木棺痕跡
（北西から）

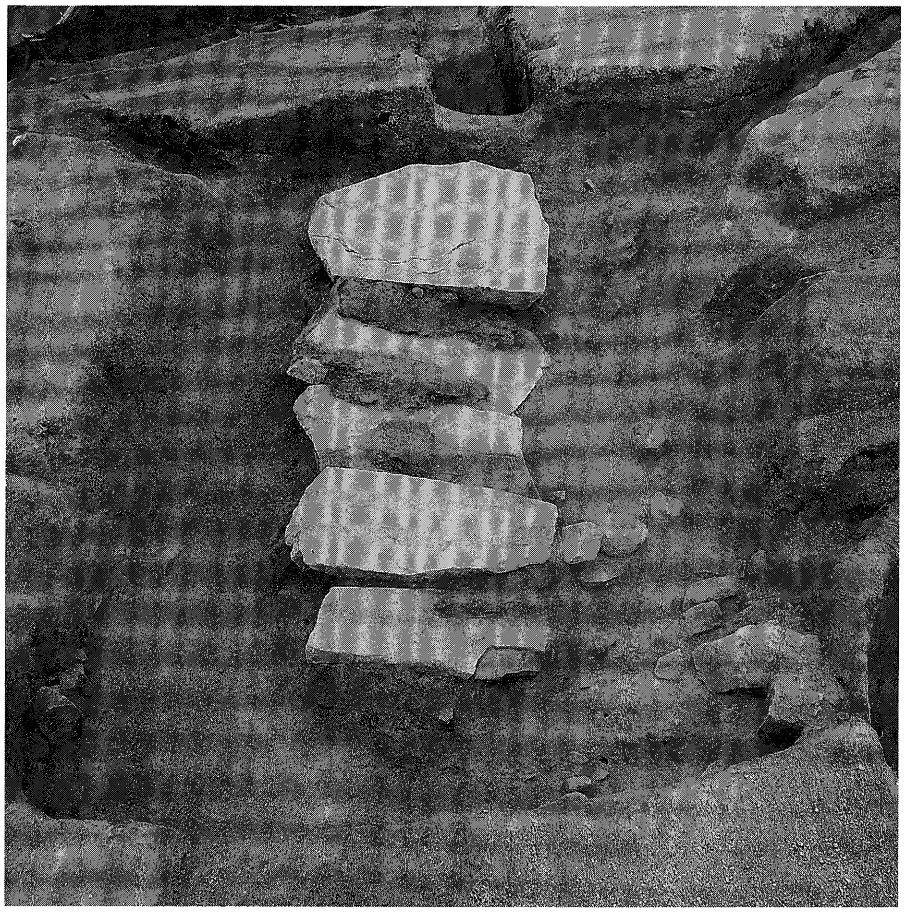
a　第 1 号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）

b　第 1 号古墳埋葬主体完掘後
（北西から）

図版 4

a　第 2 号古墳墳丘全景（北東から）

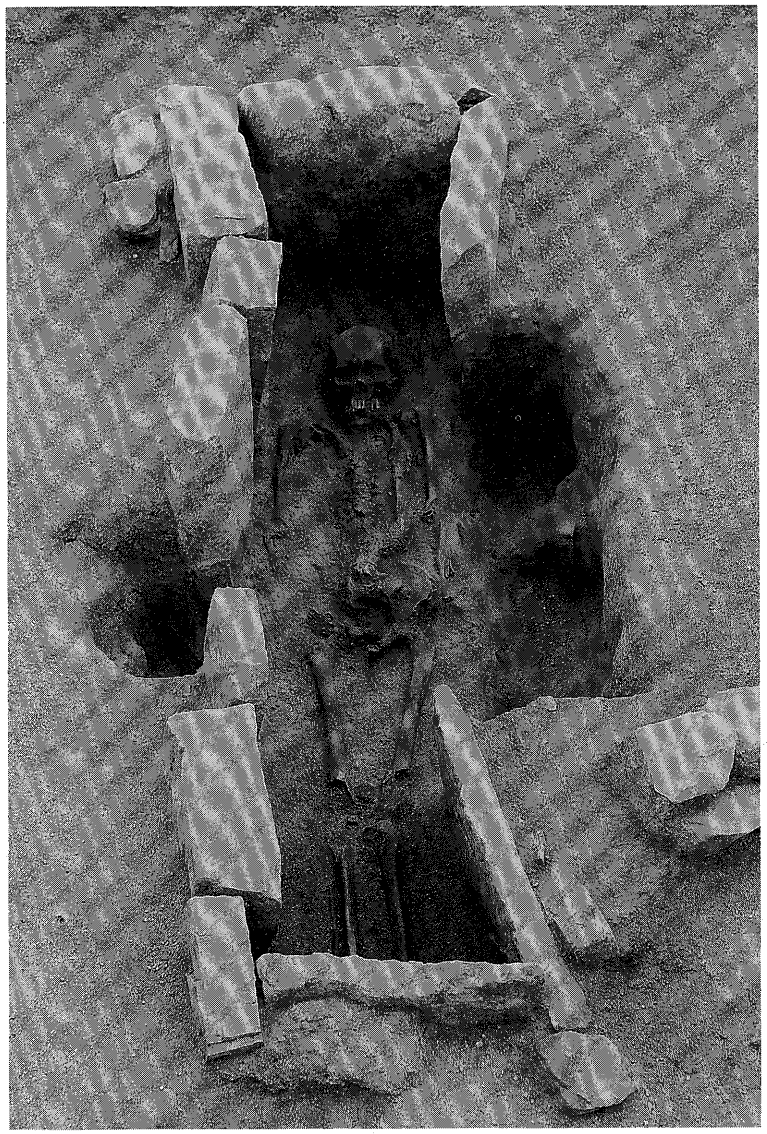
b　第 2 号古墳墳丘全景（西から）



a　第 2 号古墳埋葬
主体石棺開棺前
（北西から）

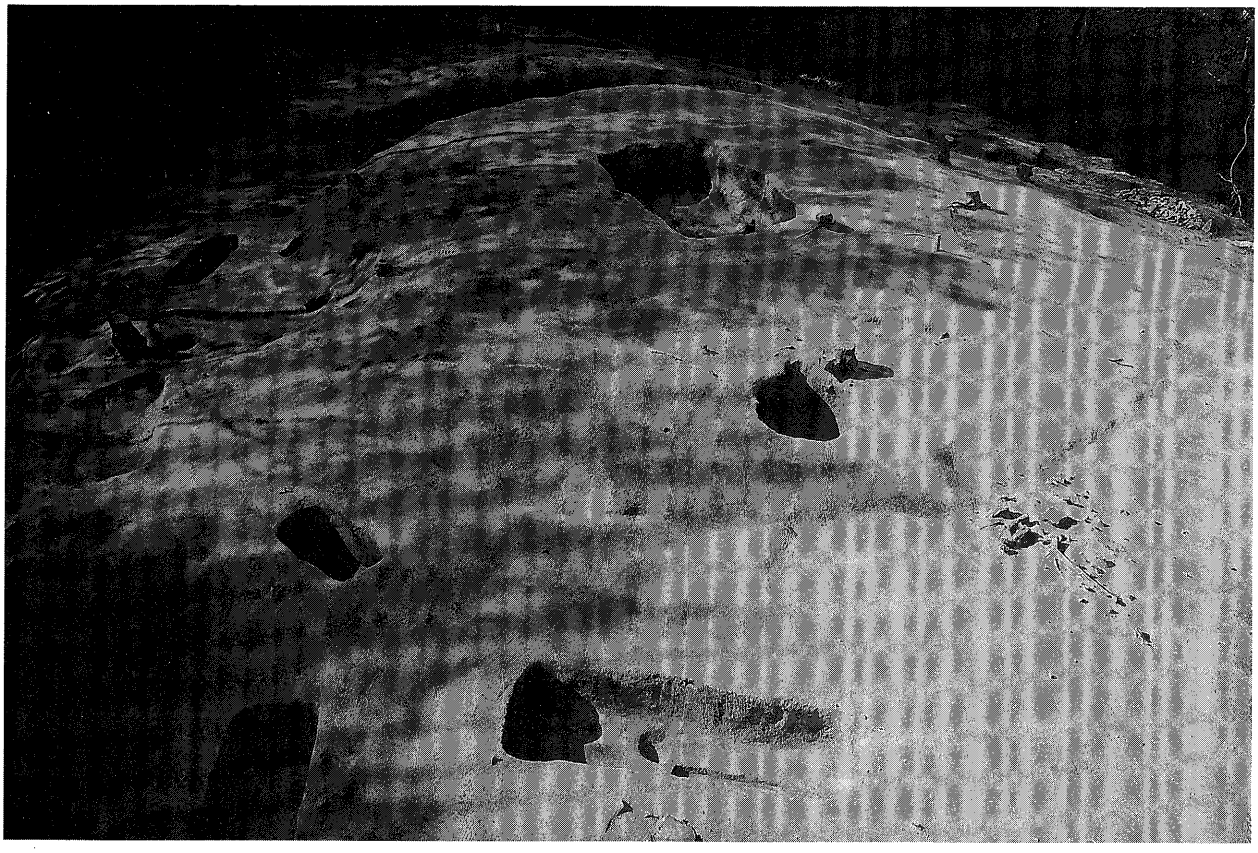
b　第 2 号古墳埋葬
主体石棺開棺後
（北西から）

図版 6

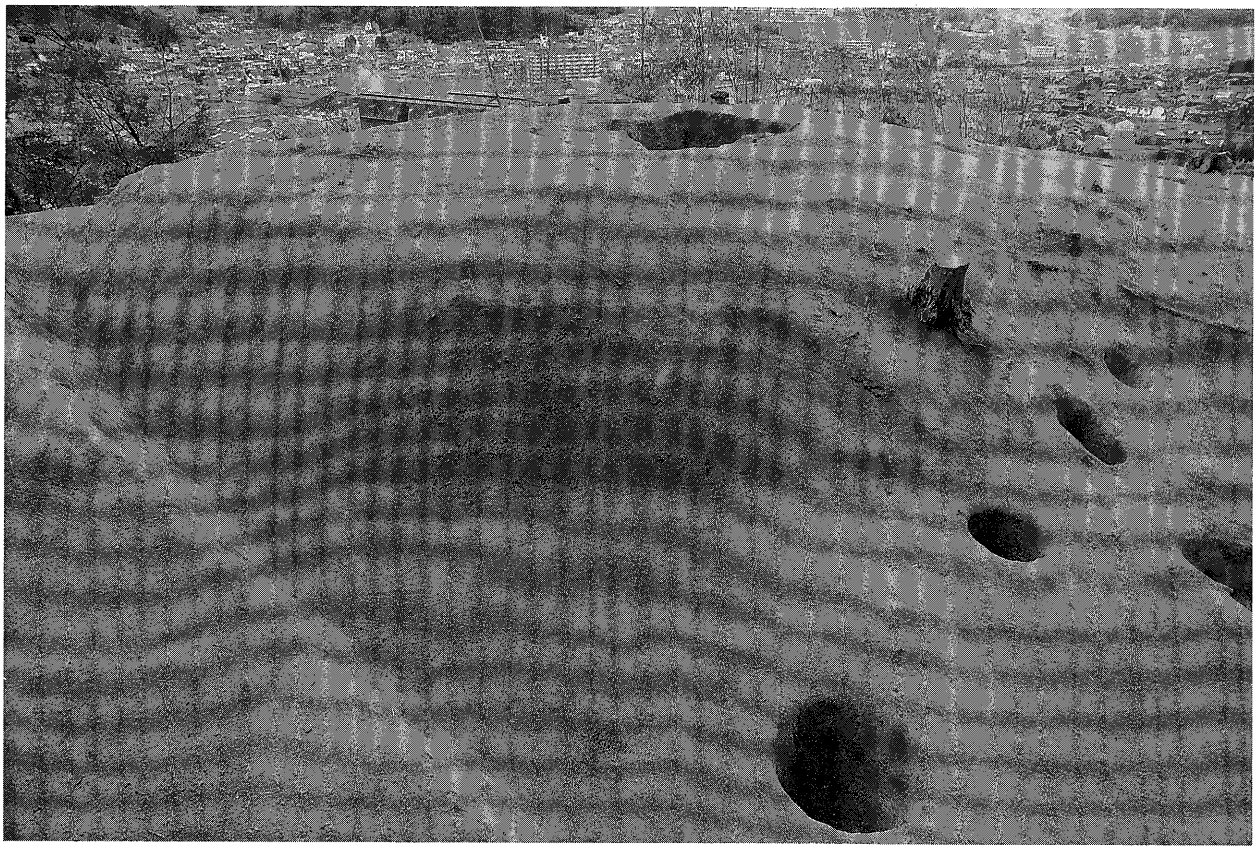


a　第 2 号古墳埋葬主体人骨出土状況（北西から）

b　第 2 号古墳埋葬主体遺物出土状況（北西から）

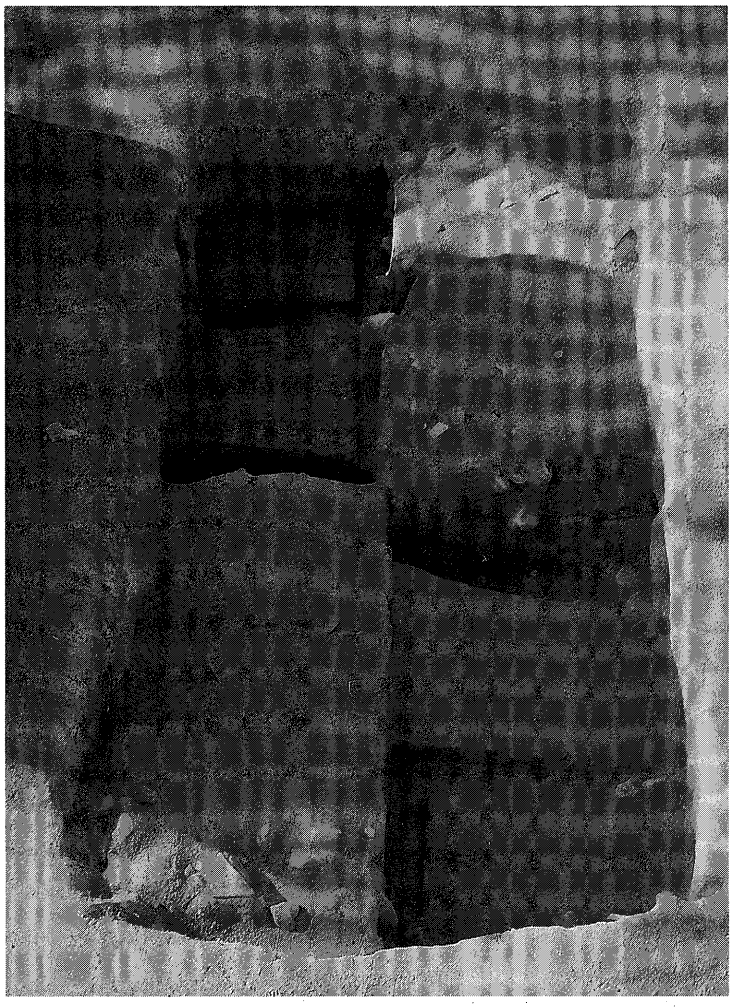


a　第 3 号古墳墳丘全景（東から）

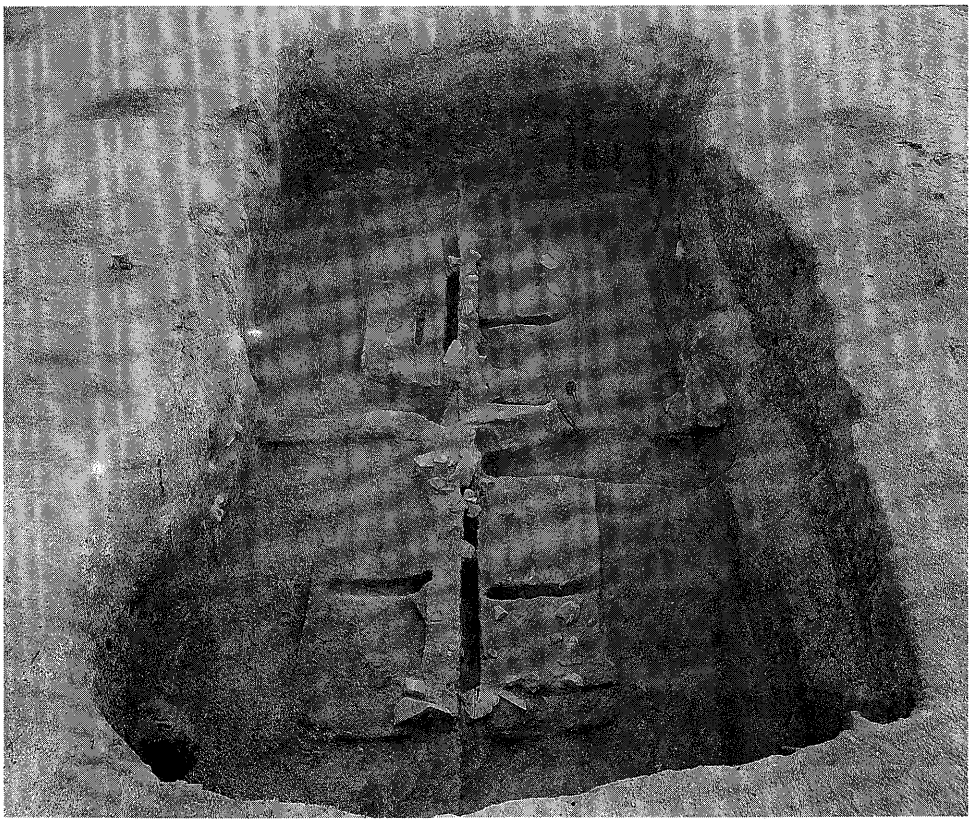


b　第 3 号古墳墳丘全景（南から）

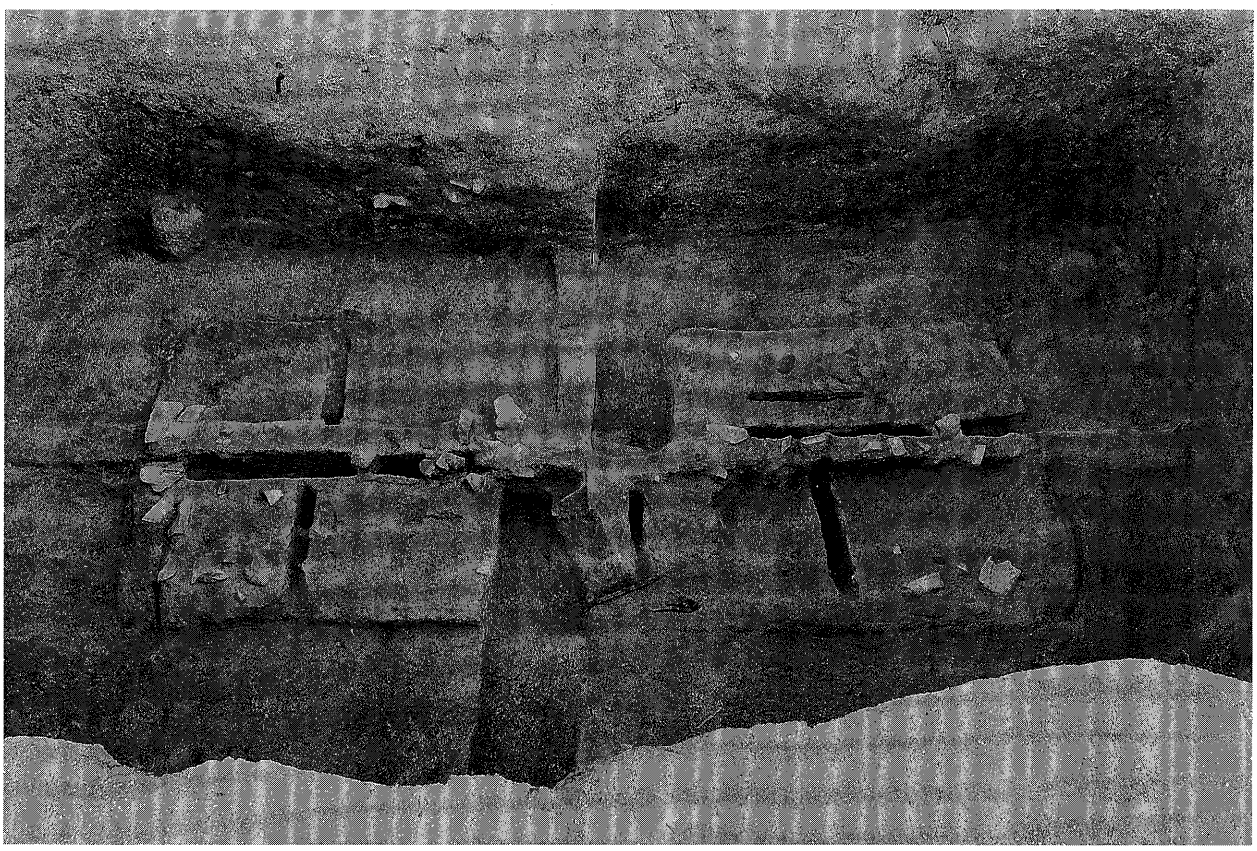
図版 8



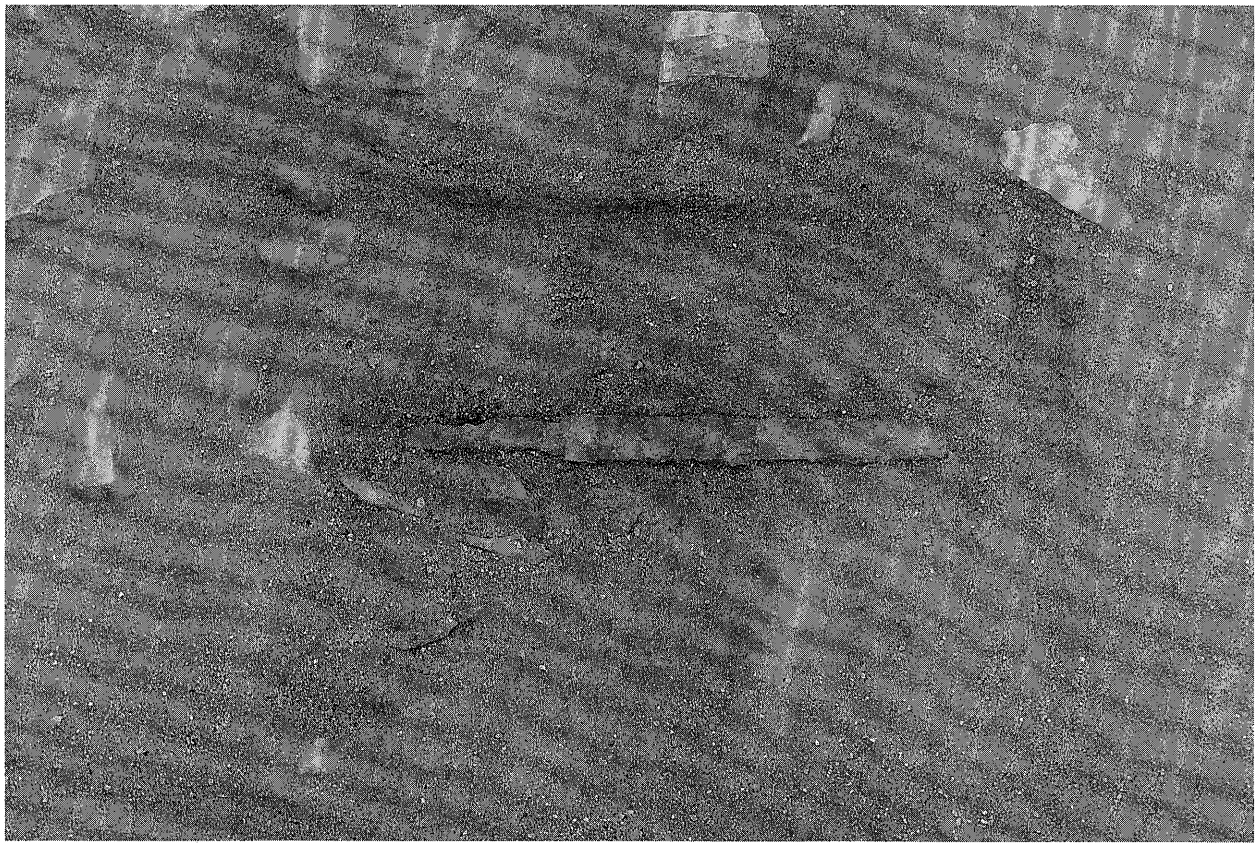
a　第 3 号古墳第 1 主体木棺痕跡
検出状況（北東から）



b　第 3 号古墳第 1
主体棺台土及び
遺物出土状況
（北東から）



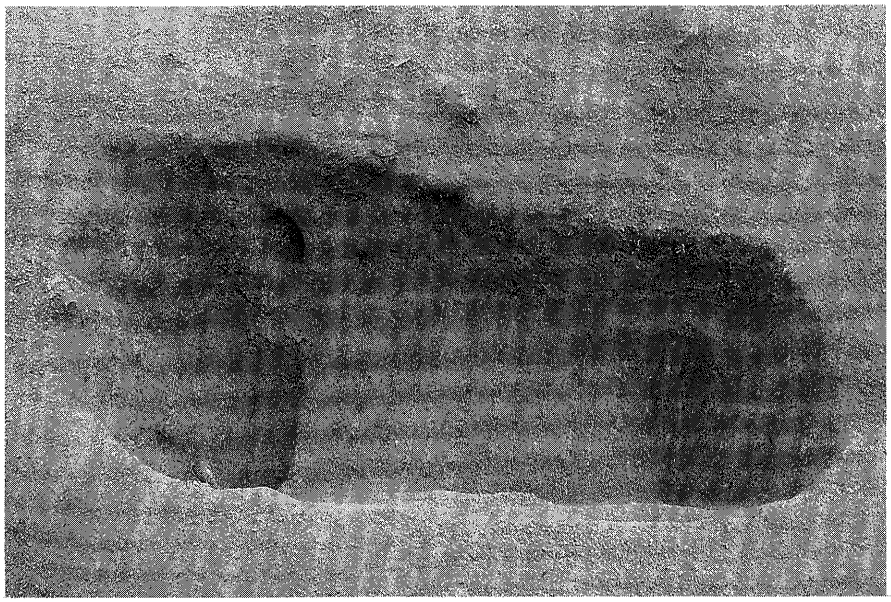
a　第 3 号古墳第 1 主体棺台土及び遺物出土状況（北西から）



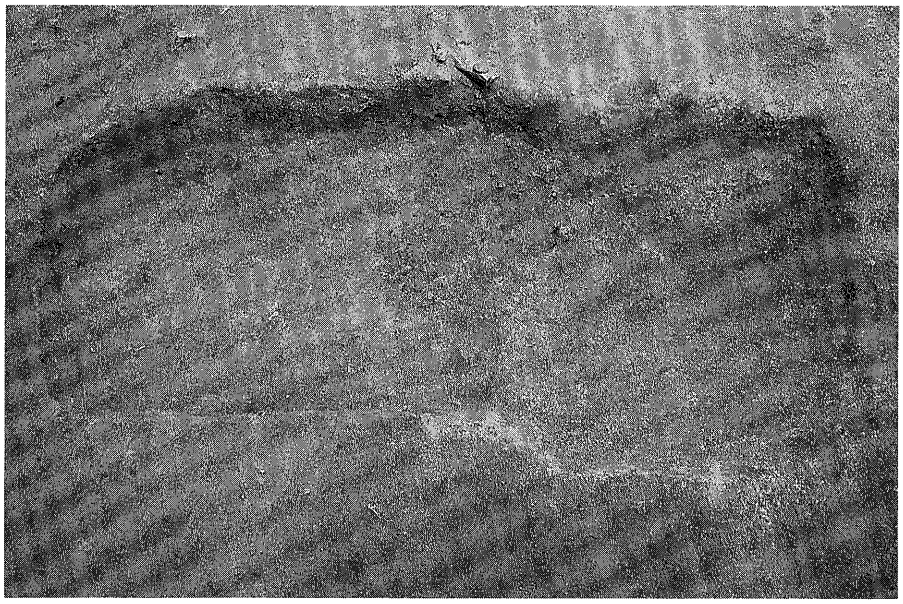
b　第 3 号古墳第 1 主体鉄剣等出土状況（南東から）

図版10

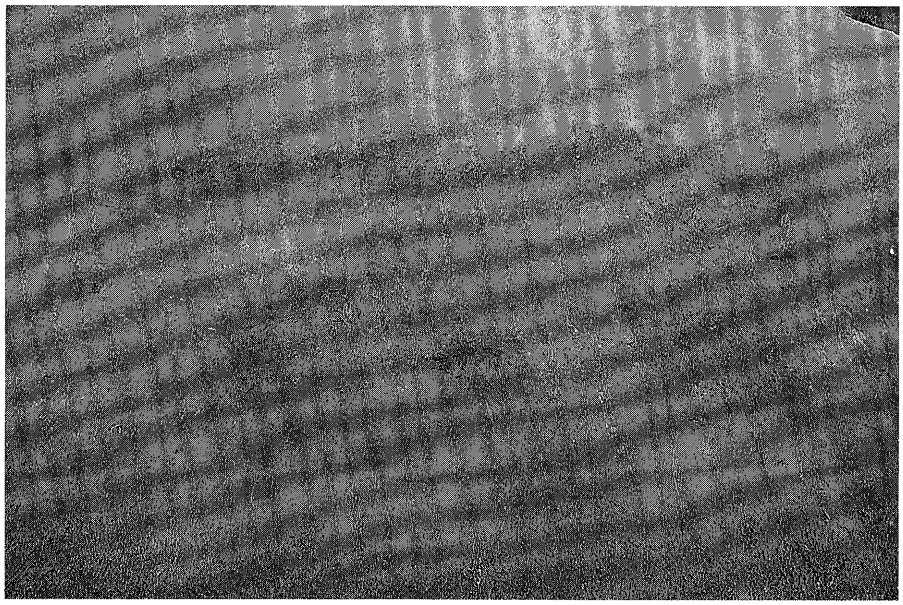
a　第３号古墳第１主体完掘後（北東から）



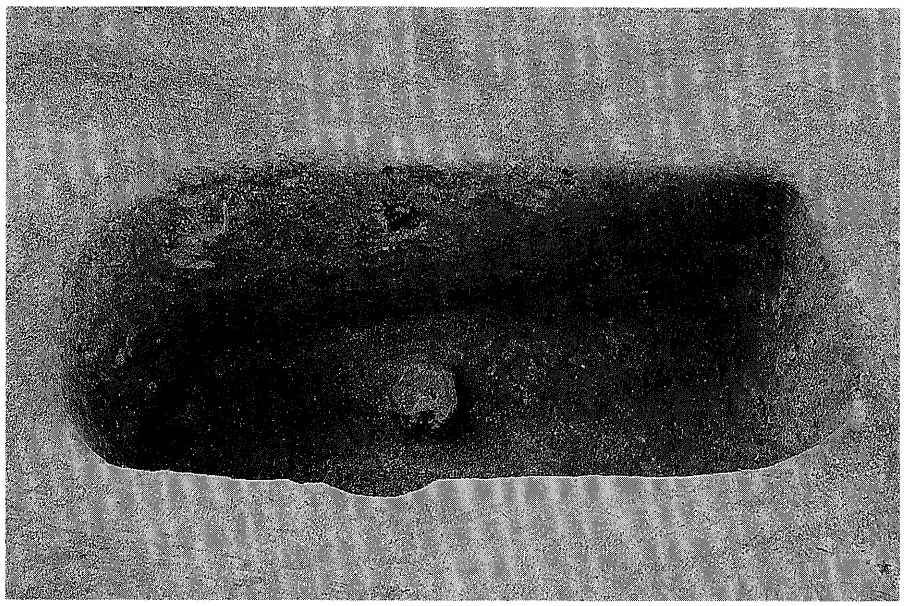
b　第３号古墳第２主体
（南から）



a　第3号古墳第3主体
（南東から）

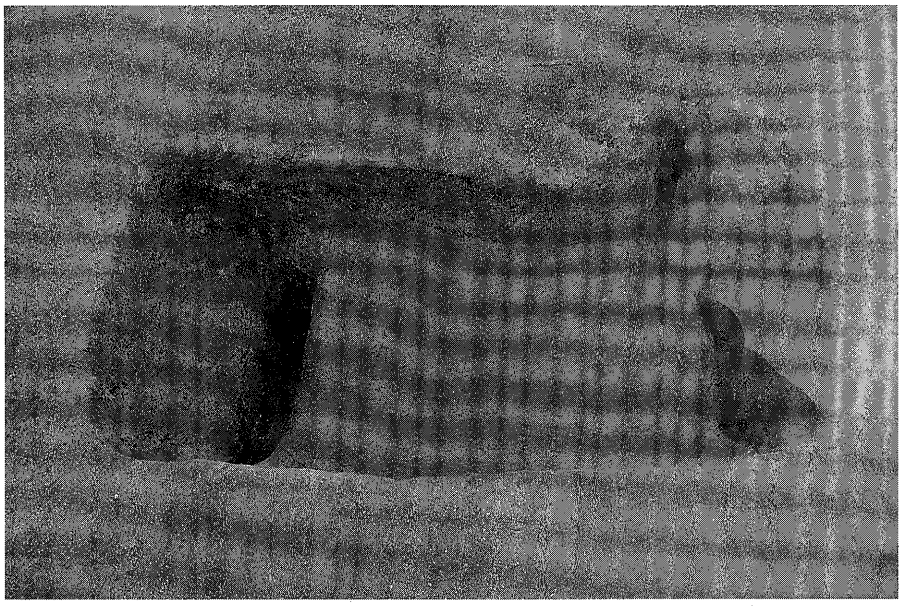


b　第3号古墳第4主体
（南東から）



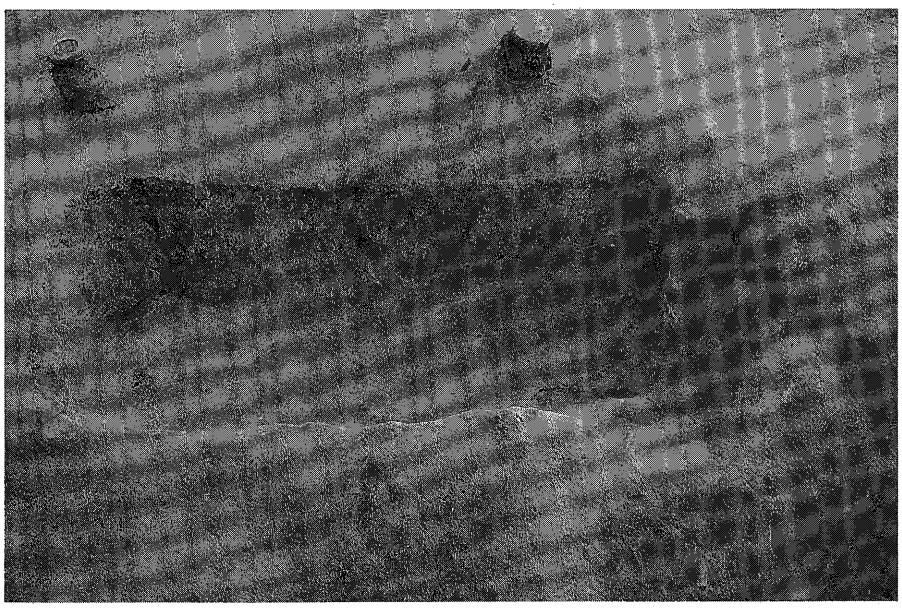
c　第3号古墳第5主体
（東から）

図版12

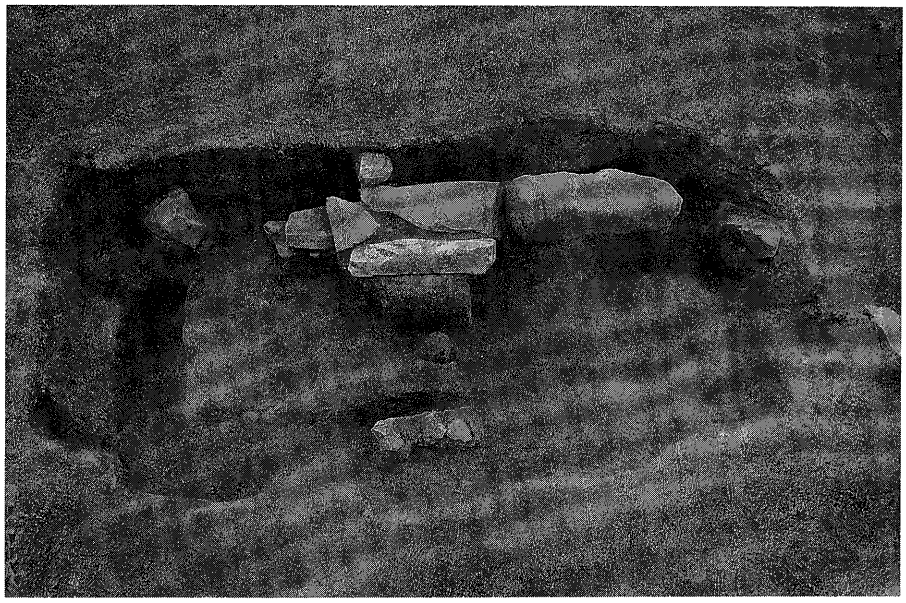


a　第３号古墳第６主体
（南東から）

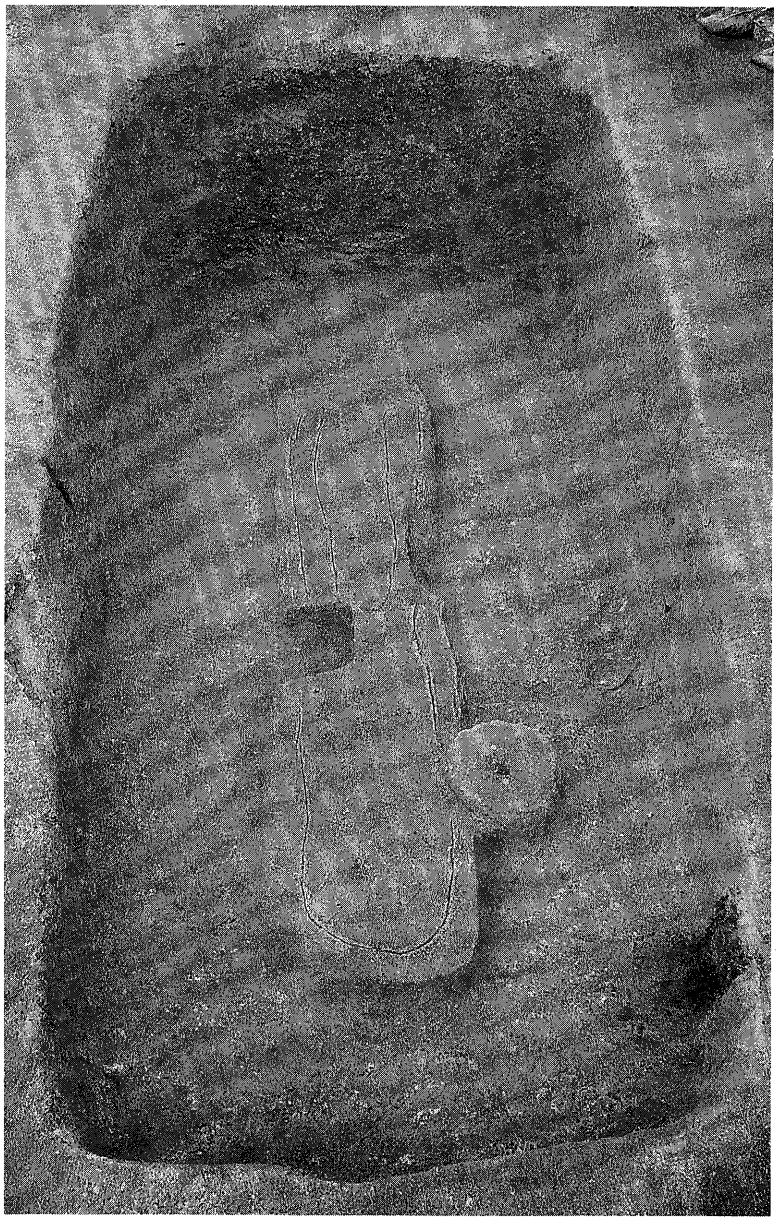
b　第３号古墳第７主体
（東から）



c　第３号古墳第８主体
（北東から）



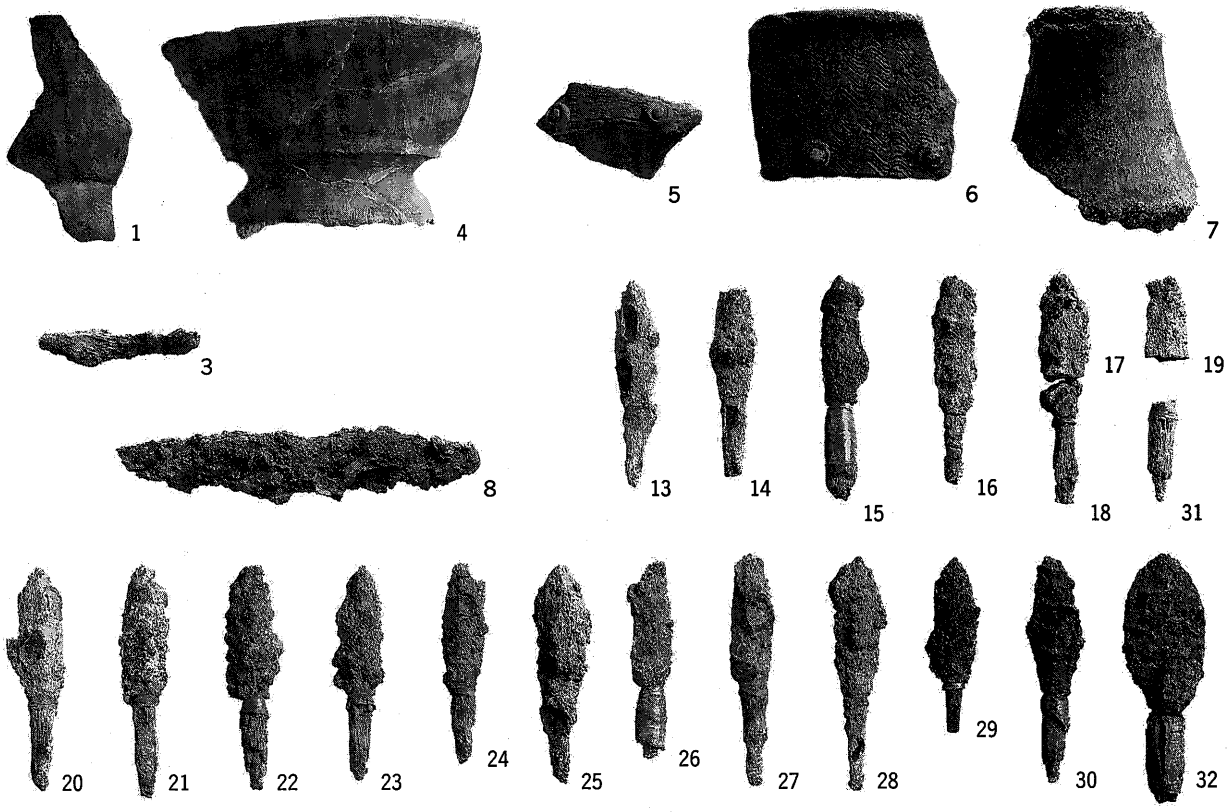
a　第３号古墳第９主体
（東から）



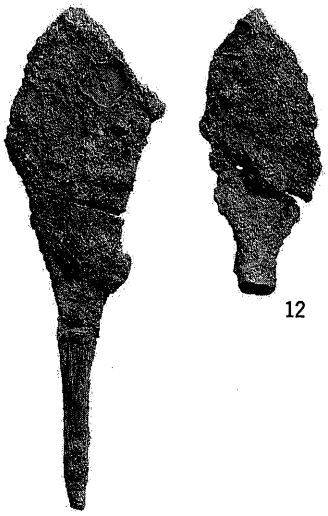
b　第３号古墳第10主体木棺痕跡
（北西から）

図版14

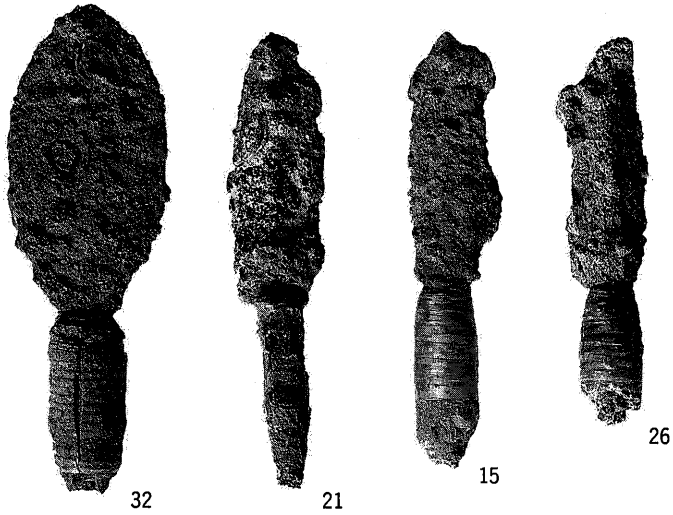
a　第３号古墳第10主体完掘後
（北西から）



b　古墳遺構出土遺物(1)



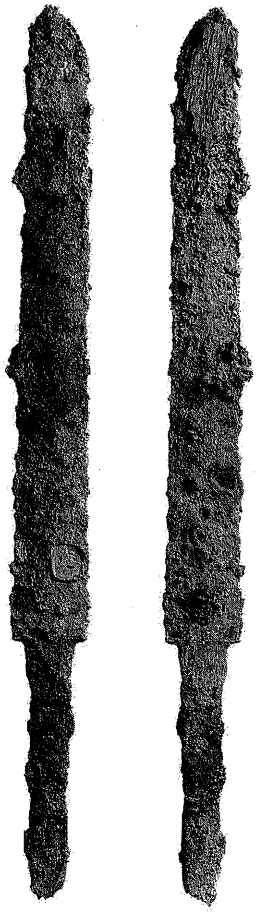
11　12



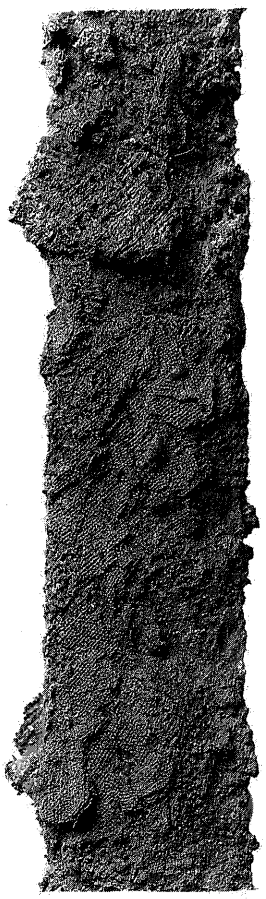
32　21　15　26

木質残存鉄鏃拡大写真

10



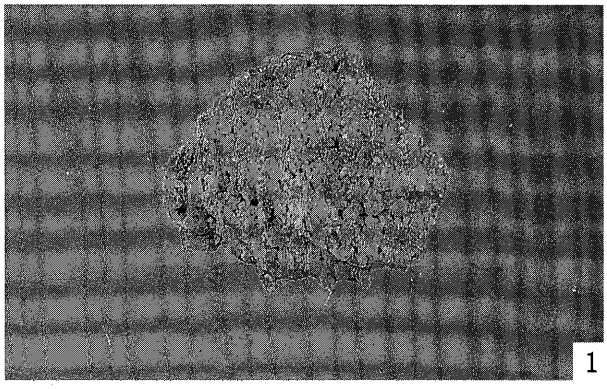
9

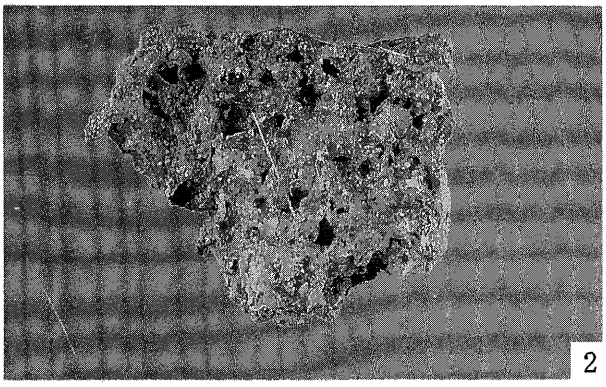


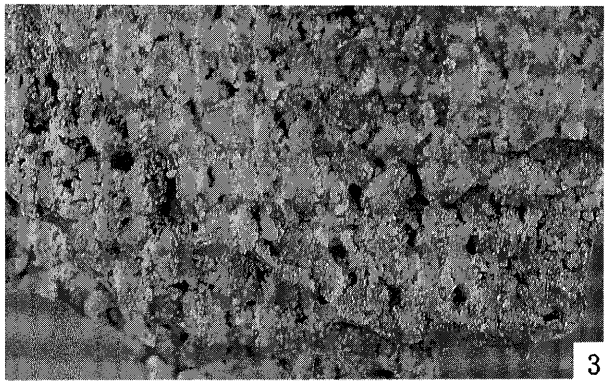
鉄剣布目拡大写真

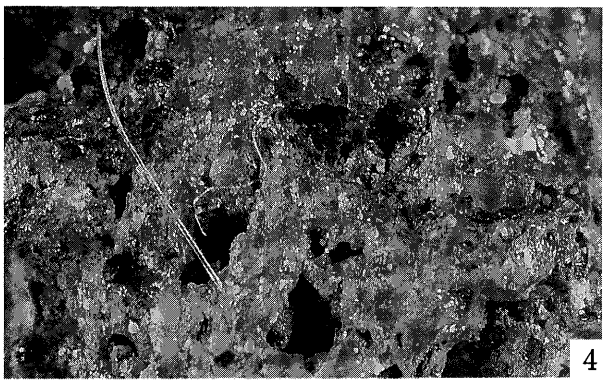
古墳遺構出土遺物(2)

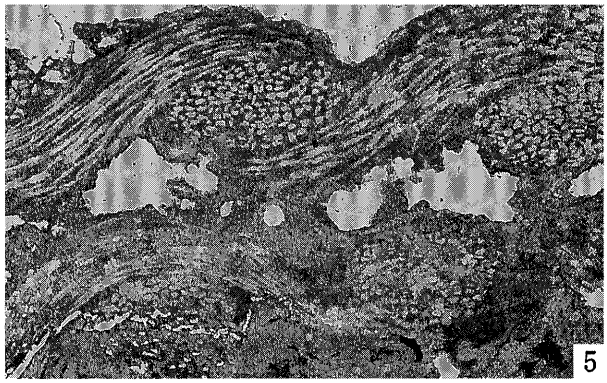
図版16

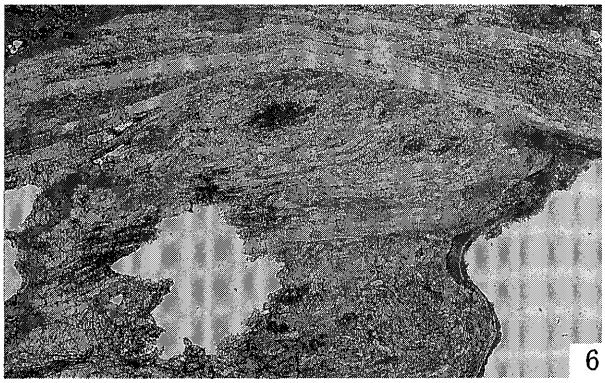


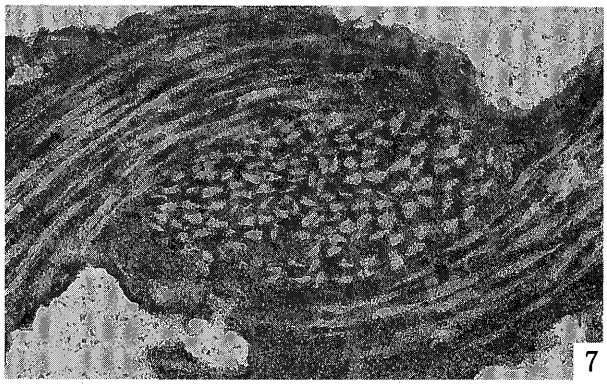


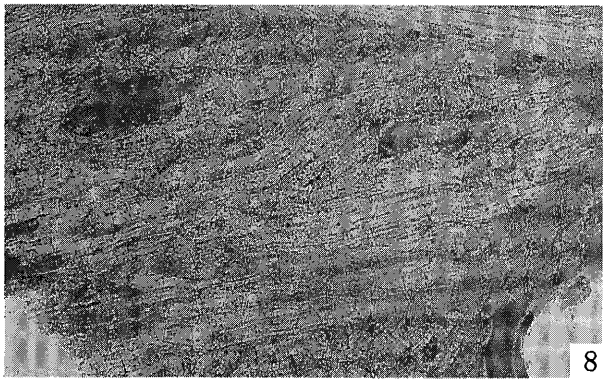








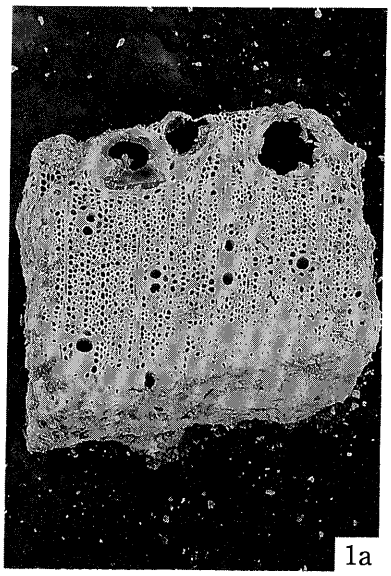


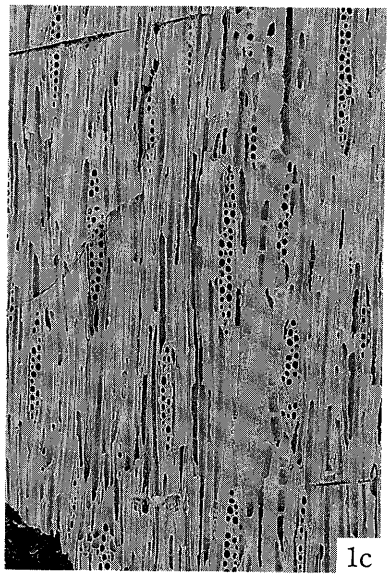


1. 布片（細）
2. 布片（粗）
3. 布片（細）
4. 布片（粗）
5. 布片（細）の断面
6. 布片（粗）の断面
7. 布片（細）の断面
8. 布片（粗）の断面

5mm：1-2
2mm：3-4
200μm：5-6
100μm：7-8

鉄剣付着布片顕微鏡写真





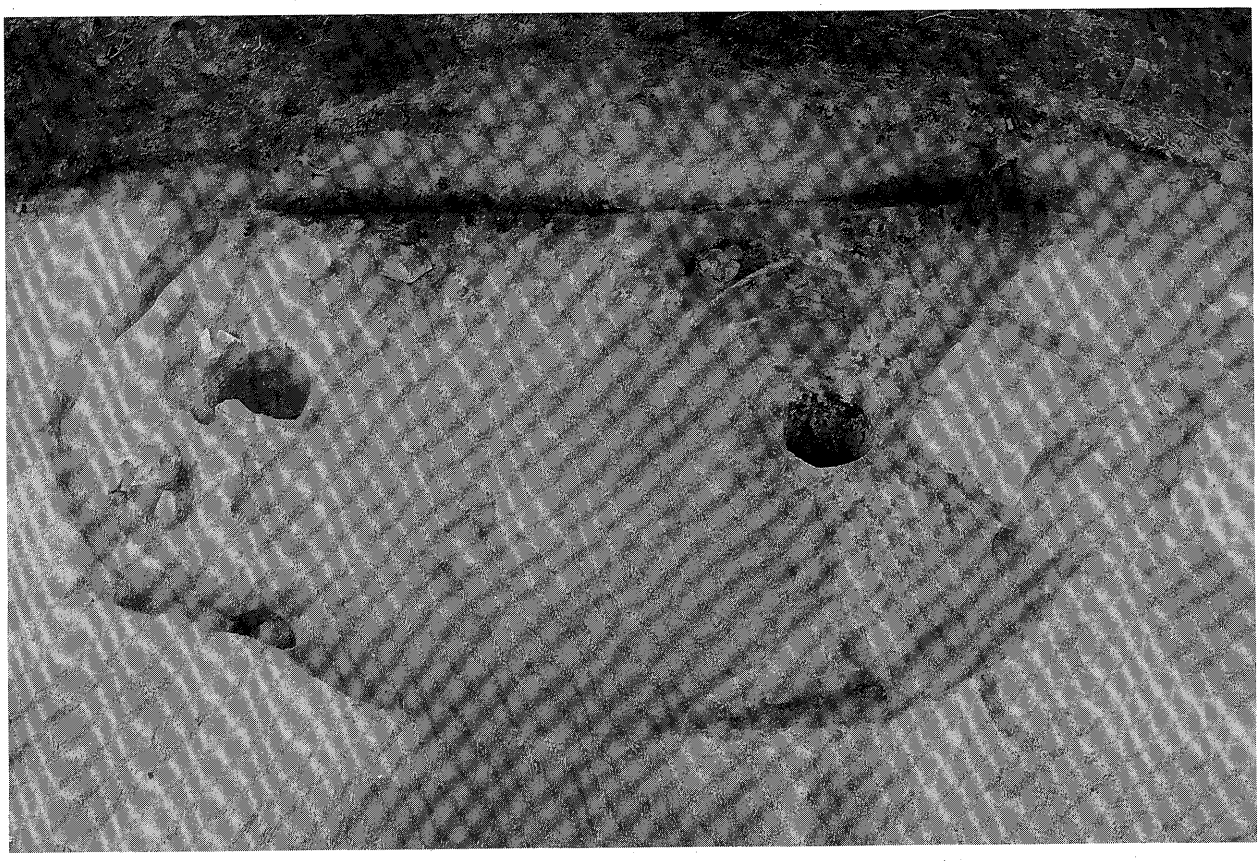
1. トネリコ属（剣の柄材(表)）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

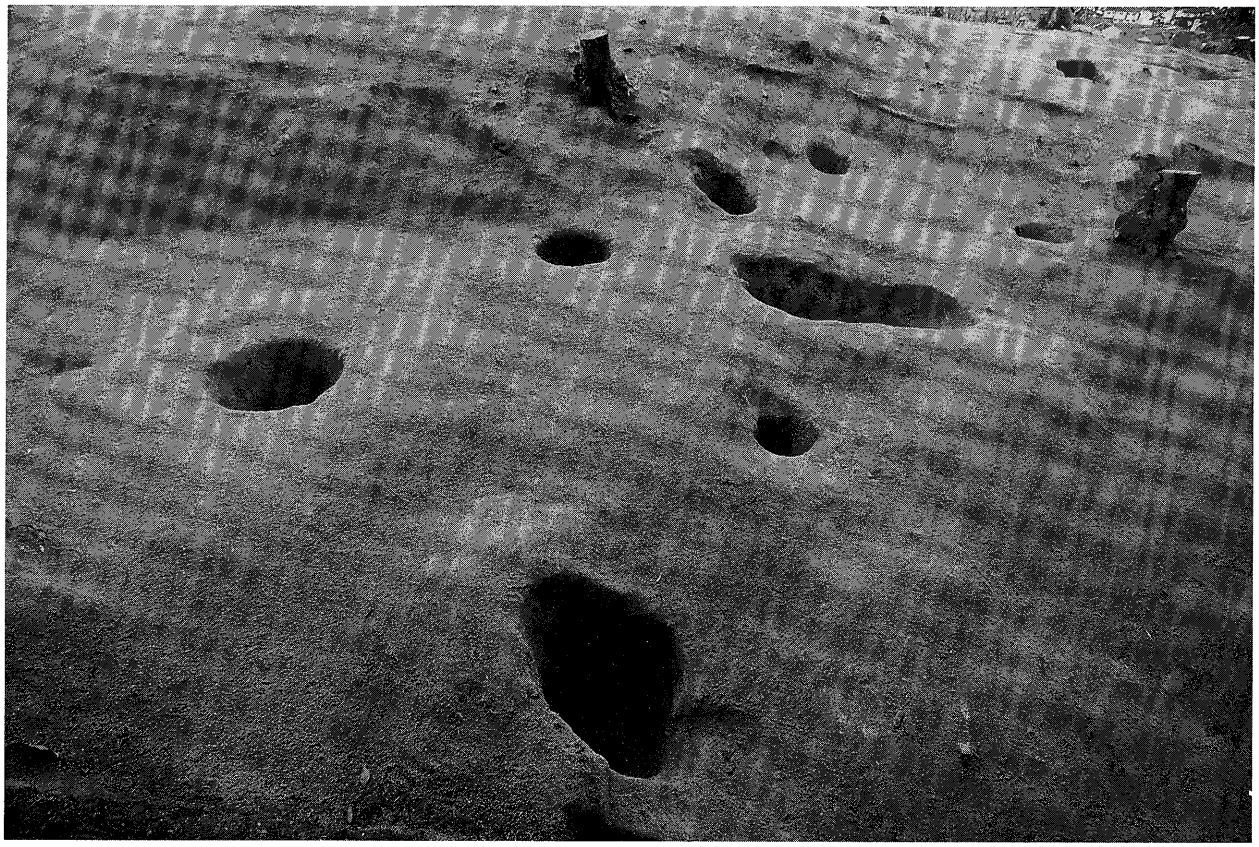
鉄剣付着木材顕微鏡写真

図版18

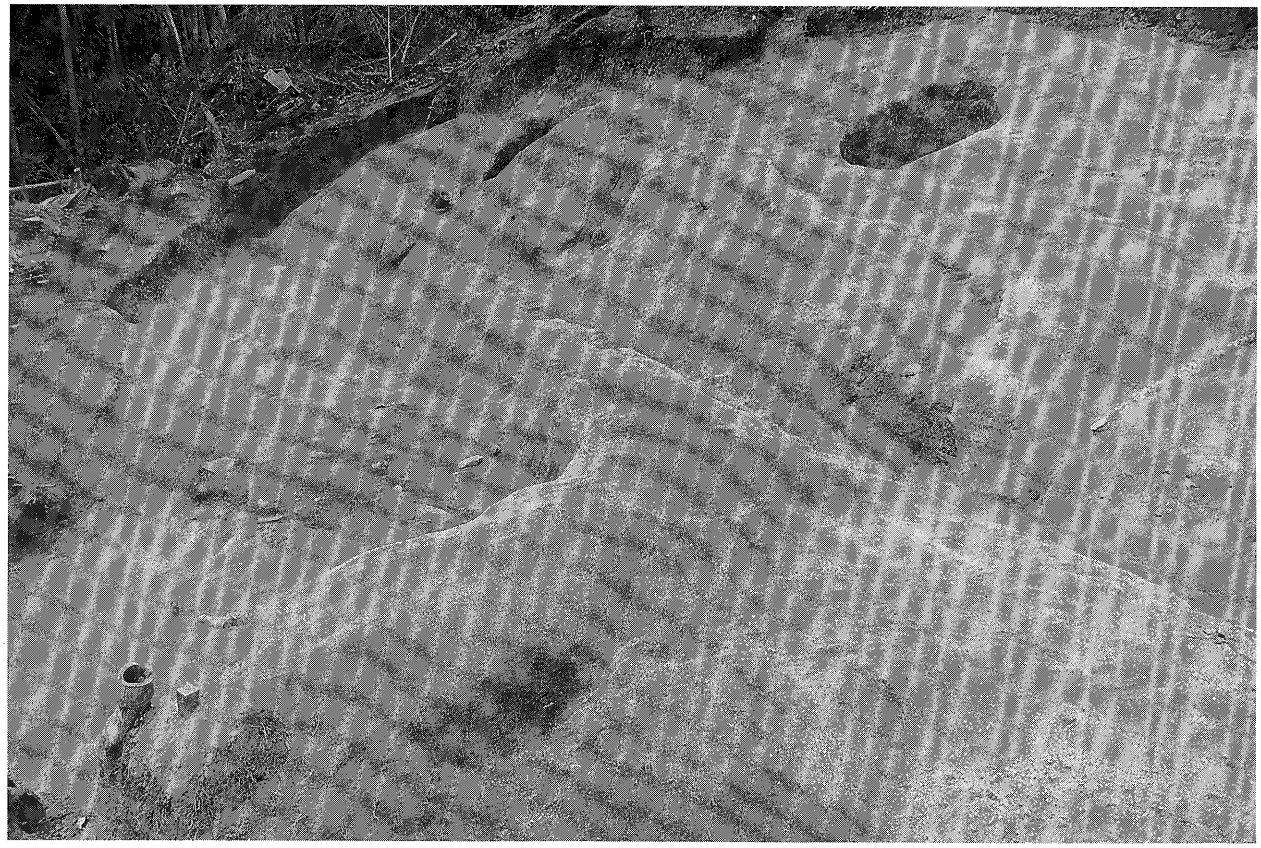
a　SH1 炭化材出土状況（北から）



b　SH1（北から）

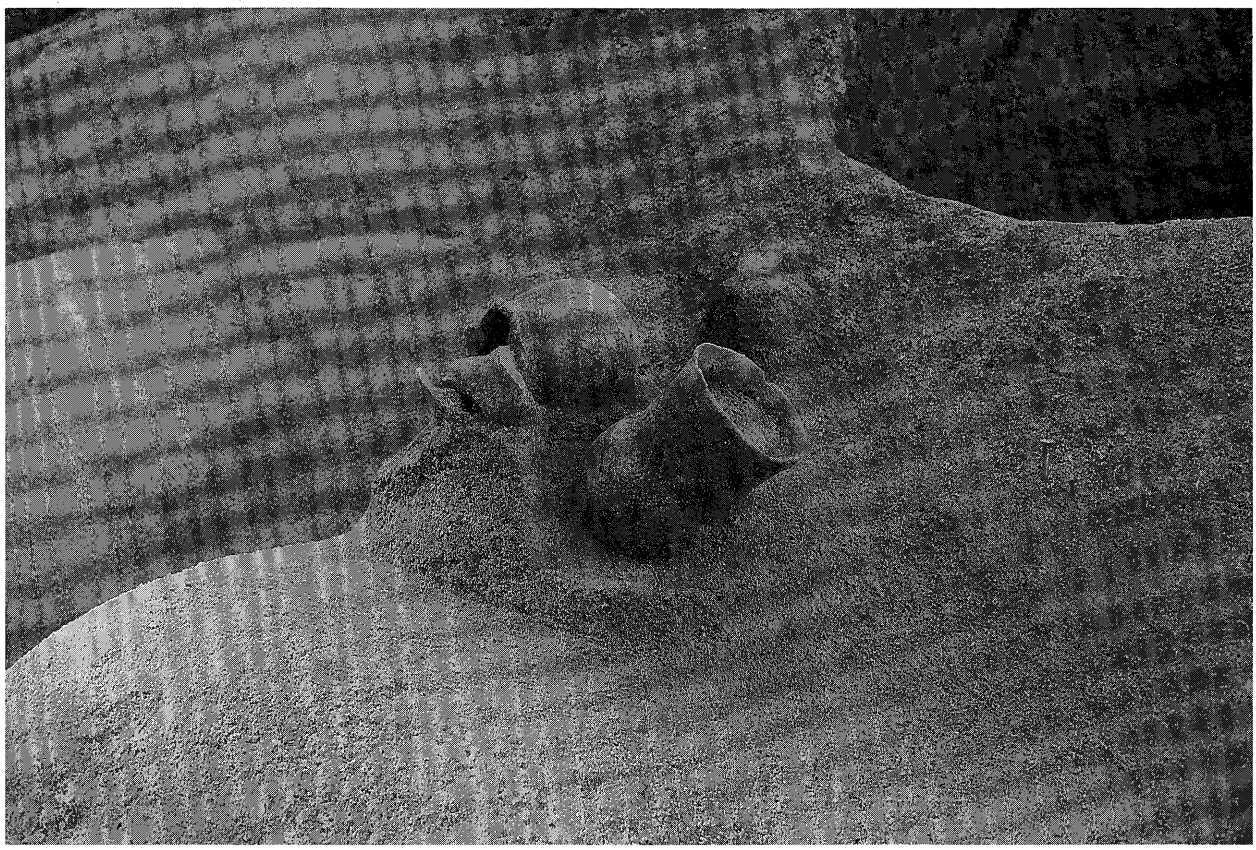


a　SB1（南から）

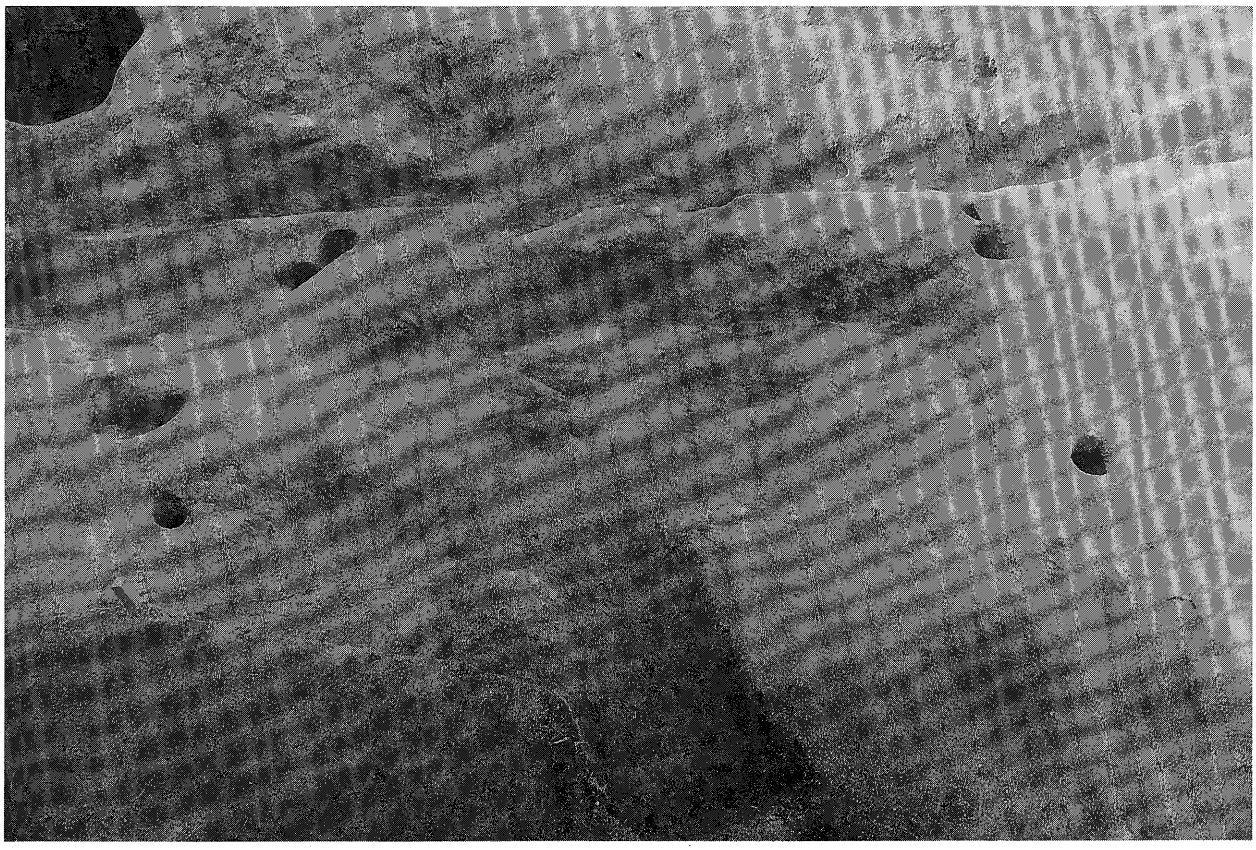


b　SX1（北東から）

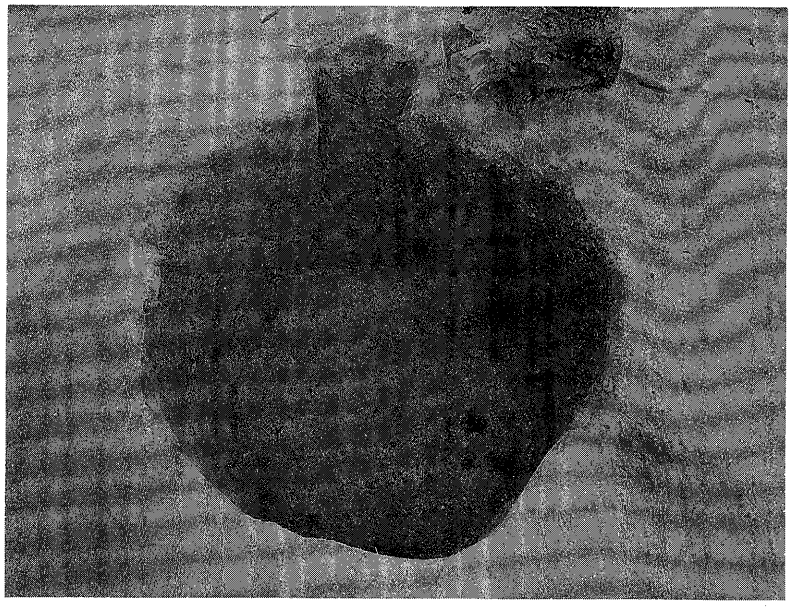
図版20



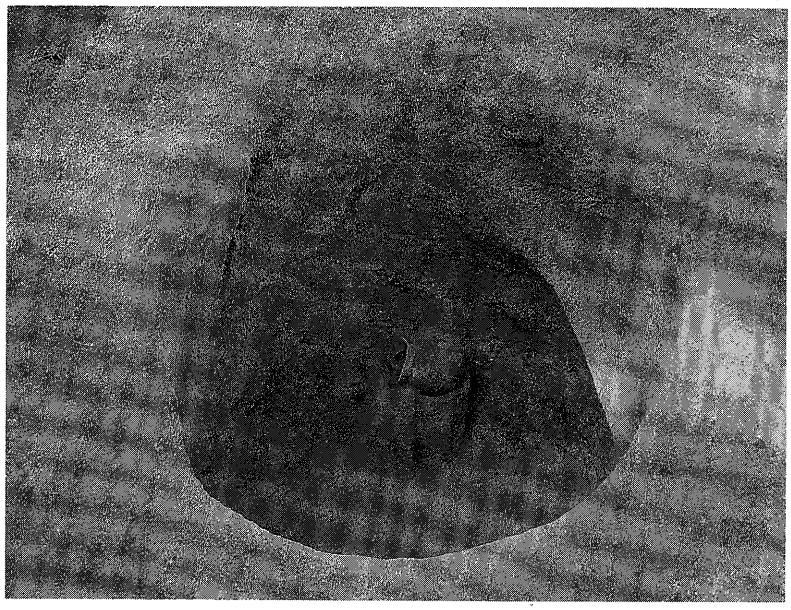
a　SX1 土器出土状況（南東から）



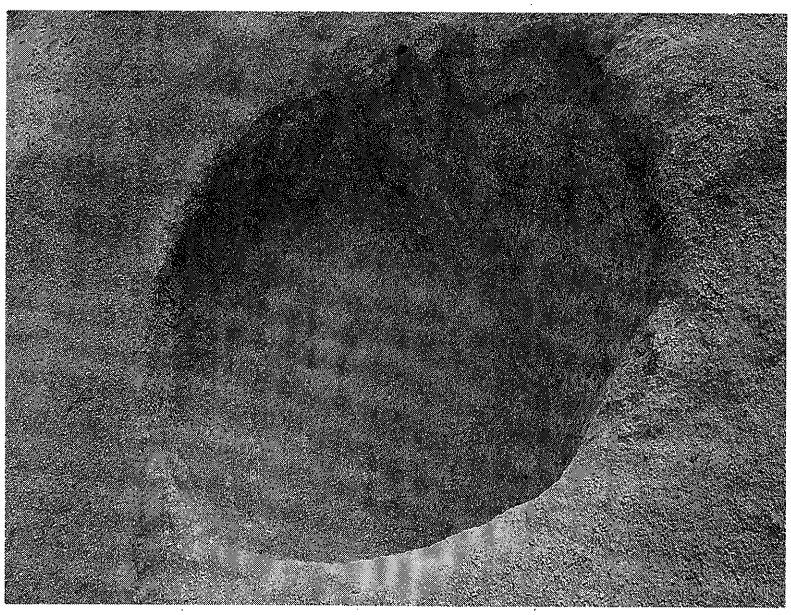
b　SH2（南東から）



a　SK1（北東から）



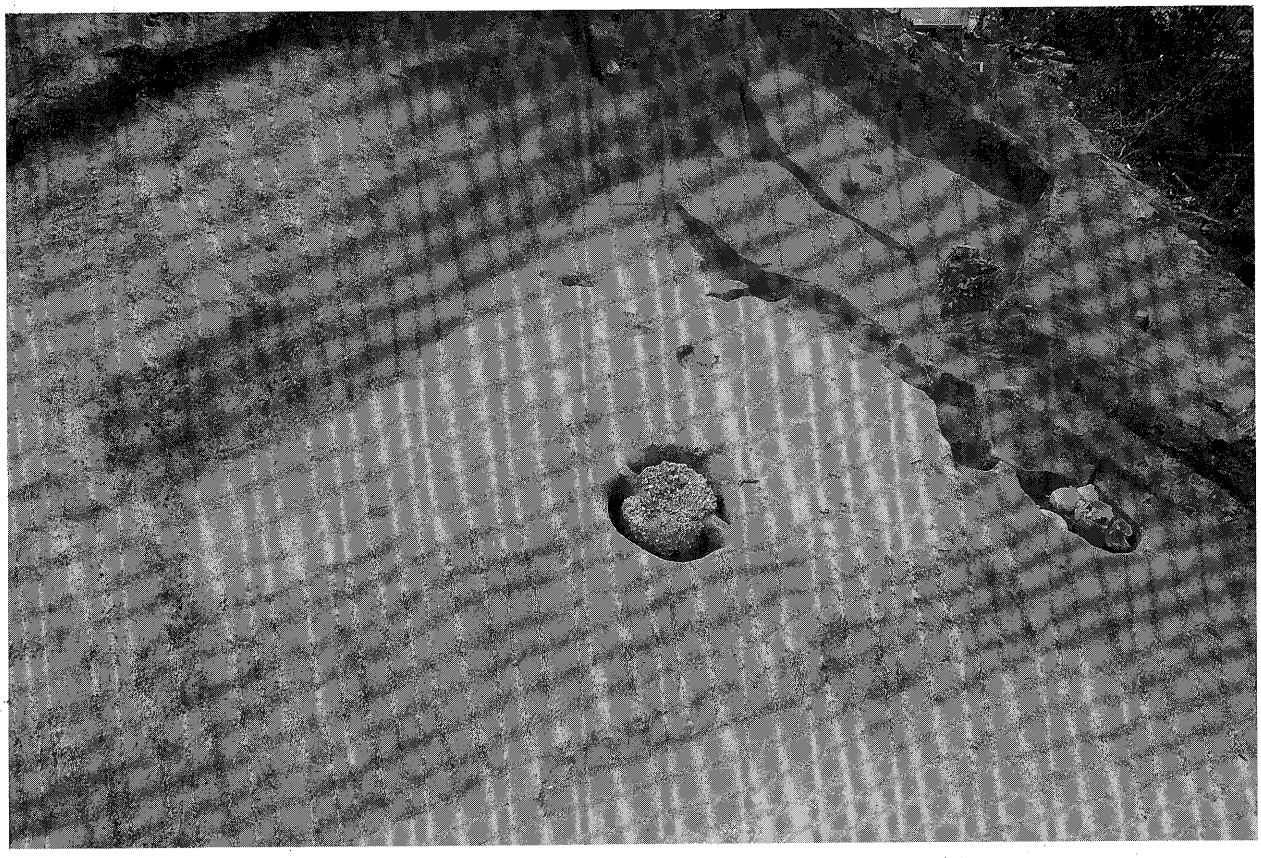
b　SK2（東から）



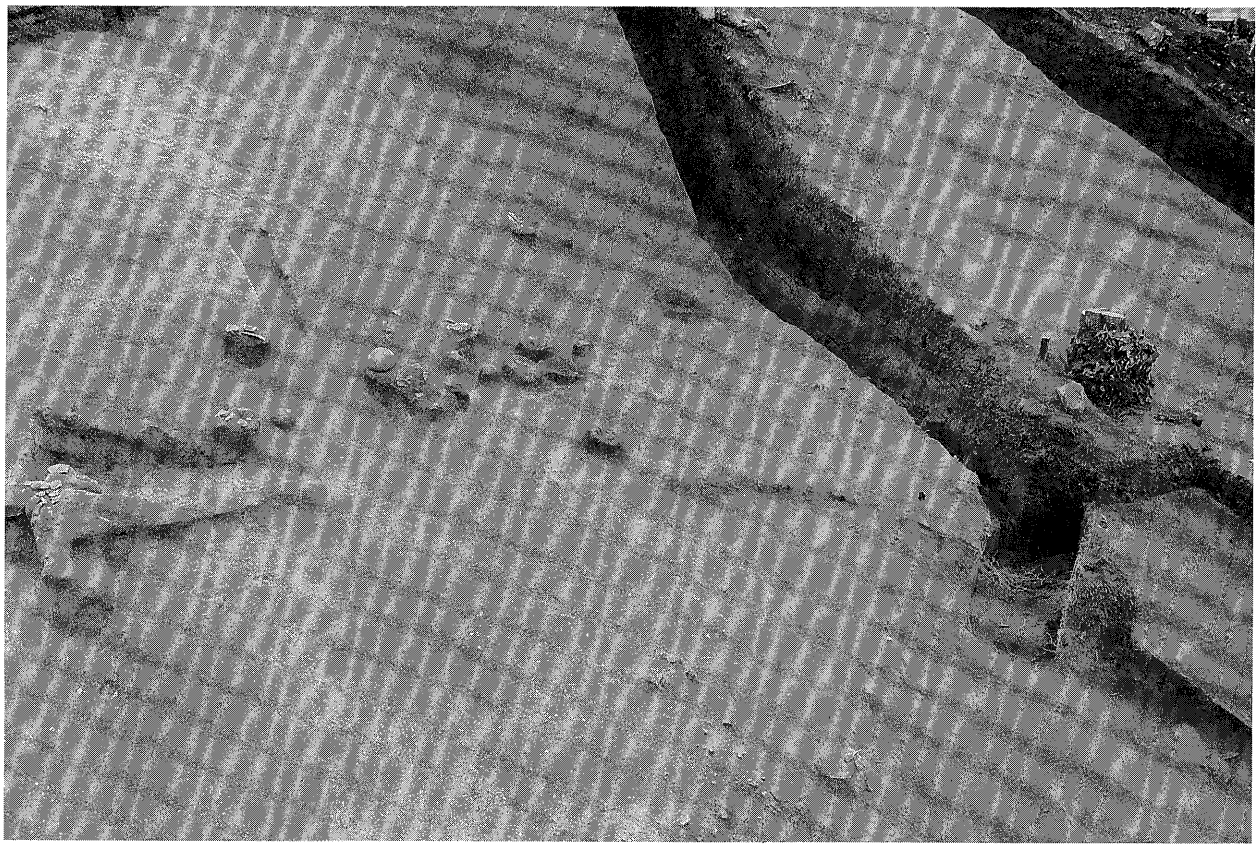
c　SK3（東から）

図版22

a　SH3（北から）



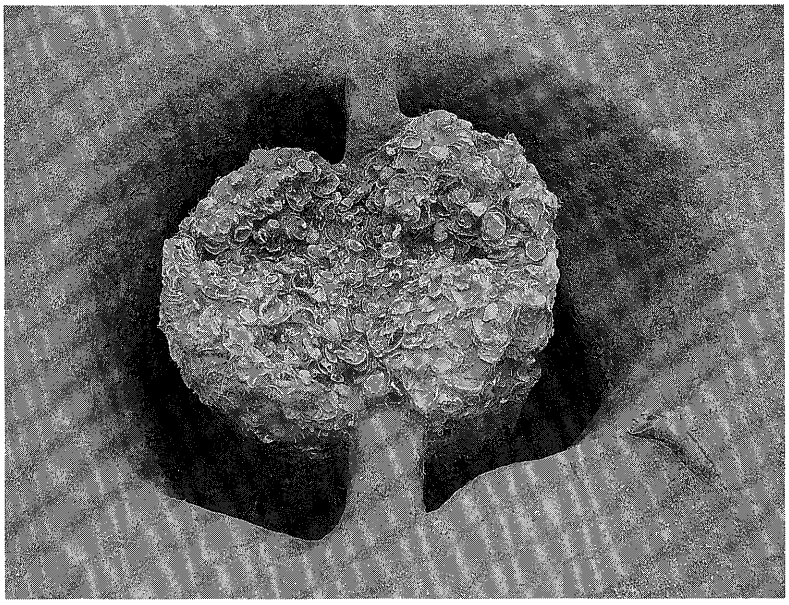
b　SX2（東から）



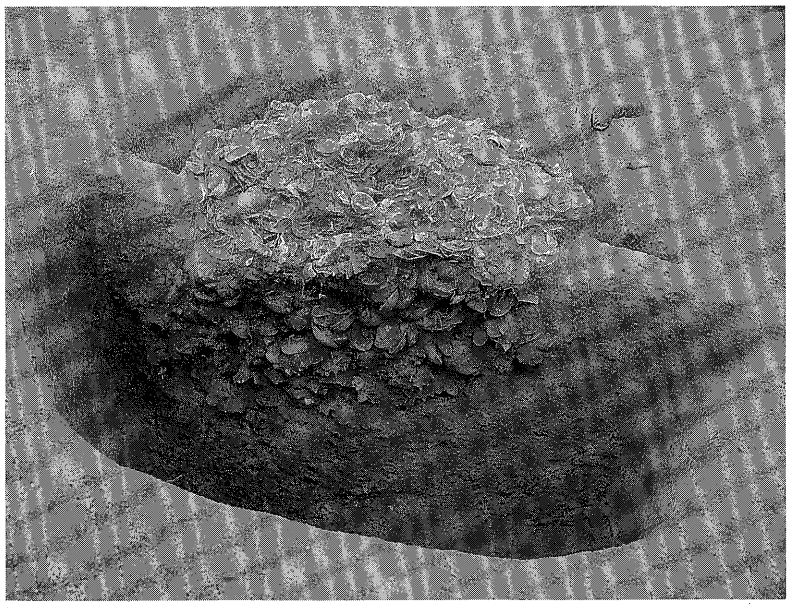
a　SX2 土器だまり（東から）

b　SX3（北から）

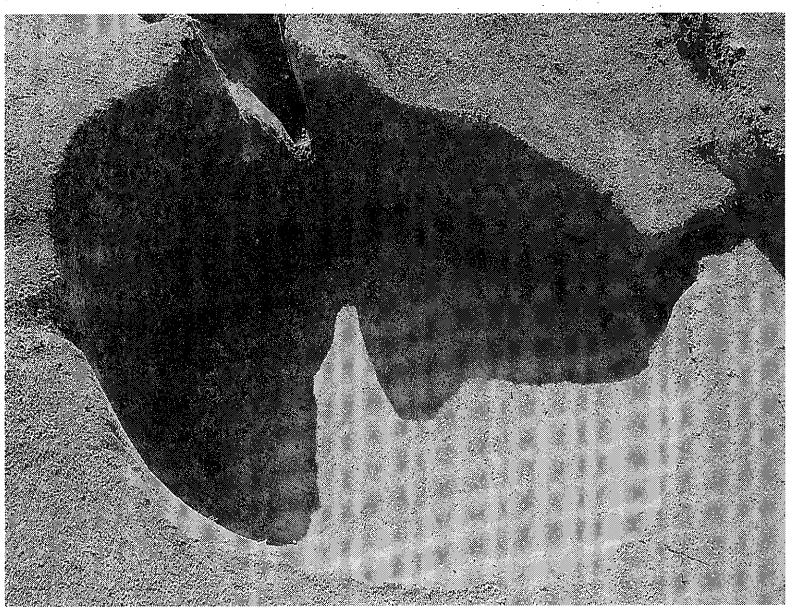
図版24



a　SK4（北東から）



b　SK4 貝層出土状況
（東から）



c　SK5（北東から）

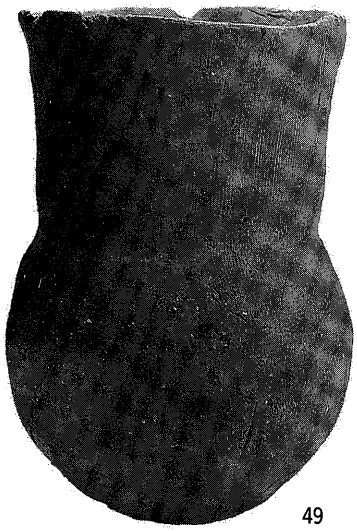
40

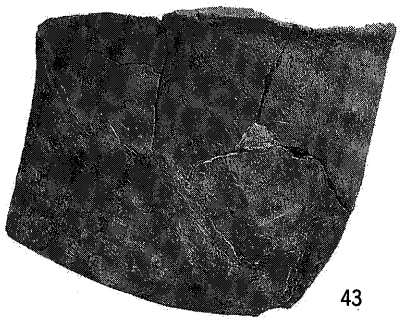
39

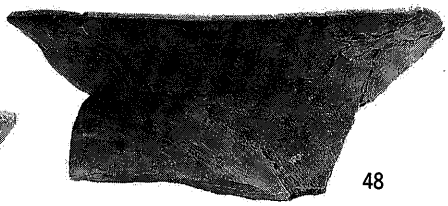
42

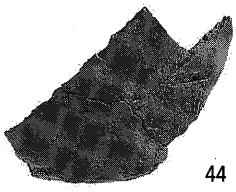
45

41


49


43

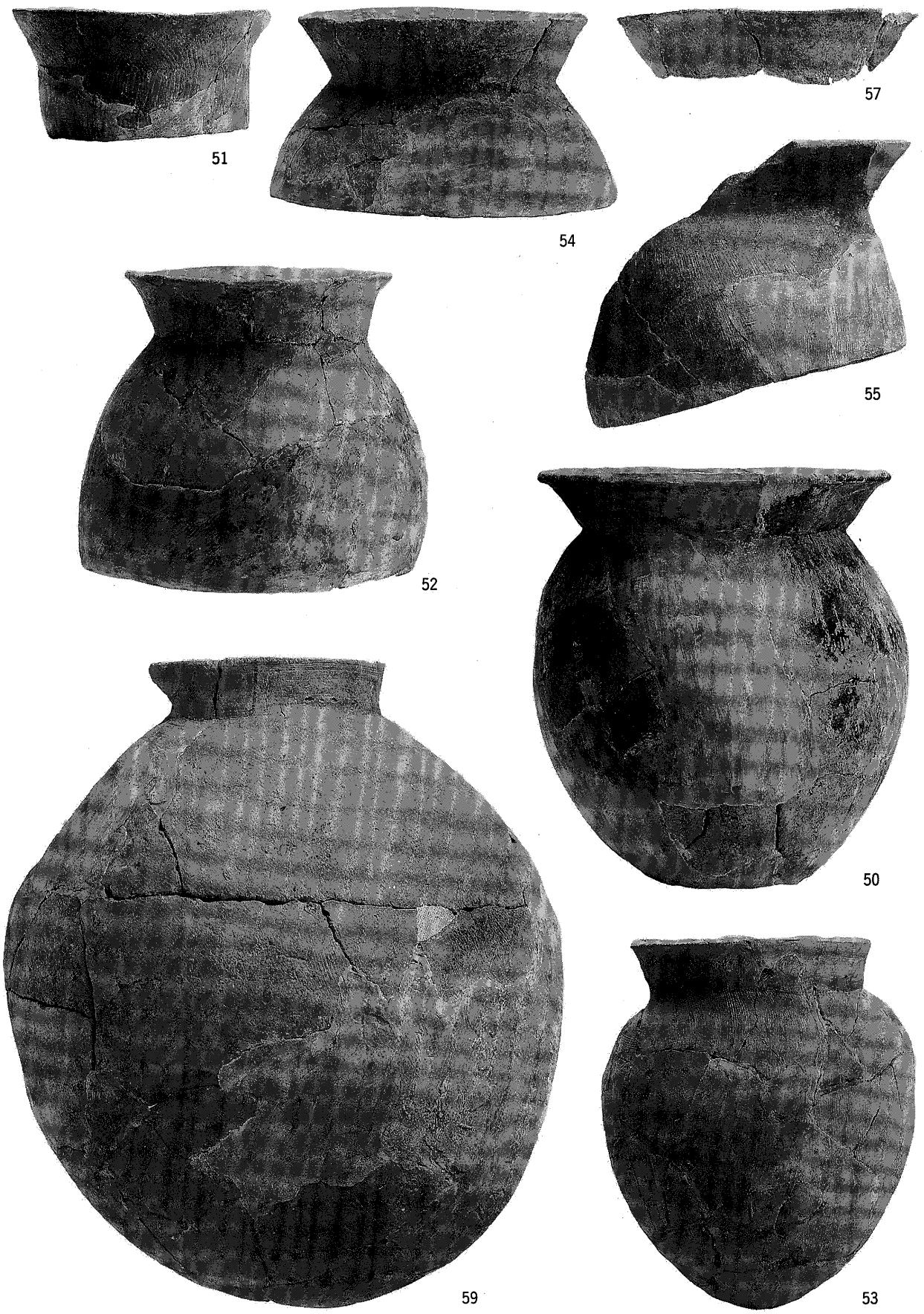

48


44

46

47

その他の遺構出土遺物(1)

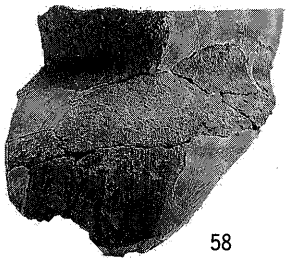


その他の遺構出土遺物(2)

64

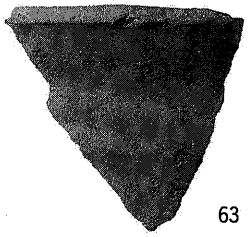
56

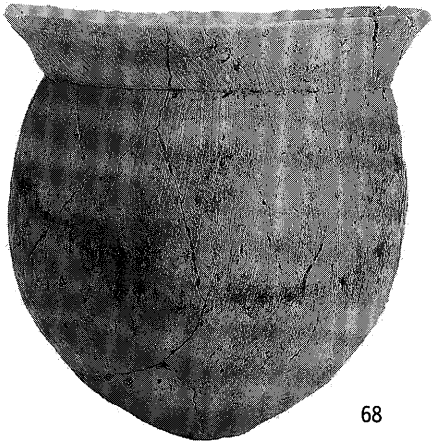
60


58

69

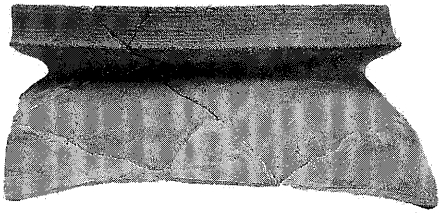
61


63


68

65

62


66

67

その他の遺構出土遺物(3)

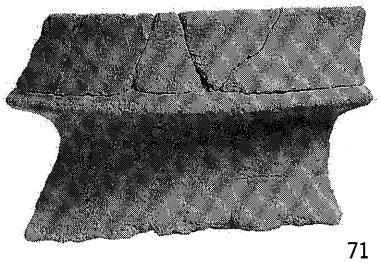
図版28

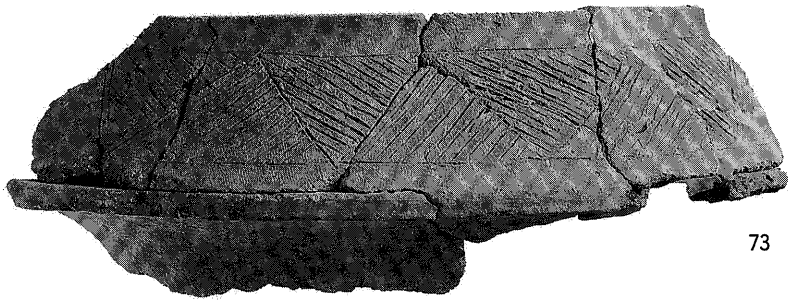
70

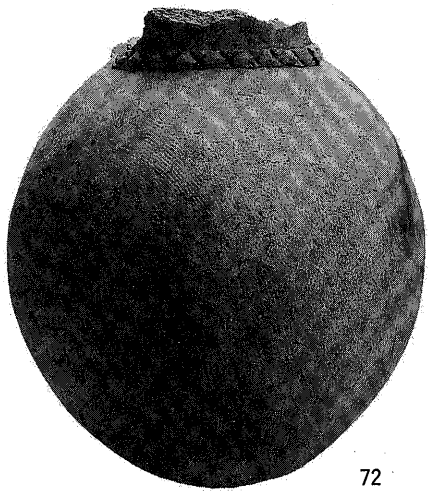
74

76

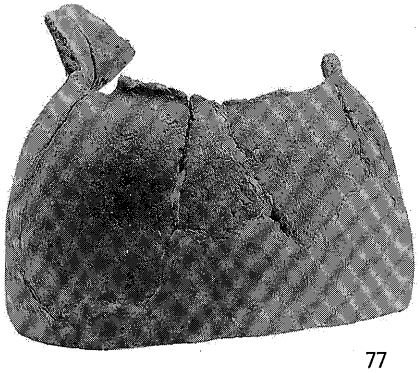
75


71

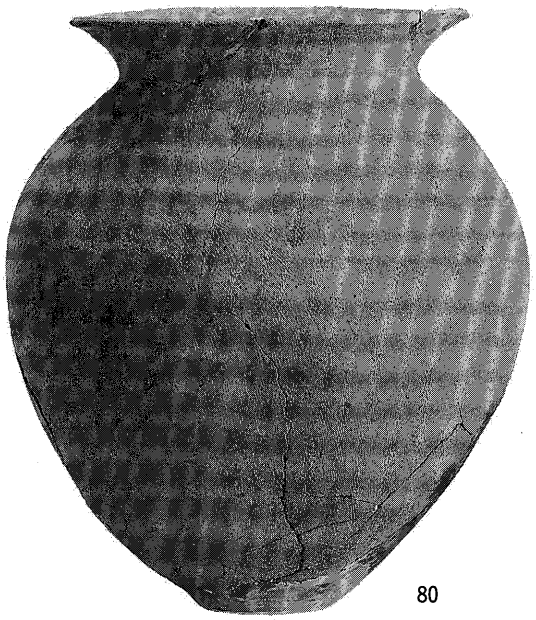

73


72

78

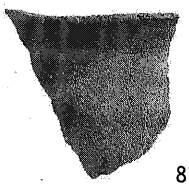

77

その他の遺構出土遺物(4)


80

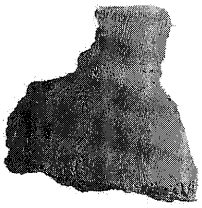
83

79


81

84

82


86

87

その他の遺構出土遺物(5)

85

88

91

89

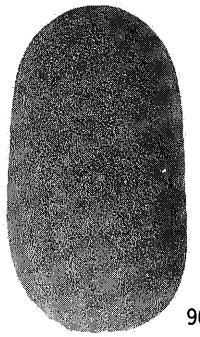
90

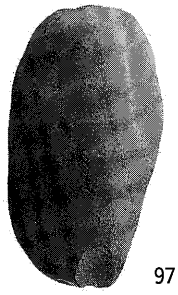
93

92

94

95

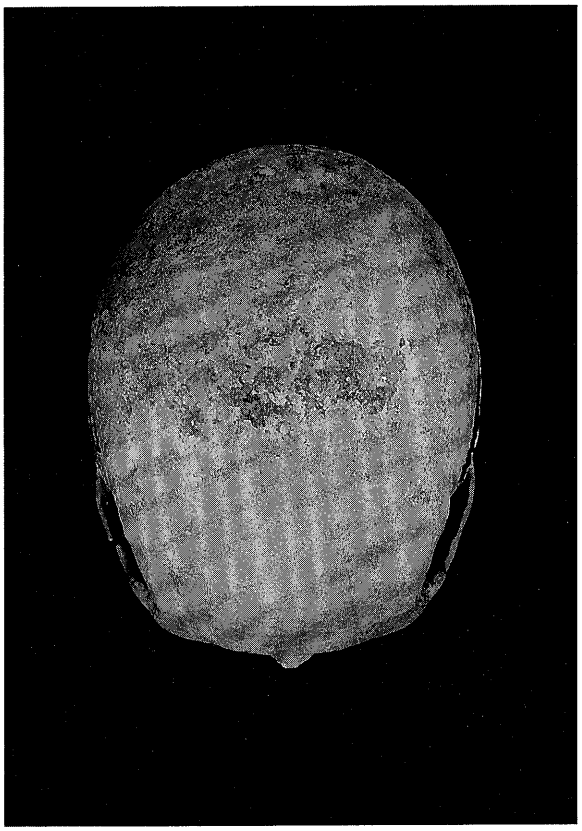

96


97

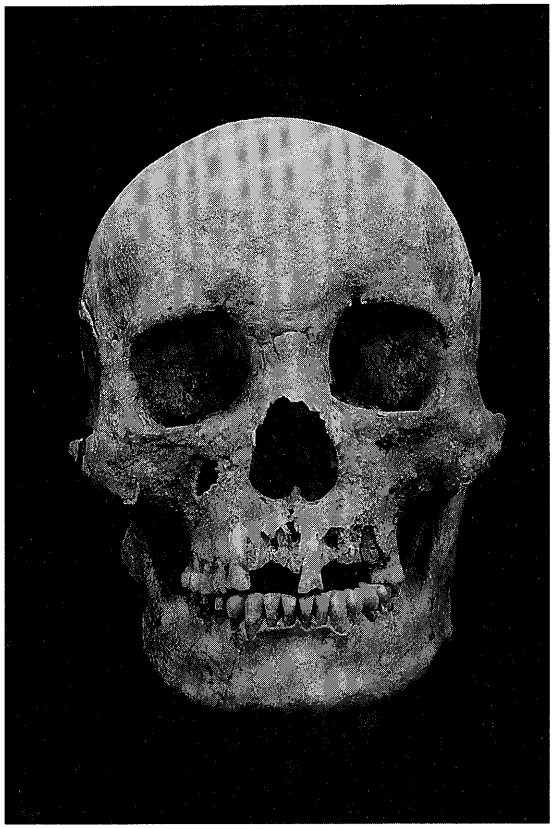
98

99

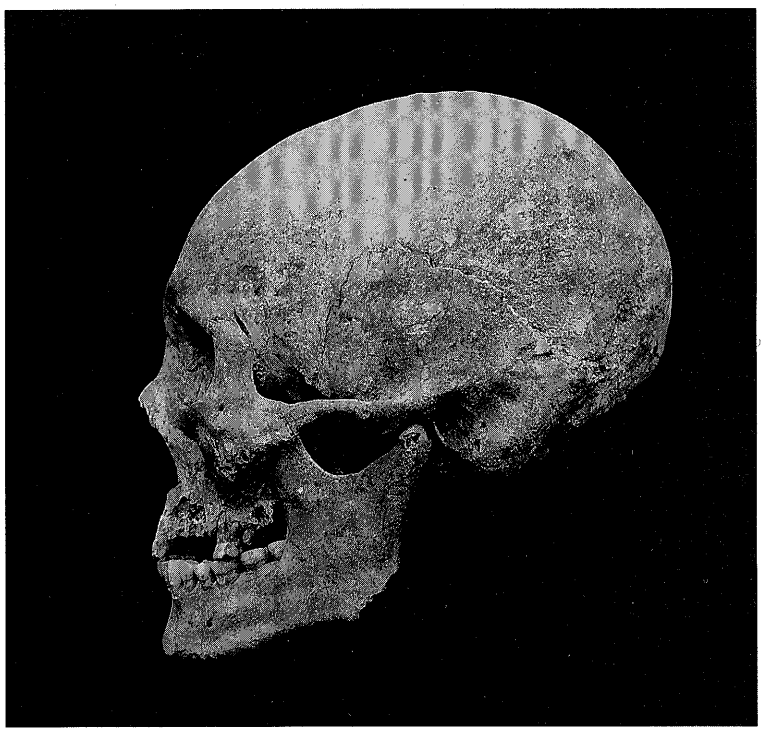
その他の遺構出土遺物(6)



頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋正面 (Frontal view of the skull)



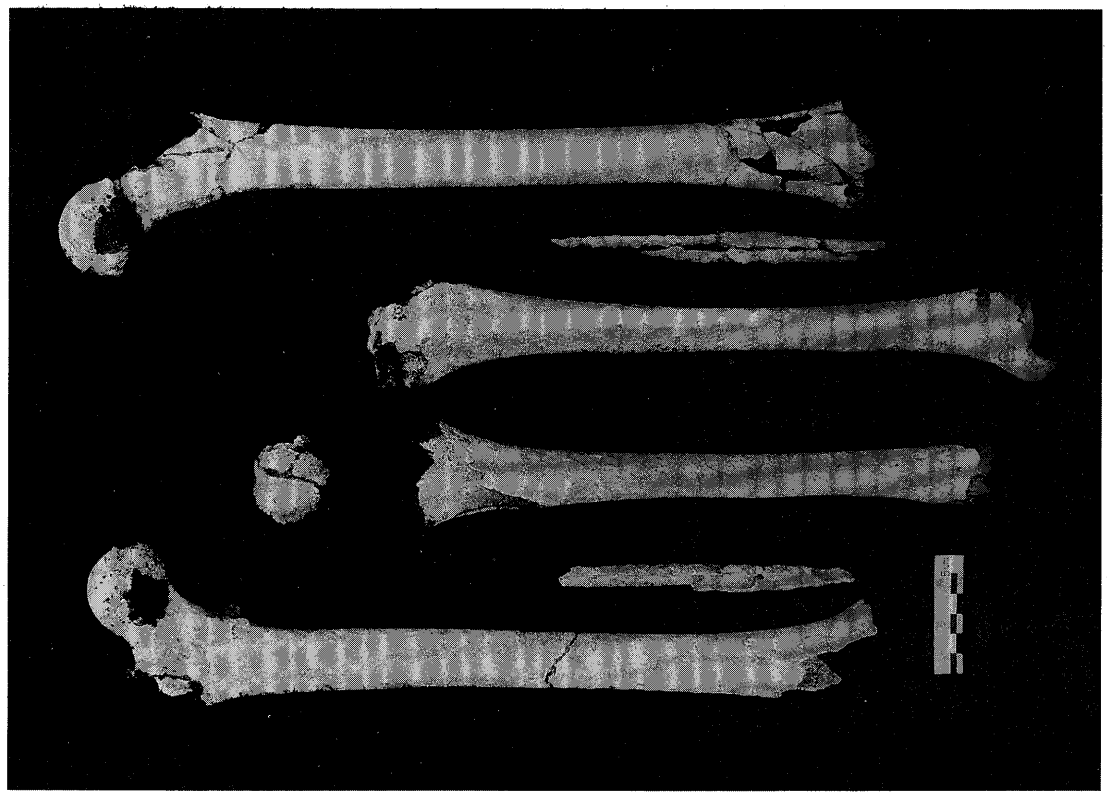
頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

成岡第2号古墳出土人骨（男性・老年）

(The Narioka skeleton excavated from the Narioka Tumulus No. 2, senile male)

図版32

上肢骨（Bones of the upper limb）



下肢骨（Bones of the lower limb）

成岡第２号古墳出土人骨（男性・老年）

(The Narioka skeleton excavated from the Narioka Tumulus No. 2, senile male)

報告書抄録

ふりがな	なりおかAちてんいせき　　－ひろしましあきくなかのひがしにちょうめしょざい－
書名	成岡Ａ地点遺跡　－広島市安芸区中野東二丁目所在－
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第６集
編著者名	荒川正己，田村規充
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町４番17号　アステールプラザ内
発行年月日	西暦2001年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なりおかAちてんいせき 成岡Ａ地点遺跡	ひろしまけんひろしましあきく 広島県広島市安芸区 なかのひがしにちょうめ 中野東二丁目	34107	―	34° 23’ 14”	132° 34’ 20”	19990721 ～ 20000225	1,100m²	一般国道2号（東広島バイパス）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
成岡Ａ地点遺跡	古墳 集落	古墳時代 弥生時代	古墳　３基 住居跡　３軒 掘立柱建物跡１棟 土坑　５基 テラス状遺構3か所	弥生土器 土師器 鉄器 石器 玉類	古墳時代初頭の古墳第２号古墳石棺内から人骨出土

(財) 広島市文化財団発掘調査報告書　第６集

成　岡　Ａ　地　点　遺　跡

―広島市安芸区中野東二丁目所在―

２００１年３月

編集発行　財団法人 広島市文化財団
〒730-0812　広島市中区加古町４番17号
TEL　(082) ２４８－０４２７

印　　刷　電 子 印 刷 株 式 会 社
〒730-0853　広島市中区堺町一丁目１番５号